# 緋弾のアリア～瞬光の刃

月影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～瞬光の刃

【Ｎコード】
Ｎ５１６２Ｕ

【作者名】
月影

【あらすじ】
普通の学生として日々を過ごしていた無駄嫌いな少年が、ある事件をきっかけに転校を余儀なくされる。その転校先は武偵を育てる育成機関『東京武偵校』。せめて、何事も無く平穏に卒業できればと言う願いも虚しく、青年は親友とある少女の出会いに立会い、更には二人が辿る運命にすら巻き込まれていく

## １ｓｔ　ｂｕｌｌｅｔ－『女の子が降って来た日』（前書き）

原作を読みながらの更新となるので更新時期は不定期です。周一で更新できればと思っています。と言うわけでプロローグは原作より一年前の話です

## １ｓｔ　ｂｕｌｌｅｔ－『女の子が降って来た日』

なんて言うかさ……世の中に絶対、なんて言える事って少ないんだな。俺が思いつく範囲でも人間は食い物と水分と空気がなきゃ生きていけない、とか、日は昇りまた沈む、とか、人間は何時か死ぬ、とか、あとは…ダメだ、思いつかねぇ。

兎に角、常識的に考えてあり得ない事でもその可能性は必ずしも０％って訳じゃない。０％に限りなく近くても０％でないのならそれは起こり得る事なんだろう。例えば？そうだな、突然空から女の子が降って来てそれが主人公にとって壮大な物語の始まりになった、とか？物語の導入で主人公とヒロインの出会いにしてはよくある話だ。でも、物語は物語、俺は小説とかでそうしたシーンを見るたび現実ではそんなことあり得ねぇって思って“た”。うん、過去形だって……

「掴まって！！」

だって今、セーラー服とフリルが夢（？）の共演を果たした様な服を来た金髪の少女が現に空から降ってきながらこちらに手を伸ばしてきてたから

「よっしゃ、時間ぴったし。無駄な待ち時間も０！」

入学式も終わり、普通に授業が行われ始めてから間もない４月某日。その日はなんて事も無い普通の朝だった。俺は何時もの様に早起きしてうなじまで伸ばした茶色の髪（地毛）をゴムで根元から結って冷たい水で洗顔し目を覚ました後に自分の顔を鏡で見詰めそのなんて事の無い黒い目の上に眼鏡をかけ、朝食を作っていた。何時も通り各品が出来るまでの時間を考慮、逆算して調理を行って、どのメニューもほぼ同時に完成するように調理した。でないと他のメニューが出来るまでに無駄な待ち時間が出来て折角の朝飯が冷める。ベーコンエッグと簡単なサラダとコーンスープをテーブルに置いた瞬間、トースターから焼きあがったトーストが飛び出したのを見て言ったのが先の一言って訳。

「『武偵殺し』遂に一般市民に手を出し始める……か。全く、物騒なもんだな」

武偵、それは武装探偵の略でその名の通り、刀や銃で武装した探偵の事を指す。これは日々凶悪に、そして数を増やしている犯罪に対抗する為、新たに出来た国際資格の事。早い話が警察だけじゃ手に負えないからそれに準ずる人々を育成するか、って訳なんだろう。そして武偵が警察でない理由は武偵は依頼と報酬で動く。それこそ、警察じゃ見向きもしない様な下らん仕事でもだ、いわば便利屋だな。で、最近有名なのは武偵の乗り物とかに爆弾を仕掛けて、更に時には銃器の付いたラジコンヘリだとかで追い回して爆殺……もしくは海とかに誘導して突き落とすといった手口を使う爆弾魔、通称『武偵殺し』だ。そしてその『武偵殺し』はつい最近、一般の市民にも手を出し始め、先日遂に被害者が出たらしい

「やれやれ、まぁ俺には関係ないか」

そう、関係ない。たとえ　ニュースや新聞で戦争や犯罪について内容が取り上げられても一般的な人からしてみれば何処か現実味の無い、まるで遠い別世界の様な話に感じてしまうのは普通の感覚だ。少なくても普通の人間として“生きよう”と日々を普通に過ごしてきた俺にとってはそれも同じ事だった。テレビの左上に表示された時計を見て、俺はトーストの最後の一欠けらを口に放り込み家を出た。何時もの用に鞄と竹刀を入れておく袋を肩に担いで。そして何時もの様に学校に言って何時もの様に授業を聞いて、放課後には家に帰る……それだけの、筈だった

「コノチャリニハ、バクダンガ、シカケテアリ、ヤガリマス」

だと言うのに、なんなんだこの状況は!?帰り道、何気なくこいでいたチャリから聞こえた機械音。一瞬、その言葉の意味が理解できずポカンとしたが直後に

「ゲンソクシタリ、チャリヲオリタリシテモバクハツ、シ、ヤガリマス。タスケヲモトメテモイケマセン。ケータイトカヲツカッタバアイデモバクハツ、シヤガリマス」

やがりますやがりますうっせぇ!!そんな事を心中で叫びながら俺はペダルをこぐ速度を上げた。そして片手で手が届く範囲でチャリを調べると……うん、何かあった、サドルの裏に。明らかにチャ

リのパーツとは別のモノが。間違いなく『武偵殺し』が良くやる手口だ。

「全く……今日は厄日か！」

とにかく、こんな処でドカンというわけにも行かない。とにかくまずは人けの無い所に移動しないと。自分の命の危機なのによく周りの事を考えられるな。これも遺伝か、そう考えながらとりあえずこの間廃棄された火力発電所跡地にチャリを走らせた

（恐らく、あいつが件の『武偵殺し』なんだろうな……）

狙い通り、誰も居ない跡地の敷地内を回りながら俺はちらりとある方向に目を向ける。そこに停車している一台の車、その窓からこちらを見ている人影。覆面をしている為表情までは見えないが覆面の中から覗く目が面白そうに細くなっている。恐らく、こちらが必死に足掻いているのを見て楽しんでいるのだろう。所謂、愉快犯という奴だ

（人も居ないし、“これ”を使えばあいつを叩きのめす事は出来る。けどその前にこの状態を何とかしないと）

この状態と言うのは爆弾チャリに乗せられている状態の事だ。このチャリからどうにか脱出しないと動きようが無い。いっそチャリから飛び降りればとも考えたが、人やモノには慣性の法則が働く。自分では横に飛び降りたつもりでもその法則に習い、恐らく地面に落ちるまでの間チャリと平走する事になる。もし、その間に爆発すれば俺も確実に巻き込まれる

（さて、どうするか……ん？）

発電所跡地に建つ、恐らく事務所的な役割を果たしていたと思われる建物。その屋上に誰かが立っていた

（何で、こんな所に人が！？）

やがてその建物に近かずいてきた時、その人影は突然そこから飛び降りて

「掴まって！！」

ビルの屋上のフェンスにくくり付けられたワイヤー、その先端のフックに片足を引っ掛けて、片手でワイヤーに掴まっている。そしてそのままターザンの様に弧を描きながらこちらに近づいてきながら手を伸ばしてくる。そしてすれ違いざまに俺はその手を掴むと俺の体はそのままチャリを離れて、少し間だけ宙に浮かぶ。数秒ほどチャリは人を乗せてないまま走り、やがてバランスを失い倒れると同時に、爆発した。

それから暫くワイヤーはゆらゆらと揺れていたが、運動エネルギーが無くなりその振れ幅が小さくなってきた辺りで俺は手を放して地面に着地した。それに続いて、俺を助けてくれた人物もワイヤーから足を下ろして地面に着地する

「っと。大丈夫だった？」

「何とか、な。お陰で助かった」

さっきの爆発で真っ黒焦げになり、未だに煙を上げている自転車を見ながら俺は言葉を返した

「それにしても災難だったねぇ、君も。いきなり武偵殺しなんかに襲われちゃってさ。なんか他人の恨みでも買っちゃってたとか？」

「いや、恐らくあいつは――」

そこから先の言葉は続かなかった、いや、続けられなかったって方が正しい。俺は突然、その少女に手を引かれ、建物の中に引き込まれた。直後に響いた銃撃音、ドアの脇の壁に背を預ける形で立ちながら僅かに顔だけを出して外を伺うと…居た。さっきまで車に乗っていた覆面野郎が手に持ったマシンガンの銃口をこちらに向けている

「爆弾じゃ仕留められなかったから直接殺しに来たって訳ね」

少女はそう言いながら、ドイツ製の拳銃ワルサーＰ９９を両手に持つ。もしかしてこちらも犯罪者？と言う考えが頭に過ぎるが直ぐに否定した。着ている制服はかなり見た目が改造されているが恐らく防弾制服。つまり

「君は、武偵なのか？」

「そっ、東京武偵高『探偵科』（インケスタ）一年、峰理子。よろしくね」

ドアを挟んで反対側の壁に背を向けた少女、理子は軽くウィンクをしてきた。思えばこの一件が全ての始まりだった。俺の日常が大きく変化した全ての……きっかけ

## 2nd bullet ー『始まりの一戦が導く新たな日常』

「でっ、どうなの？　実際の所」

「何が？」

「さっきの話だよ。何か、恨みを買う様な事でもしたの？」

理子と言う武偵の少女が時より出入り口から姿を見せて拳銃を放ち、そしてそれに反撃するようにマシンガンを乱射する武偵殺し。一旦姿を引っ込め、弾をリロードする理子が思い出したように尋ねてきた。誰か、ましてや武偵殺しの恨みを買う様な事なんてした記憶は無い。まぁ、知らない内に何かしたって可能性は０じゃないが……

「……あ」

さっきは単純な愉快犯、だと思っていたが頭が落ち着いてくる内にあいつが俺を狙う理由が一つだけ思いついた。

「ん？」

「やっぱし……親絡み、かな？　俺の両親、夫婦で武偵やってっから」

しかも、そこそこ……いや、結構名のしれている

「なるほどなるほど。つまり、あの武偵殺しさんは君の両親と何かあってその私怨で息子である君を狙ってきたわけだね」

「だとしたら、はた迷惑な話以外なにものでもないがな……」

何が悲しくて、親のしでかした事で息子たる俺が狙われなければいけないのやら

「教科書や鞄は吹き飛ぶし、チャリは真っ黒焦げだし、全く最悪だっつーの」

「気にするとこ其処なの？　命狙われるのに？」

「とりあえず、あのチャリから逃れられれば如何にかする自信はあった」

幸い、『これ』は肌身離さずもっていたお陰で爆発には巻きこまれずに済んだ

「我に秘策ありって奴？　だったら、何で何もしないの？」

「だったら一つ頼まれてくれないか？」

「らじゃー！　で、理子は何をすればいいの？」

ワルサーを持った手でビシッと敬礼のポーズを取る理子。こんな状況だってのに意外と余裕そうだなこいつ……

「現時点では特に何も。ただ、少し法に触れる様な事をするからあいつを捕まえた後、武偵局の方で良い様に取り計らってくれると助かる」

そう言って、今まで肩に担いでいた竹刀入れのケースを開ける

「一体何を……？」

理子の言葉を待たずに俺はケースの中に入ってた竹刀とは似ても似つかない。蒼い柄に白色の鞘に収まった……一振りの刀を取り出し、鞘に収めたまま刃の根元部分を握った

「それって……」

「紛れも無く真剣だ。言ったろ？　法に触れるって」

その時、あちらも弾が切れたのか銃撃が止んだ。よし

「それじゃ、行くか」

「ちょ、ちょっと待って。武偵でもないキミが戦えるわけ――」

「安心しろ、剣の腕はお袋譲りだ。これでも無駄に鍛えられちゃいねーし、ちょっとした裏技もある」

理子の言葉を一遮り、一度目を閉じて精神を研ぎ澄ます。ただの人から剣士へと意識を切り替える。そしてそのまま建物の外に出た。直後、相手はリロードを終えてこちらに銃口を向ける。俺が目を閉じている事に一瞬、怪訝そうにするも俺が目を開くと同時に引き金を引く。飛んでくる銃弾、しかし――

「遅い……」

俺が閉じていた目を開いたときには、既に俺の目に映る世界は遅

くなっていた。いや、俺が五感で感じる世界が加速されていた。銃弾を鞘に収めたままの刀で弾く、そして最後の数発は刀を抜いて銃弾を縦に真っ二つにした。極端なスローモーションと言う訳ではない。けれど、少なくても今の俺の目には銃弾は高校生が投げた野球ボール程度の遅さに映っていた

アクセルセンシティブ、お袋の家系に遺伝していく超能力（ステルス）の一種。自身の強い闘志に呼応して発動するこの能力は反応速度と視覚や嗅覚と言った五感の感度と認知速度を上昇させる力。普通の人間に銃弾が見えないのは視覚が銃弾の存在を認知するよりも先に着弾するから。だが、感覚が加速された今の俺にはそれが見えるし自身の反応速度も上昇しているからいなす事も出来た

そしてそのまま相手との距離を詰め、自身の間合いに相手を捕らえ、柄の部分を使っての突きを相手の鳩尾に放ち怯ませる。続けてわき腹にミドルキック、その勢いを利用して上段後ろ回し蹴り、上から下へ振り下ろす形で鞘打ち

「時雨瞬光流、四葬天幻……これで仕舞いだ！」

そしてトドメに、打ち下ろしで前のめりになった相手の顔面にアッパーカットを叩き込みフィニッシュ。ゆっくりと後ろに倒れる武偵殺し。理子はその様子を呆然と眺めていたが

「理子？」

「あ……うん」

俺の一言で我に返るとこちらに近寄り、未だ気を失っている武偵

殺しの手に手錠をかける

「これで事件解決、っと。ったく、こいつの所為でこれまでに無いぐらい時間を無駄にした。完璧に遅刻じゃねぇか……」

腕時計を見ると、時間的に既に一限目の休み時間後半に入っている。今から走って向かったとしても二限目の授業も絶望的だ。と、こんな所で愚痴るのも時間の無駄。俺は刀をケースに戻すと大急ぎでその場を去ろうとした

「あっ、ちょっと待ってよ！」

その時、恐らく引渡しの為に警察か武偵局に連絡しおえた理子が携帯を仕舞い、声を掛けてきた

「時間もないし、俺はこの辺で失礼するよ。銃刀法違反に関してはさっき話したとおり、な」

じゃ、ヨロシク。っと最後に軽く手を挙げると

「そうじゃなくて、キミ、名前は？」

そう

「俺か、俺は……」

もう少し冷静になって考えるべきだった。この日、俺がした一番の失態は

「朱鷺弥……時雨（しぐれときや）　朱鷺弥だ」

この時、理子にフルネームで名乗ってしまった事だ。故に……

「初めまして、時雨朱鷺弥です。学科は強襲（アサルト）科。よろしくお願いします」

後日、俺の自宅に届いたのは東京武偵高への転入手続き書と銃刀法違反による司法取引の書類。どうやら理子は俺の事もきっちり報告、犯人をのした功績と俺の両親の事、そして理子の口添えもあり武偵高に転入する事を条件に不正帯刀に関しては不問とする事になったらしい……こうして、今まで普通の学生だった俺は両親の後を追うように武偵の世界へと足を踏み入れた

## ２ｎｄ　ｂｕｌｌｅｔ－『始まりの一戦が導く新たな日常』（後書き）

プロローグは原作から一年前。一巻で白雪の言ってた掴まった武偵殺し（偽者）の話を元に書きました。次にキャラ紹介を挟んでいよいよ原作第一巻に突入します

## キャラ紹介

時雨（しぐれ）　朱鷺弥（ときや）

所属：２年Ａ組強襲科
武器：刀（銘はあるらしいが本人は知らない）
Ｂランク武偵
特技：料理

本作品の主人公。茶色のうなじ付近まで伸びた茶色のミドルヘアー、それを根元で結っている髪型に黒色の鋭い目に眼鏡をかけた容姿。万事無駄が無いのが一番、と言うのが持論で「無駄の無い人生」早い話が平凡な人生設計を考えていたが武偵殺しの一件でそれが逆転。司法取引に基づき、武偵校に転入。波乱と荒事に満ちた日常に足を踏み入れる事となった。武偵として世界的に有名な両親の事は尊敬はしているが自分は自分と言う意思が固く、周りが何を言おうと気に止めない（本人曰く両親と自分を比べても意味無い、無駄だと言う事らしい）

キンジとは寮のお隣さんで平凡を望むもの同士、そして両親とキンジの兄が仕事仲間である事もあり、早い段階で意気投合し親友となっている。アクセルセンシティブと言う特殊能力を持っているがせめて武偵として目立たない様にと、ＳＳＲ（超能力捜査研究科）には所属せず強襲科を選んだ。お袋から時雨瞬光流と呼ばれる帯刀術と抜刀術の二つからなる剣術を体得してる。不正帯刀していた理由にかんしては母からこの刀は肌身離さず持っている様に言われたからであり、その詳しい理由は本人も知らない

## １ｓｔ　ｂｕｌｌｅｔ－『女の子が降って来た日、再来』（前書き）

ここからは基本主人公視点ですが時より視点を変える事もあります

## １ｓｔ　ｂｕｌｌｅｔ－『女の子が降って来た日、再来』

「トキヤ……おい、トキヤ！」

「えっ？　ああ、わりぃ、少し昔のことを思い出してた」

一年前（プロローグ）の事を思い出してた俺の耳に飛び込んできた声。一瞬だけハッとした後に自分の目の前に居る親友に返事を返した。すると、その親友は顔を少し青くして

「ちょっと待て！　それって所謂、走馬灯って奴かっ！？」

「走馬灯とはちと違うな。一年前の事だけだし、それに走馬灯は死に際の人の意思に関係なく起こる現象だ。俺の場合は意図的に思い出してた。だから違う」

「ったく、よくもまぁこんな状況でそんな事出来るな……」

何処か呆れたような声を挙げる親友

「いや、むしろこんな状況だからと言うか……」

そう言って後ろの方に目を向けると其処には

「ソノチャリニハ、バクダンガシカケテアリ、ヤガリマス」

こんな、激しくデジャブを感じさせるこの状況じゃな……

今日の朝、珍しく寝坊をしてしまった。そう、ホントに珍しくだ。

宿題やレポートに追われていた訳でもない、夜更かしをした訳でも無い。何時も通り、明日の朝食の仕込みをして、何時も通りの時間に寝た。だと言うのに寝坊した。ハッキリ言って時計を見た時は一瞬、我を疑ったな。大急ぎで準備をしたけど結局、何時もの通学バスの逃してしまった。だから同じくバスを逃した親友、遠山キンジにコーラ一本を運賃代わりにキンジのチャリに二ケツして通学をしてたけど

「二度あることは三度ある、とは言うけど……つまりは一度あった事も二度あるって事だな」

その通学途中、突然二輪の小型の乗り物。セグウェイに取り付けられたメガホンから一年前に聞いた機械音声を耳にする事になった。早い話が、武偵殺しの被害に再度、会ってしまった訳だ。今回はチャリをこいでいるのはキンジなのだから飛び降りて助けを呼びにいけば、と思うだろう。実際、俺らもそうしようとした。が、いざチャリから脱出しようとした瞬間、同じくセグウェイに取り付けられたイスラエル製の機関銃、ＵＺＩの威嚇射撃であえなく断念せざるを得ない状況になっている。やがて、チャリはそのまま、人けの無い武偵校の第二グラウンド付近に差し掛かる。どうやらキンジも俺同様、まずは人けの無い所に移動するらしい。

「……？」

その時、キンジはふとある一点を見つめていた第二グラウンドの近く、７階建てのビル、女子寮の屋上に誰かが立っている。武偵校のセーラー服を着た少女だ。ピンクのツインテールが風になびいてゆれている

「ホント……どこまでもデジャヴな展開だな」

そして、予想通りその少女も屋上から飛び降りた。理子の時と違うのは彼女はワイヤーではなく背に付けたパラグライダーを開き、こちらに降りてくる。やがて、ブレークコードから両手を離すとホルスターから大型のオートマチック。白と黒のガバメントを手に持ち、その銃口をセグウェイに向ける

「そこの二人、さっさと頭を降ろしなさい！」

そして、俺とキンジの返事も待たずに発砲。ブレークコードから手を放した不安定な状態なのに撃ち出された銃弾は全弾正確にセグウェイを撃ち抜き、破壊した。と思うと直ぐに銃を収め、パラグライダーを操作し、自転車を追い抜くと直ぐにUターン今度はこちらに向かってくる

「さっさと離れろ！　このチャリには爆弾が仕掛けられてるんだ。あんたも巻き込まれるぞ」

「バカッ！」

彼女を巻き込むまいとキンジが叫ぶも少女はそれを一蹴。そしてブレークコードに足を引っ掛け、逆さ吊りの状態になり、手を広げる

「武偵憲章第1条っ！　『仲間を信じ、仲間を助けよ』――いくわよっ！」

そして、チャリとパラグライダーがすれ違う直前。キンジは少女に抱きつく形でチャリから離れ、俺はワンテンポ遅れてキンジにしがみつく形でチャリから離れた。そしてあの時同様、こぎ手の居なくなったチャリは暫く走った所で、倒れ爆発。宙に居た俺達は爆風に

煽られ、そのまま入り口の空いていた体育倉庫に突っ込んで、そこで意識は一度、途切れた

「へ……へ、へんた～～～いっ！！！」

「んっ……てて」

少女の大声に目を覚ますと視界が上下逆転していた。いや、正確には俺が上下逆転していたのか。体育倉庫内にあった跳び箱に足がもたれかかる形で気絶していたらしい。身体を起こして声のした方を振り返ると

「この痴漢！　変態っ！　恩知らず～～～っ！！」

さっきの女の子が赤面＋涙目でキンジをポカポカと叩いていた。言葉から察するにキンジがこの少女に何かやったと考えるべき所だが、生憎、キンジはそういうのは自分に断固禁止している身だ。間違っても何かするとは思えない。恐らくは単純な勘違いと言う奴だろう。外野的には暫く傍観しているのが面白いのだが、まぁ、そろそろ助け舟を出してやるかと口を開こうとした直後、車輪の駆動音がし、続けて聞こえてきた銃声。俺は咄嗟に跳び箱をの後ろに隠れた。たかが跳び箱が盾になるのかと思うだろうが、実はなったりする。万一、武偵校内で戦闘になった時の為に学校内の備品の殆どが防弾仕様となっている。当然、この跳び箱もそうだ。残りの二人も跳び箱

の中に入り、銃撃をやり過ごす

「他にも居たのね……」

「居たって何が？」

「あの二輪。武偵殺しのオモチャよ」

武偵殺し？そいつは確か去年、俺と理子が捕まえた筈。それじゃ、模倣犯か？

「イスラエルＩＭＩ社製のＵＺＩ、９ミリパラベラム弾、秒間１０連射。この跳び箱が防弾じゃなかったらとっくにあの世行きよ」

「でも、あれはあんたが撃って吹っ飛んだ筈……」

直後、まるで自分の存在をアピールするかのように再び、銃弾の嵐が飛んでくる

「まだ居たって、言ったでしょ。ざっと7台は居るわ」

そう言って、少女は二丁のガバメントを手に持って

「ほら、あんた達も手伝いなさい。仮にも武偵校の生徒なんでしょ？」

「む、無理だって……」

「俺は銃器じゃなくて、刀を使ってるんだが……」

「早くっ！　私の銃だけじゃ火力負けする！」

そう言って、跳び箱から上半身だけを出して応戦を開始する。と言われても、流石にキンジや理子以外の人の前でアクセルセンシティブを使う訳にもいかんし。と言うか……

（キンジのあれは流石にアウトなんじゃねぇか？）

本人は応戦に夢中になって気づいてないが、今キンジの顔には少女の胸が押し付けられた状態にある。幾ら、少女の胸が小さいと言ってもあれだけべったりと押し付けられて興奮しない筈がない。やがて、少女は一度跳び箱に身を隠すとマガジンをリロード、再度応戦。セグウェイの一台に何発か銃弾がヒットすると二輪は一旦、門の向こうに消えた。

「……やったか？」

「一時的に追い払っただけよ。奴ら並木の向こうに隠れたけどきっとまた出てくるわ」

「強い子だ、それだけでも上出来だよ」

さっきと違い落ち着き払ったキンジの声。そしてキンジはいきなり少女をお姫様抱っこして立ち上がった。突然の事に少女はキョトンとしていたが

「ご褒美だ。お姫様」

そう囁かれた直後、一気に顔を赤くした。と言うか

「完璧にスイッチ入ったっぽいな。ヒスキー」

「トキヤ、お姫様の前でそのダサい呼び方はやめてくれないか」

そう言って、少女を抱っこしたまま跳び箱から出る。直後、再び銃弾の嵐が飛んでくるがキンジは素早く死角に移動すると近くに積んであったマットの上に彼女を座らせる

「な、な、何っ！？」

「姫はこのお席でごゆっくり。銃なんて振り回すのは俺だけでいいだろ？」

そう言って、さり気なく彼女の手から銃を取り上げるとホルスターに戻した

「あ、あんた一体いきなりどうしたのよ！？　おかしくなっちゃったの？」

「やれやれ、ここは死角だってのに。撃つだけ弾の無駄だ」

そう言って呆れながら、こちらを振り返る。その時俺とキンジの目が合ったが

「俺は遠慮させてもらうよ。せいぜいお姫様にカッコいい所見せてきな」

「なら、お言葉に甘えて」

俺は跳び箱に隠れたまま、ヒラヒラと手を振ると、キンジはフッ

と笑った後にそのまま倉庫から出ようとした

「危ない。撃たれるわっ！」

「アリアが撃たれるよりマシさ」

「だから、何さっきから急にキャラ変えてんのよ！　何するつもりっ！？」

そこで、キンジは一旦足を止めると、少女、アリアの方を振り向いて

「アリアを……守る」

「……っ！？」

その一言に更に顔を赤くしたアリア。ああ、遂に二人目のヒスキーの犠牲者が出たか……

「……」

無言のまま、倉庫から外に出たキンジ。当然ながら二輪はキンジを射殺しようと銃弾を撃つ。が、秒間で１０連発するＵＺＩだがこの時は銃弾を一発しか撃てなかった。それぞれの一発目、計７発の銃弾を正確に避けるとキンジはカウンターで自分の愛銃、特殊改造でフルオートになった上に三点バースト化（一回のトリガーで三連射できる）したイタリア製ベレッタＭ９２のトリガーを引く。こちらも放たれた銃弾は７発。そしてその全てが全ＵＺＩの銃口に吸い込まれ、爆散した

「いい狙いだ……」

「キンジ、それ皮肉か？」

そして、ＵＺＩが最後に付けた弾痕。さっきまで自分の頭部があった場所の壁を見てそう呟くと倉庫の中に戻ってきて、俺も倉庫の外に出てスクラップになった二輪を見ながら言葉を返し後に続く。そんなキンジの姿をいつの間にかさっきの跳び箱の中に戻ってきていたアリアが呆然と見守っていたが

「お、恩になんて着ないわよ。あんなオモチャアタシ一人でも如何にか出来た。これはホントよ、ホントのホント」

そう言って、跳び箱の中に引っ込んだ、かと思ったらまるでもぐらたたきのもぐらよろしく跳び箱から出たり入ったりしている

「それに、こんな事でさっきの事をうやむやにしようだなんてそうはいかないわよ。さっきのは強制猥褻、犯罪よっ！」

「アリア、それは悲しい誤解だ。あれは不可抗力だよ」

キンジがズボンのベルトを外してアリアに渡すとアリアはそれを受け取り引っ込んだかと思うと、今度は跳び箱から出てきた。スカートの上にベルト巻いていた辺り、さっきの攻防でスカートが壊れたらしい

「ふ、不可抗力って！？　あ、あんた私が気絶している隙にふ、ふ、服をぬぬ、脱がそうとしてたじゃない！！」

相変わらず顔を真っ赤にしたままなんだか変わったリズムの地団

駄を踏みながら猛講義。

「そ、それに……胸、見たぁっ！！　それは事実！　強猥の現行犯！！　あ、あんた何するつもりだったのよ！？　責任、取んなさいよぉ！！」

「アリア、冷静になって考えよう。俺は高2だ。年の離れた中学生を脱がすわけないだろ？」

いや、中にはそっちの趣味がある奴も居るけどな……なんて、ツッコミを入れたら恐らく自体が面白くなるだろうが同時にややこしくなるので放置、はっきし言って登校時間ギリギリだ

「あ、アタシは中学生じゃないっ！！」

俺がツッコミを入れずともアリアは更に怒り心頭。治まる気配はまるでなし。そしてキンジの次の一言で更に自体は悪化する

「悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だったか。すごいなアリアちゃんはその年で……」

と、そこで突然アリアが俯いて拳をワナワナと振るわせ始め、キンジも何事かと思い言葉を止めた

「……こんな奴、助けるんじゃなかった」

そして遂にアリアは銃を抜くと

「私は……高2だぁーーーっ！！」

キンジの足元に向けて引き金を引く。いや、引こうとするが、逆に接近したキンジが腕を両脇に抱え込んで封じる。それでもせめてもの抵抗にと引き金を引くが、さっきの二輪との銃撃戦もあり直ぐに弾が切れた。かと、思ったら今度は柔道の跳ね腰の要領でキンジを投げ飛ばす

「徒手格闘もできるのか」

が、キンジは余裕で受身を取ると逆に感心した様な声を上げる

「覚悟しなさい。私は犯人を逃がした事なんて一度も……あれ？」

「探し物は、これかい？」

しかし、キンジとてただでやられはしない。投げられる直前、アリアから銃の弾倉（マガジン）を奪い取っていた

「あーっ！　私のマガジン！！」

「ゴメンよ……」

そしてそのままマガジンを遠くに投げ飛ばす。これで、詰み。かと思ったら

「もう、許さない。ひざまづいても、泣いて謝ってももう許さない！！」

アリアは銃を仕舞うと今度は背中の方に手を回し、制服の下にある鞘から寸詰めした二本の刀を抜いて接近戦に移行した。二丁銃に二刀流に徒手格闘、まるで現代のバトルマスターだな

「強猥男は神妙に――わきゃっ！」

が、その途中地面に落ちていた何かに足を滑らせ盛大にこけた

「ゴメンよ。少し撒かせてもらった」

キンジの手に持っているのはさっき盗んだマガジンの中の銃弾。マガジンを投げたと同時に床に巻いたらしい

「こ、この……うきゃっ！」

目を回しながらも何とか立ち上がろうとするが周りは銃弾だらけ。結局、再び足を滑らせこけるだけ

「トキヤ、時間も無いし急ぐぞ」

「っと、そうでした。あー、こりゃ朝の始業式は遅刻確定だな」

「待てっ！！　この卑怯者！　でっかい風穴あけてやるんだからぁっ！！！」

そう言って、俺達はその場を後にし、その背後から聞こえるアリアの叫び。東京武偵校二年始業式の日そんな桜の舞い散る中朝のこの出会いが更なる波乱の始まりを示す事を俺はまだ、知らない

## １ｓｔ　ｂｕｌｌｅｔ－『女の子が降って来た日、再来』（後書き）

原作がどういう結末になるかは判りませんが基本内の小説ではキンジ×アリアはデフォなので今回主人公は傍観者になってもらいました。無論、後々見せ場は作りますよ

## 2nd bullet―『来襲！風穴娘、神崎・H・アリア』

「ハァ～」

物凄く表情の暗いキンジ、アリアとの武偵殺しのオモチャとの戦いの後からずっとこの調子だ

「あ、あはははは……し、しかしあれだな。なんと言うか一年ぶりに見たよヒステリアモードのキンジ」

ヒステリア・サヴァン・シンドローム、通称ＨＳＳ、キンジはヒステリアモードと呼んでいる。キンジの家系に伝わる遺伝的体質でこれが発動すると中枢神経系の活動が活発化、つまりは物凄くパワーアップする体質らしい。しかもそのパワーアップは俺のアクセルセンシティブ（以後ＡＳ）よりすごい。ＡＳの場合、投げた野球ボール程度の速さに見える銃弾もＨＳＳだとスーパースローで再生された様なスピードにみえるし、そうした能力だけでなく思考能力や、“ある一つの事柄”を除いた判断能力までパワーアップするらしい。が、この能力発動のトリガーと他の作用が厄介らしく、その所為でキンジはこの能力を嫌っている

「何がお姫様だよ何がご褒美だよ……」

ヒステリアモードの発動トリガー、それは性的興奮。早い話が異性に対して強い興奮状態になると発動するらしい。が、キンジがヒステリアモードを嫌う理由は其処じゃない。何でもヒステリアモード中は目の前の女性を何が何でも守りたくなるらしい、ある一つの事柄とはずばりそれの事。実際、キンジは中学の時、クラスメートの女性にヒステリアモードを良い様に利用された過去を持つ。イジ

メの復讐やセクハラ教師への仕返しなど等本当に女子生徒の方に非が無いかそれを判断せずにその女性の為に動いてしまます訳だ。その所為もあってキンジは女性との接触を全力で避けている。女性嫌いというわけじゃないがヒステリアモードの事を知られ利用されるのを恐れている

更にヒステリアモードになると言動まで変化する。早い話が物凄くキザなキャラとなるのだ。しかも、物語に出て来るような嫌な奴タイプのキザキャラじゃなく、女性心をくすぐるモテるタイプのキザキャラと化す。実際、さっきのアリアという少女もヒスキー（“ヒス”テリアモードの“キ”ンジ）の被害者（ヒスキーに助けられた事でキンジを好きになってしまった女性）になったし。一年前に星伽白雪と言う幼なじみも不良に追われてた所ヒスキーに助けられて以来、軽くキャラ崩壊を起こすほどまでに惚れこんでいる

「ま、まぁ、アリアって子も気づいた様子は無かったし、今後気を付けりゃいいって」

と、何とかキンジを慰めようと奮闘している内に2年A組、俺たちの新しいクラスに到着し教室に入った瞬間

「あたし、あいつの隣が良い」

教室に入って早々、聞こえてきた聞き覚えのある声。そしてそこに居たのは

『神崎・H・アリア』黒板にそう書かれた名前。そう、ついさっきあったばかりの少女、アリアだった

「うわー、なんと言うテンプレな展開。同じクラスだったのか……」

と、俺は軽く驚く程度だったがキンジの方は顔を青くし表情が引きつっている。そして周りのクラスメート達も信じられないと言う表情でその目線をキンジに向けている。その時

「良かったなー、キンジ。何だか知らないがお前にも春が来たらしいぞ」

と、話しかけてきたのは『車輌科（ロジ）』に所属する、ツンツン頭の青年、武藤剛気。スクーターからロケットまで何でも操縦できると言うと特技を持つ優等生で俺とキンジとは一年の頃からの親友でもある。人当たりも良くて良い奴なのだが何故かモテない三枚目な人物だ

「せんせー！　俺、くじでキンジの隣でしたけど転入生さんに席変わりまーす！！」

そう、自分を差し置いて親友に春が来ても（激しく勘違いだが）それを妬まず素直に祝福できる程に良い奴なのに、だ。まぁ、多少面白がってる節もあるのだろうが

「あら、そう。それじゃ遠山さんの隣は神崎さんって事で」

「いや、その先生……」

と、キンジが何か言おうとした時、アリアがキンジの方にゆっくりと近づいてきた。そして何かをキンジに投げ渡す

「これ、さっきのベルト」

それはスカートが壊れた時にキンジがアリアに渡したスカートだ。

そしてキンジがそれをキャッチした瞬間、ガタッと誰かが勢い良く立ち上がった音がした

「理子、判った！　判っちゃった！　これフラグバッキバキに立ってるよ！！」

「ハァ？」

そこに居たのは峰理子、俺を武偵の世界に引き込んだ張本人。その理子は目を閉じて丁度眉毛の上辺りに人差し指を当てると、自分の推理を披露し出す

「キー君ベルトしてない。そのベルトをツインテールさんが持ってきた。この謎はつまり、キー君が彼女の所でベルトを取る様な何かしたって事！　そしてそのベルトを部屋に忘れてきたんだ！」

キャーと歓声を上げる理子。まぁ、確かにキンジはアリアの前でベルトを実際に外したけど恐らく理子の考えている何かとは遠くかけ離れているに違いない。が、事情を知らないクラスメートからしてみれば行き着く答えは一つしかなく

「なるほど、つまりは熱い恋愛中と」

「キンジ、こんな可愛い子と何時の間に！？」

「影の薄い奴だと思っていたのに！」

「女に興味無かったんじゃないの！？」

「……フケツ」

等と口々に盛り上がるクラス。余りに騒がしくなってきたので流石の先生も止めに入ろうとしたが、その前に教室に響いた６つの銃声がクラスを黙らせた。その発信源は今、左右に向けて銃口を構えていたアリア本人。しかもそのうち２発は理子の頭スレスレを通過し、防弾ガラスにヒビを入れた。理子も口をあんぐりとあけて冷や汗を掻いてその場にペタンと座り込んだ。やがて、アリアは真っ赤になった顔を上げ

「れ、恋愛なんてくだらないっ！　全員覚えておきなさい、そういうバカな事を言う奴は」

そして黒のガバメントを天井に向けて

「風穴開けるわよっ！！」

トドメとばかりに発砲、天井の破片がパラパラと落ちてきたのだった

「今日は朝から散々だったな……」

まさか二度も同じ様な命の危機に陥るなんて……今日の夕食の仕込をしながら今日一日を俺は振り返っていた。まぁ、一番散々だったのはキンジなんだろうけど

「差し入れでも持って行ってやるか。確か、昨日作ったデザートが余ってた筈……」

エプロンを外して、テーブルの椅子にかけると冷蔵庫から昨日作った杏仁豆腐を取り出し、器に移しシロップと果物をトッピングしてラップをするとそのまま隣のキンジの部屋に向かう。勝手したたるは親友の家。鍵が空いているのを確認し部屋に上がり、居間に向かうと

「キンジ、あんた私の奴隷になりなさいっ！！」

キンジを指差してそう声高らかに言い放つアリアの姿。どうやら、キンジの災難はまだまだ続くらしい。と言うかアリアよ、ここは男子寮なんだが……

## ３ｒｄ　ｂｕｌｌｅｔ－『機械の様な少女と野太刀の少年』（前書き）

この話の後半からもう一人のオリジナルキャラクターを登場させます

## ３ｒｄ　ｂｕｌｌｅｔ－『機械の様な少女と野太刀の少年』

「ほら、さっさと飲み物ぐらい出しなさいよ無礼な奴ね」

と、キンジの部屋のソファーに腰を下ろしさっきキンジへの差し入れで持ってきた杏仁豆腐を食っているのは今日俺らのクラスに転入してきた少女、アリア

「コーヒー！　エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！　砂糖はカンナ！　一分以内！」

なんと言う無茶振り。因みにルンゴと言うのは同じ量の豆でも倍の量を抽出したものでドッピオというのは豆の分量で確か１４ｇを指している。カンナは……知らん。話からして砂糖の種類なんだろうが。キンジに至ってはルンゴの段階でちんぷんかんぷんらしく、キッチンに引っ込むとインスタントコーヒーをアリアに差し出した。そしてアリアも残りの杏仁豆腐を一気にかきこんで、コーヒーを手に取り、鼻を近づける

「これってホントにコーヒー？　ギリシャコーヒーにも似てるけど少し違う」

「味なんかどうでもいいだろ。それより、だ」

そしてキンジも自分の分のコーヒーを一口飲んでから

「今朝助けてくれた事は感謝しているし、怒らすような事を言ったのは謝る。でも、だからって何でここに押しかけてくる？」

「分らない？」

「分るかよ……」

「あんたならとっくに分ってると思ったのに。まぁいいわ、その内思い当たるでしょ」

と、何だかんだでコーヒーを全部飲み干すと

「お腹すいた。何か食べ物無いの？」

「普段、食べ物は下のコンビニで買ってる」

「コンビニってあの小さいスーパーよね。じゃあ行きましょ」

「じゃあってなんだよ？　じゃあって」

「バカね。食べ物を買いに行くのよ。ところで……」

全然、会話が成立しない……それにキンジががっくりとうな垂れているとまるで追い討ちをかける様にアリアはソファーから立ち上がり

「ところで、そこって『松本屋』のももまん売ってる？」

凶悪な犯罪者と戦う武偵にとって気をつけなければならないもの。それは闇、毒・・・そして女。最後の女と言うのは別に、女の色仕掛けに気をつけろ。と言う意味では無い。いや、男の武偵に限定してはそれも含まれるがそれよりも女の最大の武器は涙、と言うように女性の涙に母性をくすぐられほいほいとだまされてしまうケースは男女共通。故に異性ではなく女、なのだ。何故、こんな事をいきなり説明したか。それは横でハンバーグ弁当つつく親友とその向かいで幸せそうにももまん（6個目）を食べるアリアの姿が余りに対極的に見えたからだ。そして、遂にキンジは今まで黙っていた口を開く

「おい、神崎！」

「アリアでいいわよ」

「じゃ、アリア。さっきのドレイってのはどういう意味だ？」

「強襲科に転科して、私の作るパーティに入りなさい。私と一緒に武偵活動をするの」

「ハァッ？　なに言ってんだ。俺は強襲科が嫌で転科したんだぞ。それにそもそも武偵自体辞めるつもりだ。戻るなんて無理だ」

そう、キンジは今年度を最後に武偵校を転校するつもりで居る。可能なら俺もしたい所だが生憎、俺の場合は司法取引でここに居る。その為、転校＝刀の没収＋銃刀法違反に基づき2年近くの懲役か30万近くの罰金がもれなくおまけで付いてくる。別に転校するなら何処の科でも同じではとも思うだろうが強襲科は別名明日無き科とも呼ばれており、訓練や授業を休んで受けるクエスト、早い話が武偵活動の実践の中で毎年約3％の死者を出す。転校前に死ぬなんて

トンでもない。その為、キンジは武偵の中で一番マトモな探偵としての推理力を磨く探偵科に身を置いて危険から遠ざかっているという訳だ

「アタシは嫌いな言葉が三つあるわ」

「聞けよっ！　人の話」

無論、キンジの話なんか聞く気は無くアリアはももまんを持ってないほうの手で指折り数えながら言葉を続ける

「無理、疲れた、めんどくさい、これらは人間の持つ可能性を押しとどめる良くない言葉。あたしの前では二度と言わない事。いいわね？」

「いいわねも何も――」

「キンジのポジションはそうね……私と一緒にフロントがいいわ」

正に我が道突き進むとはこの事。言葉のキャッチボールが全く成り立ってない。キンジのなげたボールはことごとくスルー、もしくは投げ返すどころか打ち返す、早い話は一蹴して自分側からボールばかり投げてくる

「良くないっ！　そもそもなんで俺なんだ！？」

ヒステリアモード、だろうな確実に。それ自体は知らなくてもその時のキンジの強さに目をつけたのだろう……

「太陽は何故昇る？月は何故輝く？」

「ハァッ！？」

「キンジは質問が多すぎ。仮にも武偵なら自分で情報を集めて推理しないさい」

「もう時間が無いのよ。もし探していたのがあんただとすれば……」

と、そこでいきなりアリアの表情が曇り、俺とキンジは一瞬あっけに取られる。が、直ぐにアリアは元の調子に戻り

「兎に角、パーティには何が何でも入ってもらうわ。うんって言わないなら――」

「言わないなら？」

「またお決まりの風穴を開ける。か？」

なんて、冗談交じりに俺が口を開くと、アリアの目が一瞬だけ輝き

「泊まっていく！」

「ちょ、ちょっと待てっ！　泊まってくなんて無理だ」

ある意味、キンジにとっては風穴以上にタチの悪い手段に出た。ここは男子寮、つまり其処に女子生徒が遊びに来ていると言うだけでも周りから噂の種にされるし同居ともなれば教務科（マスターズ）、つまりは先生方も黙っていない。

「うるさい！泊まってくったら泊まってく。長期戦も想定済みよ！」

そう言ってアリアが指差したのは赤と白のチェック柄のトランク。どうやらキンジがパーティを組むまで本気で居座るつもりらしい。それどころかアリアはいきなりキレ気味になったかと思うと

「出てけっ！」

「えっ、えぇ～？」

「分からず屋はお仕置きよ！　外で頭冷やしてきなさい！」

そう言って無理やりに家主を追い出したのだった……。バンッ！と勢いよくドアを閉められ、追い出されたキンジと俺。暫く俺たちはその場に立ち尽くしていたが

「キンジ、俺の部屋来るか？今回は事情が事情だしおごるよ……」

「悪い……」

余りに不憫だったので声を掛けた。武偵校はクエストを受ける事で自分で金を稼げる為、学費関係を除いた食費とかの生活費に関してはほぼ自分持ちのなのだ。故に普段人に飯食わす際は一食、二，三百円食費代わりに取っているところだが今のキンジから金を取るのは激しくためらわれた

「えーっと、今日は……親子丼でいいか。鶏肉そろそろ賞味期限ヤバメだし」

作り置きしとけば明日の朝と夜もこれで済ませられる。と考えながら残りの食材を下ごしらえを始めた直後、部屋にチャイムの音が

鳴り響く。代わりに出ようとするキンジを軽く制して、ドアを開けると

「やっほー、トキ君！　今日も食べに来たよー」

そこに居たのは見間違う筈も無いヒラヒラ付きの改造制服に身を包んだ少女、理子。さっき男子棟に女子がいて良いのかと言った所だが実は俺の部屋にも彼女が時よりやってくる。目的は勿論、飯を食いにだ。これに関しては何時も通りの事なので理子から何時も通り代金を貰うと彼女を部屋に招き入れる

「あれ？　キー君も今日は“時雨食堂”で食べるの？」

と、言いながらキンジの隣に席を降ろす。と言うかなんだその時雨食堂って

「理子、確かに金はとってるけど家は食堂じゃないぞ」

「え～、別に食堂でもいいじゃない。トキ君のごはんおいしいし」

と、くふっと笑いながら理子は椅子に座って足をぶらぶらさせる。まぁ、別にいいけどな。

「ほれ、出来たぞ」

「いっただっきま～す！」

「いただきます」

それから約３０分後、完成した親子丼をテーブルに置いて、二人

が食べ始めたのを見て俺も箸を手に持った

「そういや、理子」

「んむ？」

「あんたに一つ頼みたい事があるんだ」

「んっ、なにかな？　キー君」

そして、食事の途中唐突にキンジが口を開くと理子が箸を加えたままそっちの方に目をやり、口の中のモノを飲み込むと先を促した

「実は、アリアについて調べて欲しいんだ」

「愛しの彼女の事を骨の髄まで知り尽くしたいと？　中々、キー君って独占欲強かったんだね」

「アホ、あんな奴彼女でもなんでもねぇよ」

「とか何とか言っちゃって～、ホントはアリアの事が気になって気になって仕方ないんでしょ～？」

このこの、っと肘でキンジを突き出す。理子がこの手の話題に敏感だったり場を更に盛り上げる（別名ややこしくする）のは何時もの事だがそれでも理子はアリアとキンジをどうにもくっつけたがるな

「兎に角、だ。アリアの事について調べられる範囲でいいから頼めるか？」

「ラジャーッ！　と、これって正規のものじゃないけど立派な依頼だよね？　勿論、報酬とかあるでしょ？」

「今度、ゲームソフトを買ってきてやる。リクエストは？」

「それじゃねそれじゃねぇ。『白黒物語』と『白詰草物語』と後、『妹ゴス』！」

そして、美少女ゲーム大好きと言う変わった趣味は二年になっても健在らしい……

「ここか……」

そんな時、トキヤの部屋の前に一人の少年が立っている。赤い瞳に黒色のツンツンヘアー、と言っても武藤みたいに完全に立っている訳でなく、軽く斜めに跳ねている程度だ。そして背中には自分の背丈とほぼ同じか少し長めの細身の刀身をした太刀、所謂大太刀がなめし皮の止め具で固定して背負われている。そして、少年は一瞬だけ躊躇してからそのまま部屋のチャイムを押した

「は～い」

それから数秒後、この部屋の主が水のはいったコップを片手に顔を出してきた。奥の方から良い匂いもする

「食事中に失礼します……時雨食堂って言うのは此処であってますか？」

「理子の奴……」

と、尋ねた瞬間いきなり目の前の青年はガクッと頭を下げたかと思うとワシャワシャと髪の毛をかき始めた。もしかして部屋、間違えた？

「とりあえずどんな話を聞いたか知らんが家は食堂じゃない。まぁ、やってる事は食堂と似てるがな」

「そうですか。それじゃデリバリーやお持ち帰りなんてやってない、ですよね？」

「そりゃあな。ってか、態々此処まで来たんだしお持ち帰りするぐらいなら食ってけよ。部屋に戻る間に冷めちまうし、時間の無駄だろ？」

そう言って、親指で部屋の奥を指差した。まぁ、彼女を連れ出せればそれでも良かったけど……

「いえ、食べるのは僕じゃないんです」

「どう言う事だ？」

「僕が武偵の活動で組んでいる人居るんですけど、その人の食生活が余りに酷くて……それでたまにはマトモなモノを食べてもらおうと思ったんです」

「マトモなモノって、まるで毎食変なモノでも食ってるみたいな言い方だな」

「毎日三食カロリーメイトです」

「……マジ？」

「マジです……」

すると、暫く彼は顎に指を当てて考え始めると

「……食器は洗って返せよ。何度も言うが家は食堂じゃねぇからな」

「ありがとうございます」

と、そこで一旦彼は部屋に引っ込んだ。そして

「理子！　お前な、なに勝手にある事ない事言いふらしてんだ！？」

「いや～、トキ君の小遣い稼ぎに協力しようと思って～」

「だから！　これで商売してるわけじゃねぇ！！」

一言二言会話が聞こえたかと思うと

「ほれっ、これでいいか？」

そう言ってラップが掛かった親子丼を差し出してきた。ラップをゴムで止めてその上にキチンと割り箸まで置いてある。食堂じゃないとか言ってる割には妥協はしないのか

「ありがとう……それじゃ」

昼に聞いたとおりに彼に代金を渡してその場を後にする。さて、彼女は食べてくれるだろうか

「レキ、少しいい？」

「……レンさん、どうかしましたか？」

そして足早に女子寮に向かい仕事仲間、狙撃科（スナイプ）の少女、レキの部屋を訪ねる。ノックをすると直ぐに扉が開き薄い緑色のショートカットヘアーの少女、レキが顔を覗かせた。肩には相変わらずレキの愛銃、ドラグノフ狙撃銃を背負い、案の定、その手にはカロリーメイト（チーズ味）が握られていた。そして、とりあえず彼女の後に続いて部屋に入る。普通、男が女の部屋に入るのはそれなりに緊張するのだがレキの部屋は部屋にはホントの意味で何も無い。ただ、自分の銃を整備する為の道具が置いてあるだけだ

「また、カロリーメイトを食べていたんだ」

「はい」

何時何があってもいい様に直ぐに食べれる物で栄養も取れる物、としてカロリーメイトを口にしている。ハッキリ言って仕事の打ち合わせでそれを見た時は少し驚いた

「ところでレンさん、それは？」

「ああ、そうだった。レキって何時もカロリーメイトばかり食べているから、たまにはと思ってね」

そう言って、手に持った親子丼をレキの前に置いて自分も壁に背を預ける形で座る。レキは相変わらず無言、無表情のままだ。と思ったらやがてこちらの方を一瞥するとドラグノフを自分の傍らに置いて箸を手に取るとそのまま親子丼を食べ始める。「おいしい？」なんて聞かない、恐らくレキの事だ。特に味なんて興味ないだろう。

お互いに無言のまま、何もしない。ただ一緒にいるだけ……。恋人同士というのはただ一緒にいるだけで幸せだ。という言葉を聞くがそれとも全然違う、そんな状態。けれども僕はこれでいいと思っている。“あの力”はもう使えなくなったけど僕の所為でこれ以上誰かが不幸になるのはゴメンだ。誰とも深くは関わらない、それが僕にとっても周りにとっても最適なんだ。

「ごちそうさまでした……」

そんな事を考えてるうちに食べ終わったらしく何時も通り感情の無い言葉でそう言うとどんぶりを僕に返してきた

「それじゃあ、僕はそろそろ戻るよ。仕事が決まったらまた連絡するから」

「はい」

そして、そのまま僕は部屋を後にする。互いに最低限の関わりしかもたなくて済むレキは僕、夕凪レンにとっては最適なパートナーなのだろう。いや、単なる仕事仲間か

## 4th bullet ー『時雨の息子』

「はぁ～、おいしかったぁ。トキ君、ご馳走様でした～」

「はいはい、お粗末さまでしたっと」

「じゃあね～」

無事に食事を終えるとキンジと理子を見送るべく玄関の外に出る。そして理子が真っ先に駆け足で階段を降りていくと

「あっ、キンちゃん」

「なんだ白雪か。どうしたんだ、その格好？」

入れ違いで今度は腰元まで伸びた黒いロングヘアーに長いまつげに優しそうな目つき、着物を着せたら諸に大和撫子と呼べる少女、キンジの幼なじみSSRの星伽白雪が巫女服に腰に刀を差した格好でこちらに小走りで近づいて来た。その手には紫色の布に包まれた何かを持っている

「あのね、授業がやっと終って……その急いで来たから。嫌だったら着替えてくるよ？」

「いや、別にいいから」

雪の様に白い肌をうっすらと頬に染めて終始恥ずかしそうに話していた白雪だが突然その顔が不安げになったかと思うと

「ところで、キンちゃん……今朝の周知メールに出ていた自転車爆破事件って、あれもしかして……キンちゃんの事？」

「あ、ああ。俺だよ」

「ニャ～～～～っ！！」

キンジがそう答えた瞬間、まるで猫の泣き声の様な悲鳴を挙げて白雪がその場に飛び上がった。キンジがトキヤも巻き込まれたけどな。と付け加えるも白雪は聞いておらず、目尻に涙を溜めるとキンジに詰め寄ってきた。どうやら完全に俺の事は既に眼中にないらしい

「だ、大丈夫っ！？　怪我とかしてなかった！？」

「無事だから安心しろ」

「ホッ、よかったぁ……」

と、ホッとしたのものつかの間。次の瞬間、白雪の周りに黒いオーラが現れたかと思うと

「それにしても許せない、キンちゃんを狙うなんて！　私、絶対に犯人を八つ裂きにしてコンクリ……じゃない。逮捕するよぉっ！！」

なるほど、八つ裂きにしてコンクリ詰めにして東京湾に沈めると来たか。件の犯人が白雪と出会わない事を祈ろう。その犯人の身の安全の為にも

「い、いいから。武偵はドンパチなんて日常茶飯事だろ？　この話はこれで終了。で、用事はなんだよ？」

すると、やっと黒いオーラが消えた白雪が包みに入った

「あ、あのね。これ、タケノコご飯……お夕飯に作ったの。あのね、私明日から合宿で恐山に行くから暫くキンちゃんのご飯作って上げられなくて」

「いや、大丈夫だよ。居ない間はコンビニか、トキヤのとこで食べるから。心配すんなよ今日だってトキヤのとこでご馳走になったし」

「そ、そうなんだ。……トキヤ君め、余計な事を」

あれ？何か最後、小声で不穏な言葉が混ざらなかったか？

「これで、ラストっと」

左手を柄底に添えての突きが鳩尾に入り、崩れ落ち気絶する男性。周りを見渡せば武藤や他の生徒も残りのメンバーを叩きのめしその手に手錠をかけている所だった。今、俺はクエストで麻薬の違法取引をしているヤクザの一団を逮捕しに来た所だ。そして、自分も泡を白目剥いて気絶しているリーダーの手首に手錠をかける。やがて――

「サンキュー、助かったよ。二人とも」

そして、武藤と俺をクエストに誘ってきた男子生徒がこちらに近づいてくる。今回、このクエストを受けた理由はずばりこの生徒、どうやら単位が少しやばいらしくかといって一人じゃ無理なので俺たちを誘ってきたという訳だ

「気にすんなって。こっちもいい小遣い稼ぎになったし、なっ？トキヤ」

「ああ、気にしなくていいさ」

「そう言ってもらえると助かるよ～。それにしても」

そこで言葉を区切るとクラスメートは辺りを見渡し始め

「それにしてもすごいな、これ全部トキヤがやったのか？」

「ん？ああ、まぁな」

犯人は大体十人強のグループでそのうち7人近くは俺が叩きのめした。相手が銃を使う相手ならＡＳを使わなければならなかったが幸い相手の武器はナイフのみ。特に問題はなかった

「すごいな。流石――」

また、この展開か。恐らくこの後にこいつが言う言葉は

「“時雨の息子”は格が違うな」

やっぱしな。強襲科の授業でもクエストでも俺が好成績を残せば総じて周りの連中はある単語を口にする、“時雨の息子”と。世界的に有名な武偵の夫婦、時雨劉山と時雨石流（せきる）、その息子。全く確かに血の繋がった家族だけれども俺の武偵としてのスキルは俺自身の物だ。まぁ、剣術に関してはお袋から仕込まれた物ではあるけど。とはいえ、もう慣れたし一々気にするだけ時間の無駄だからどうでもいいけどな。けれど

「おい、こいつの事をそんな風に言うのは少し失礼じゃないか？」

どうやら、彼はお気に召さなかったらしいな

「えっ、失礼って一応褒めたつもりなんだけど……」

「だったら時雨の息子、じゃなくて「武藤、別にいい」トキヤ？」

「俺は別にそう言われても気にもしねぇよ。それより、早いとこいつらを武偵局に引き渡そうぜ」

そう言うと、クラスメートは「お、おう」と歯切れが悪そうに答えたあと、武偵局に連絡すべく港の使われていない倉庫を後にした

「おい、ホントにいいのかトキヤ？　どんだけ頑張ってもどいつもこいつも時雨の息子、時雨の息子って悔しくないのか？」

「別に気にしてないって言っただろ？誰がなんと言おうと俺は時雨トキヤだ。それ以上でもそれ以下でもない」

そう、俺はトキヤだ。親父でもお袋でも無い。それを一々周りの

言葉を気にして自分と親を比べるなんて時間の無駄

「周りに認められなくたっていい。自分は自分だって事を自分自身でしっかりと認められればそれでいいさ」

「まぁ、トキヤがそういうってんならそれでいいけどよ……」

「いいんだって、さぁ、寮に戻ろうぜ？」

刀を腰に付けたホルダーに差して俺も工場を後にしようとした。その時

「トキヤ、お前が気にしないってんなら俺もこれ以上は何も言わないけどよ。でも、俺はちゃんとお前の事をトキヤとして見てるからな。ちゃんと自分自身を見てくれる人も居るって事も判っておいてくれよ」

別に時雨の息子としか見られなくてもなんとも思ってないのに、背後から聞こえてきた親友の言葉。それを聞くと少しだけ嬉しくなった。けれど、素直にありがとうと言うのも少し恥ずかしかったから

「ああ、サンキューな」

そう言って軽く流す様に俺も言葉を返した

「さすがは貴族様。身だしなみにもお気を使われていらっしゃるわけだ」

授業も終わり部屋に戻ると其処には予想通り、勝手したたる我が家のごとくソファーに横になり、手鏡を持って枝毛を探しているアリアの姿。そんなアリアに皮肉たっぷりに言葉を投げかけると髪を弄っていた手が止まる。恐らく「レディーの事を勝手に調べるなんてプライバシーの侵害！　風穴開けるわよっ！」と激昂すると思っていたが

「私の事を調べたのね」

振り返ったアリアの表情は意外にも不敵ながらも何処か嬉しそうな表情だった。そして台所に入り、水でも飲もうとした所にアリアも着いて来る

「神崎・H・アリア、母は日本人父親はイギリス人のハーフ。祖母がイギリス王室から貴族（デイム）の称号を授かった貴族一家、だろ？」

「やるわね。暫く泳がせた甲斐があったわ。他には」

まぁ、調べたのは理子なんだがな。と心の中でだけ付け加えてキンジは言葉を続ける

「ロンドン武偵局所属。１４歳からヨーロッパ各地で武偵として活動。格付けはＳランク、犯罪者を一人も逃がした事ないってもの本

当らしいな、９９回連続で」
「其処まで調べたんだ。でも、この間一人逃がしたわ」
「へ～、何処のどいつだ？」
「あんたよ」
タイミング悪く水を飲んでしまっていた為、その一言で思いっきりむせ返った
「俺は犯罪者じゃないぞ！　なんでカウントされてんだよっ！？」
「強猥したじゃないっ！　私にあんなケダモノみたいな真似してしらばっくれるつもりっ！？」
「だから、あれは不可抗力だって言ってんだろ！　それに俺は其処までの事はしてねぇっ！」
「うるさいっうるさいっ！　兎に角もう一度アサルトに戻って、私から逃げた時の実力を見せなさいっ！」
どうやら、あの時キチンと誤解を解かなかった所為でどうやら俺もアリアの中じゃ犯罪者にカウントされてるらしい。なんでこいつはそんな俺をパートナーにしたがるのか……と言うよりも
「うっ……あの時は偶然うまく逃げられただけだ。所詮俺はＥランクで……」
あの時の実力はあくまでヒステリアモードだったからでノーマル

な状態の俺じゃあんな事は出来ない。1分もしない内にこいつに捕まってただろう

「それは3学期の期末試験を受けなかったからでしょ？あんた入学試験の時はSランクだった！」

「なっ……その情報何処で。おわっ！？」

かと言ってヒステリアモードの事なんて口が裂けても言える訳が無い。どう言い逃れをしようか考えながら後ずさりしている内にキンジは部屋のソファーに躓き倒れこむ。そしてその隙をついてアリアはキンジに馬乗りになる

「つまり、あの時アタシから逃げられたのも偶然じゃなかったっ！そうでしょ！？」

「な、何を言われても今は無理だ」

「“今は”？　てことは何か条件があるの？」

やばい、ほんの僅かだがヒステリアモードの事に感づき始めた。そしていきなりアリアは俺に顔を近づけてくると

「言ってみなさいよ。必要なら協力するわ」

嫌だ……。ヒステリアモードになんてなりたくない。俺は捨てちまいたいんだ、あんな忌まわしいモードも武偵なんて仕事も。なのにこいつは俺の武偵の世界に縛り付けようとする、だったらっ！

「きゃっ！」

アリアをソファーの上に倒れるように押しのけ立ち上がる

「判った、戻ってやるよ強襲科に。ただし、組むのは一回だけだ」

アリアはソファーから体を起こすとそのままソファーに座り込み真剣な眼差しでこちらをみている

「最初に起きた事件を一件だけ一緒に解決してやる。転科はしない、自由履修でアサルトに行く、それでいいな？」

「いいわ。その一件であんたの実力を見極める事にする」

掛かった。様はアリアに俺はEランク相当の無能だって事を判らせればあっちだってあきらめてくれるだろう

「どんな小さな事件でも一件だぞ」

「その代わり、どんな大きな事件でも一件よ。手抜きなんかしたら風穴あけるから」

「ああ、約束する。全力でやってやるよ」

――――通常モードの俺で、な

こうして、キンジとアリアの一回限りのコンビが結成される事になる。そして、二人が挑む事件。それが後に続く大きな物語の第一幕をなる

## 5th bullet ―『お嬢様の初めてのゲーセン』

銃声と訓練用の模造刀がぶつかり合う音が響く強襲科の校舎。今日は装備科（アムド）の自由履修の授業を受けて、それからここに足を運んだ。別に変わりない何時も通りの事だ。そして――

「自由履修の帰りか？理子」

「あっ、トキ君。そりゃ、多少は戦えないと武偵としてやってられないでしょ。そういうトキ君も自由履修？」

「まぁな。今日は装備科で刀剣類武器の手入れについての授業だから受けてきた」

武偵校の生徒はそれぞれの学科に所属しては居る。けれど、だからと言って自分の所属する学科で訓練される能力だけじゃ武偵としてはやっていけない。特にソロや少数のパーティで武偵活動するなら、それだけ多くのスキルが必要とされる。その為、武偵校には単位はもらえないが他の学科の授業も受けれる自由履修と言う制度が設けられている。故に探偵科のこいつがたまにここに居るのも至って何時も通りだ

「あっ、そうだ。トキ君ってゲーセン行くよね？」

「ん？ああ、まぁ時よりキンジと一緒に寄ったりはするが」

「プレイコインの引換券貰ったからトキ君にあげる。今日までなんだけど、理子行かないから」

そう言って、理子は引換券を取り出してこちらに差し出してきた。制服のポケットでも鞄の中からでもない。自分の……身長の割には発育してる胸の隙間から

「あ、ああ。サンキュー、な」

その際に制服に隠れて僅かにハニーゴールドの下着が見えて、思わず視線をあさっての方に向ける

「ふふっ、じゃあね！」

そして、去っていく理子の姿。その際に見えたイタズラが成功した子供の様な表情。あいつ、わざとやったな。そして受け取った引換券を見ながら

「帰りにキンジでも誘ってくか」

「俺がどうかしたか？」

理子にからかわれるのも何時も通り。が、今日は何時も通りじゃ無い事が起きた。ここじゃもう決して聞くが無いと思っていた声が聞こえ、振り向くと

「キンジ？」

「おう……」

そこに居たのは紛れも無い遠山キンジその人。が、不服そうに鞄を肩に担いでいる

「珍しいな。お前が強襲科に来るなんてどんな風の吹き回しだ？」
「昨日、アリアと組む事になったんだよ」
それから校舎の入り口に向かって歩きながら昨日の事をキンジから聞く
「なるほどな……確かにアリアなら口で言っても聞かねぇ雰囲気だし。論より証拠って奴だな」
「まぁな。そんな事より、その手に持ってるのは何だ？」
「ああ、さっき理子から貰ったんだ。帰りにでも寄ってかないか？」
そう言って、引換券をキンジに手渡す。とキンジもさっきの俺と同じ様に引換券を眺めながら
「そうだな、ここ最近アリアの所為でろくな目にあってないからな。気分転換も兼ねて行ってみるか」
そして、校舎の入り口に到着しキンジがドアを開けようとした瞬間
「よう、キンジアサルトに帰ってきたのかぁ？」
突然、其処から顔を覗かせたほかの生徒
「ち、違う。自由履修だ」
「キンジぃ、漸く帰ってきたかぁ。お前なら戻ってくると思ってたぜ！」

「キンジっ！　やっと死にに戻ってきたか！　お前みたいな間抜けはすぐ死ねるぞ。武偵ってのは間抜けな奴から死んでいくんだからな」

「だったらなんでお前がまだ生き残ってるんだ！」

「おうキンジ、待ってたぜぇ。さぁ一秒でも早く死んでくれっ！」

「だったらお前こそ、敵グループに単騎突入で死んで来い」

「トキヤならそれでも生き残りそうだがな」

会話だけならハッキリ言って険悪な事この上ない内容だが、別に仲が悪いわけじゃない。強襲科の生徒と言うのは色んなパーティに戦力として引っ張られるし、死傷者を減らすために強襲科同士で組む事も多い。故にここの生徒は比較的人懐っこいのが多い。そして“死ね”と言う単語もここじゃ一種の挨拶の様なもんだ。実際、俺が死んで来いと言っても相手は嫌な顔一つせず言葉を返してきた

「キンジ、トキヤ」

聞こえてきたソプラノのアニメ声。そこに居たのはキンジの頭痛の種、アリア。そしてアリアの姿を確認したと思ったら

「じゃあまた後でな。キンジ」

「えっ？」

そう言って他の生徒も引っ込んでいった。キンジは他の生徒の反

応にわけが判らない顔をしている。が、これも……そう、何時もの事だ

「キンジ、あんたって人気者なのね」

「殆どの生徒からもみくちゃにされてたもんな、キンジ」

「あんな奴らに好かれたって嬉しくない」

「あたしはここじゃ誰も近寄ってこない。実力差がありすぎて誰もあたしに合わせられないのよ」

雲ひとつ無い空がほんのりとオレンジ色に染まり始めた放課後。三人は帰路についていた

「なるほど名前どおり、独唱（アリア）曲って訳だ。で、ここで俺をドレイにして二重奏（デュエット）にでもなるつもりか」

「おっと、キンジにしては座布団ものの発言だな」

「くすっ、あんたも面白い事言えるんじゃない」

「何処がだ。お前の笑いのツボが判らん」

やがて校門前に着くとキンジは一度足を止め、残りの二人も足を止める

「アリア、お前は一人で帰れ。俺はゲーセンに寄って行く」

「ゲーセン何それ？」

「ゲームセンターの略だ。そんな事も知らんのか……」

キンジから聞いた話じゃアリアは貴族のお嬢様らしい。なるほど、だから下々の飲み物インスタントコーヒーを知らなかった訳だ。と地味に納得してキンジの後に続くとアリアもそれに続き

「帰国子女なんだから仕方ないじゃない。そうだ、今日は特別に一緒に遊んであげる。パーティ組んでくれたご褒美よ」

なんて言ってるけど、恐らく興味が沸いたんだろうな、単純に。なんて思い苦笑していると

「罰ゲームの間違いだろ」

と、早歩きになるキンジ。そして一瞬だけムッとして同じく早歩きになるアリア

「着いてくるなよ」

「イヤだ」

次に競歩になり

「着いてくんなよっ！」

次にランニング程度の小走り

「イヤだイヤだイヤだ〜〜〜っ！」

そして最後は二人並んで全力疾走。因みに俺は小走り辺りで諦めた、と言うより着いていくのをやめた。どうせ目的地は同じだしな。そして目的地に到着すると律儀に俺を待っていた二人が息を切らしていた。遊ぶ前から体力使ってどうするんだお前ら……

「どうした。そんなに珍しいか？」

それから二人の息が落ち着いたところでゲーセンに入り、引換券＋自腹のプレイコインをポケットに入れるとクレーンゲームの傍から動かないアリアが目に付いた。そしてキンジが声を掛けると

「かわいい……」

物凄くうっとりした表情でクレーンゲームの中の白猫の人形を凝視している。ゲーム機の窓ガラスに手をつけているその姿は正にオモチャ屋のショーウィンドウの前に居る子供そのものだ

「やってみるか？」

「やり方わからない……」

「誰でも簡単に出来るって教えてやろうか？」

と、キンジがプレイコインを操作盤の上に置きながら尋ねるとアリアは物凄い勢いで何度も頷いた。で――

「い、今までのは練習よっ！　練習っ！！」

「長い練習だったな……」

お約束の通り、結果は全敗。そしてキンジから貰った分のラスト一枚を投入する。が、結果は言わずとも、だ。やがてキンジはため息をついて

「しょうがねぇなぁ。ほら、代われって」

そう言ってアリアを退かして自分の分のコインを入れる。恐らくこのまま放置していたらアリアが本気で発砲しかねないとか思ったのだろう。流石にそれは無いだろうが俺も心のどこかでそう思ったのは内緒だ。そしてこちらの結果は――

「かわいい～～」

最初の一匹のタグと尻尾に絡まる形でもう一匹、二枚抜きならぬ二匹取りと上々の戦果だった。二体のヌイグルミを胸に抱いているアリアの姿はホントに嬉しそうで

こいつ、こんな表情も出来るんだな……と、初めて見る年相応の

普通の少女としてのアリアの一面に不思議と目を逸らせずにいた。
やがて、そんな俺の視線に気づいたアリアは俺と両手に持った二匹の人形を交互に見た後、二匹の内一匹を差し出して

「一匹あげる。あんたの手柄だからご褒美よ」

「お、おう……」

恐らく「何見てるのよ！？」とか「欲しくてもあげないわよっ！」とか言ってくるだろうと思ってた為、この一言は予想外だった。今までと全然違うアリアの一面、それに不思議と頬が熱くなるのを感じ人形（名前はレオポンというらしい）を受け取ると

「どうしたんだトキヤ、俺の顔に何か付いてるか？」

そこでトキヤがジッと俺を見ていることに気づき声を掛けると、トキヤはヤレヤレといった感じで苦笑を浮かべて

「いや、何でもないよ。さっ、帰ろうぜ」

そう言って、俺の肩に一瞬だけ手を置いてから歩き始めた

## 6th bullet ー『バスジャック事件！VS姿無き武偵殺し』

「来たわね、キンジ」

「ああ……」

今、俺達が居るのは女子寮の屋上。普通な授業の筈なのになんでこんな所に居るのかと言うと――

「ったくホントについてねぇ……」

約束を取り付けた事でアリアはとりあえずは俺の部屋から出て行き、とりあえずの平穏が戻った。朝のいざこざもなくなり通学もスムーズになるかと思った矢先に俺はバスに乗り損ねた。おかしい、この腕時計だって何時かアリアの情報を理子から受け取った際に彼女に修理してもらったばかりなのに。チャリもこの間の件で爆破されたし結局トボトボと歩いていくしか無くなった。その時だった、俺の携帯にアリアからの連絡が入ったのは

『キンジ、いま何処？』

「んー、アサルトの傍だが」

『丁度いいわ。そこで直ぐに武装して女子寮の屋上に来なさい。今

すぐ』

「なんでだよ？強襲科の授業は５限目の筈――」

そこで俺は言葉を止めた。授業は既に開始されている筈、なのにこの時間にアリアからの連絡だ。恐らくは普通の用件じゃない。そしてその予想は見事に当たり

『授業じゃないわっ！　事件よ！　あたしがすぐと言ったら直ぐに来なさいっ！」

と言う事もあり、俺は直ぐに準備を終えてアリアと合流した。そして其処には俺の他にももう二人

「レキ」

其処に居たのは狙撃科のＳランク、レキだった。そして隣に居るのは身の丈を超える長さの刀身をした野太刀を背負った少年

「遠山キンジさん、ですか？」

「その通りだが、あんたは？」

「夕凪レン。一応、レキの仕事上のパートナーです。今回の事件の間だけでしょうが、よろしくお願いします」

「あ、ああ。よろしく、頼む」

レキ程ではないが感情の込められてない声で手短に挨拶を済ますとそのまま俺から視線を外し黙り込んでしまう。というかレキがいつの間にかパートナーを作っていたなんて知らなかった。というのも、レキはとても優れた武偵だが、正直、人間かと疑うぐらい無表情に無反応な人間だ。臨時のパーティで組めと言われれば組むし俺も強襲科時代に何回か組んだ事がある。けれど、パートナーとして長期的に組みたがる奴は居ない。早い話が物凄く関わりにくい相手だからだ。と、そこで誰かと無線で通信していたアリアが無線を切ると

「時間ね。ホントはSランクがもう一人ぐらい欲しかったけどみんな別件で出払ってるみたい。私達4人だけで追跡するわよ」

「追跡って何が起きたんだ？状況説明ぐらいしろって」

「バスジャックよ。しかもあんたの住んでる男子寮から7時58分に発車する武偵校の通学バス」

「犯人は車内にいるのか？」

「恐らく居ないわ、バスには爆弾が仕掛けられているわ」

その言葉を聞いて俺は黙り込む。武藤やクラスメートが乗ってるバスがジャックされた事もあるが、それ以上に俺の脳裏にはこの間俺が被害にあったチャリジャックの事が思い出された。それをアリ

アも感づいてか

「恐らくキンジの思っている通り、犯人はこの間のチャリジャックと同一犯。つまり『武偵殺し』の仕業よ。『武偵殺し』は乗り物に減速すると爆発する爆弾を仕掛けて自由を奪い、遠隔操作でコントロールするの。でも、その遠隔操作に使う電波には特定のパターンがあってね。今回もそれをキャッチできたのよ」

「けれど、『武偵殺し』は掴まった筈だろ？」

そう、始業式の日に白雪と話した様に『武偵殺し』は一年前に理子と当時はまだ一般学生だったトキヤに逮捕されている筈だ

「それは真犯人じゃないわ」

「待てよアリア、それってどういう――」

「事件は既に発生しているのっ！　今この瞬間にもバスは爆破されるかもしれない。武偵憲章第一条『仲間を信じ、仲間を助けよ』被害に遭っているのは武偵校の仲間よ。これ以上の説明は必要ないわ」

「……ああ、判ったよ。やってやるっ！」

いずれはこんな学校を転校して武偵の世界からは足を洗うつもりだ。危険を避ける為に強襲科からも離れた。けれど、武藤や他のクラスメートが被害に遭ったのにウダウダ言ってもいられない。何より大なり小なり最初に起きた事件を解決するとの約束だ。確かに背景や真犯人がどうのなんて言っていられない

「ミッション内容は車内にいる全員の救助と可能なら武偵殺しの捜索及び逮捕、けれどあくまで車内に居る人達の救助が最優先よっ！」

そう宣言した瞬間、空から聞こえるプロペラの音。車輌科のシングルローターヘリがこちらに向かって着陸して来た

「見えました」

ヘリに乗りバスを追跡している途中、窓の外を見ていたレキが呟き、俺とアリアも窓に顔を寄せる。今、ヘリに乗っているのは俺とアリアとレキの三人。レンはと言うとどこかで爆弾の遠隔操作をしているであろう真犯人を探すべく周辺の調査に辺り終わり次第、合流する手筈になっている

「何も見えないぞ」

「ホテルの前を右折しているバスです。窓から武偵校の生徒が見えます」

「よ、よく判るわね。あんた視覚いくつよ？」

「左右共に6，0です」

流石は目の良さがモノを言う狙撃科の優等生だ、視覚の良さも一

般人離れしている。そして、レキの言う通り追跡すると其処には正に今朝乗り遅れたバスが見えた。しかもご丁寧な事に俺の時同様UZIを搭載した乗り物が併走している。流石に車相手にセグウェイじゃスピード不足な為、こちらはオープンカーだ

「空中からバスに飛び移るわよ。アタシとキンジで車内に入って、レキはヘリでバスを追いながら待機してて」

そしてテキパキと俺とレキに命令した後、ヘリがバスに近づくと同時にアリアが銃でタイヤをパンク、バランスを崩したオープンカーはそのまま橋の上から海に転落。障害がなくなったのを確かめるとそのまま強襲用パラシュートで飛び降りる。連携やチームワークなんてあったものじゃない。兎に角現場に一番乗りして圧倒的武力の力押しで解決する。しかも無駄に高い実力がそれを増長させている。彼女が独奏曲と呼ばれる理由が良く判った気がした。結局、反論も何も出来ないので俺も仕方なくアリアと同じ様に飛び降り、そのまま中に入り込む。それと同時にバスはトンネルに突入。トンネルを抜けるまでレキの援護も受けられなくなった

「おい、大丈夫か！？」

「キンジか！？　この車には減速すると爆発する爆弾が仕掛けられている」

車内に入るとバスの運転席には武藤が座っていた。辺りを見渡すと腕や足を押えている生徒が多い
。すると同じくバスに乗っていたトキヤが

「さっきアリアが仕留めた奴、あいつにやられたんだ。強襲科の血気盛んな奴が無謀にも撃退を試みてな。そのあおりで運転手が負傷

している」
運転席の近くに目をやれば救護科の生徒に治療を受けている運転手の姿もあった
「キンジ、手分けして爆弾を探すわよ。アタシは車体下、あんたは車内。もし爆弾が見つからなかったとしても決してバスの外には出ないで」
「判った」
そして、アリアがワイヤーで自分とバスをくくりつけるとそのまま車外へと出て行った
「キンジ、運転席の下を見てくれ。車内にあるとすれば後はここだ」
他のみんなも武偵校の生徒。此処に爆弾があると知った時も冷静に車内を探した様だ。そして、残った運転席の下を覗いてみるが爆弾は見当たらない。どうやら車体の外にある様だ
「武藤、だいじょぶか？」
「俺はな。だが、このバスはちょっとやばい。燃料が漏れている」
武藤がそう言うので、俺もメーターに目を向けるとガソリン残量を示すメーターがかなりの勢いで下がっている
「しかも、このトンネルはレインボーブリッジ直結。下手すりゃ都心でドカン、だな」

やがて、念を入れて再度車内を探していたトキヤも俺の隣にやってくる

「キンジ、あったわ！」

直後、車体後方から聞こえるアリアの声

「ガンジスキーβ型のプラスチック爆弾。見えるだけでも炸薬の要領は３５００立方センチメートルはあるわ」

「マジかよっ！？　バスどころか戦車でも吹っ飛ぶ量じゃねぇか」

俺のチャリの時といい、今回の時といい、過剰にも程がある

「でも、大丈夫よ。これなら解体できる」

「ホントか？　良かった……」

軽くウィンクをした後に解体作業に入ったアリアを見送り、胸を撫で下ろした所に同じクラスメートで金髪のイケメン、不知火亮が声を掛けてきた

「遠山君、ちょっと」

「どうした？」

「犯人は恐らく、今も僕達を監視している筈だ。次の手を打たれる前にセンサーかそれを送信する装置を如何にかしないと」

そう、ＵＺＩも電子音声も全部遠隔操作。けれど、このバスはか

なりのスピードで走っている。その状態で車で併走もせず、どうやって中の状態を把握するか。それは熱源センサーの類で動きを把握するしかない。ならばそれらのものがこのバスに取り付けられているのは明らかだ。車体の外に出るな、とは言われたがこれを放っておけば爆弾を解除しようとするアリアに被害が及ぶ可能性がある。キンジは車体の上に再び昇り、注意して辺りを見渡す

「あった！」

すると、後ろの方に赤くランプが明滅する装置が設置されていた。それに近づいてそのままそれを引き剥がそうとすると

「キンジ！？」

「アリア、通信装置があった。犯人の奴、これを使ってバスの中を――」

「このバカっ！　バスの中から出るなって言ったじゃない。そんな初歩的な事も判らないの！？」

「なっ！？　そんな言い方は無いだろ。お前が爆弾を解体している間にそっちを」

そう言って、手に持っていた通信機を投げ捨てる。アリアは解体を一時中断するとワイヤーを昇ってこちらに向かってくる

「無防備すぎるのよ！　早くバスの中に――」

アリアの言葉を遮るように聞こえた、バスとは別のエンジン音。キンジの行動は爆弾の解体を邪魔されない為には確かに必要な事だ。

けれど通信機が壊されれば当然、それを犯人もそれを知り、手をうつ。其処に居たのはさっきのとは別の黒のオープンカー、そしてその座席から現れるＵＺＩ。そして、その銃口は通信機を壊したキンジに向けられる

「伏せなさいっ！」

アリアがそう叫ぶと同時に飛んでくる銃弾。俺にはそれがスローに見えたがあの時とは状況が違う。自分ではどうしようも無い死の足音。それを目の前にして感覚的にそれがスローに見えただけだ

「キンジっ！！！」

そしてその銃弾が俺を貫く直前、アリアが俺にタックルをかまして押し倒す。けれど、その所為でアリアの額に銃弾が掠り、アリアが倒れた。それから一秒としない内にアリアの額から血が流れる

「アリア！　アリアッ！」

倒れたアリアを抱き起こし、必死に呼びかけるもアリアは完全に気絶している。が、相手にとってはそんな事お構いなし。今度こそ俺をしとめようとＵＺＩの狙いを再び定める。直後、一台のバイクがオープンカーを追い抜くとＵＺＩを固定していた銃座が真っ二つに斬られ、ＵＺＩが車外に転落

「レン？！」

そのバイクに乗っていたのはレンだった。バイクを片手で運転し反対の腕には太刀が握られている。あの太刀でＵＺＩの銃座を斬り飛ばしたのだろう。次の瞬間、レンは太刀の柄底でバイクのハンド

ルグリップを叩く。すると太刀がバチバチと放電し、やがて、レンの全身が帯電する。

「あいつ、超偵だったのか！？」

太刀をバイクに取り付けられた止め具に固定すると空いた手で一枚のメダルを取り出し、親指の爪と人差し指の指先の間に挟みそれを車に向け、でこピンの人差し指版の要領でメダルを弾くとメダルは超音速で飛んでエンジン部分を貫き、車は爆発した。そこでバスはトンネルを抜け、レインボーブリッジに進入。すると其処には事前に回りこんでいたヘリの姿

「レキっ！」

「はい」

レンが通信でレキに合図を送るとヘリのドアが開き、レキがドラグノフの銃口をバスに向けスコープを覗く。撃つべきターゲットはバスの車体下に取り付けられた爆弾の止め具。風でヘリが揺れることで微かにずれる照準。レキはトリガーに指をかけず、時より指を動かしながら頭で弾道をイメージしタイミングを計る

「私は、一発の銃弾……」

やがて、ベストな照準とタイミングを見つけると狙撃の時に何時も口にする言葉を呟き、トリガーに指をかけ……引き金を引く。放たれた銃弾はレキの狙い通りに飛び、橋を宙に吊り下げる為の支柱の間を縫って、爆弾の止め具を破壊。爆弾はバスから離れ2，3度バウンドした後に海へ落下。それから数秒後に海中で爆発し巨大な水しぶきを上げた

## ６ｔｈ　ｂｕｌｌｅｔ－『バスジャック事件！ＶＳ姿無き武偵殺し』（後書き）

レンの紹介は武偵殺し編終了後にＵＰします

## 7th bullet―『空の上の遭遇、現れる武偵殺し』

バスジャックの事件はバスに乗ってた人達は全員無傷とはいかなかったが無事に解決された。その翌日、学校で聞いた話じゃアリアは今日の夜にもロンドンに帰国。キンジをパートナーにするのも諦めたらしく、パートナーの件もキンジの思惑通りにいったし彼女がここから居なくなるのはキンジにとっては万々歳の筈……なんだが

「その割には覇気がねぇんだよな。キンジの奴……」

行きつけのスーパーで食材を買い込んで寮に戻る途中、ついでで買った缶ジュースを飲みながら呟く。すると

「キンジ？」

帰りのモノレールに乗るべく台場を歩いていると、エステーラと言う高級クラブから今朝とはまるで違う。まるで危機迫った様な表情のキンジが飛び出してくる

「おい、キン――」

俺の呼びかけにも気づかず、そのまま走り去っていくキンジ。こりゃ、何かあったか？

「はぁ……一応、帯刀してきて当りかよ」

ハッキリ言って嫌な予感しかしないし着いて行けばまた、変な事に巻き込まれかねない。けれど、其処に親友が首突っ込もうとしているのを放って置けるほど俺は器用な性格ではないらしい。さて、

考えるのはこれまで。これ以上、無駄に悩んでもキンジを見失うだけだ

「――武偵だっ！　離陸を中止しろ！」

その後、手続きも満足に取らず武偵手帳の提示だけで今まさにハッチを閉じようとしていたＡＮＡ－６００便に飛び込むと、キンジは殆ど怒鳴りつけている様な勢いで近くに居たフライトアテンダントに離陸中止を要請していた。そしてキンジの勢いに気圧されたフライトアテンダントは機長に話を通すべくその場を去っていき、キンジはそれを見届けると息を切らしその場に座り込んだ

「で、一体全体何があったんだ、キンジ？　アリアを返したくないからこんな事をした。って訳じゃねぇだろ？」

「っ！？　トキヤ、なんで此処に？」

「今頃気づいたのか……声を掛けようとしても全然気づかんもんだから、着いてきたんだよ。で、この状況はなんなんだ？」

「『武偵殺し』だ。この旅客機に潜んでいる。狙いは、アリアだ」

うん、嫌な予感はしてたけど、どうやら最上級の厄介ごとに首突

っ込んだみたいだな俺

「その情報ソースは？」

「理子から聞いた兄さんの話を元に推理した。ヒステリアモードの時に思い当たった結論だ。恐らく間違いない」

「金一さんか。一年前にシージャックで死んだ、だったな……しかし、まさか武偵殺しの件に関わっていたとはな」

いや、武偵殺しが関わっていたからこそ、か。遠山金一、キンジの兄でとても優秀な武偵だ、同時に俺の両親とよく組んで事件に立ち向かう事もありその縁で俺も何回かはあった事はある。そして、その金一さんは一年前に殉職した……彼の乗っていた船がシージャックに遭い、船は爆破され沈没の危機にさらされた。その時、金一は他の人達を脱出させたが、自分自身はそのまま帰らぬ人となってしまった。だが、この訃報を聞き悲しんだのは俺の知る限りじゃ、キンジと俺と俺の両親ぐらいだろう。世間は彼を、そしてその親族たるキンジを罵倒した。『武偵なら事前に防げたんじゃないか』『無能な武偵』とテレビや新聞で大きく取り上げて。そういえば、俺の親父が本気でキレたのはこの時が初めてだったっけ。編集長や社長に脅しかけてでも彼への酷評を撤回させてやる！って本気で殴りこもうとしてたのをお袋に止められていた。これがキンジが武偵を嫌う尤もたる理由……要は武偵と言う仕事自体、罵られることこそあれど称賛される事は無い、損な役柄でしかないとキンジの中で確定してしまったから

「ヒスキーの導き出した結論ならほぼ間違いないんだろうな。」

と、其処まで話した所で機体が揺れて立っていた俺は一瞬バラン

スを崩す。するとさっきのアテンダントがやってきて

「あ、あの……ダメでした。このフェーズに入ってしまったら管制官からの命令でしか止められないと……」

加えて、状況は更に悪くなったらしい……

「こ、この部屋です……」

あれから、戻ってきたアテンダントを落ち着け俺とキンジはアリアの部屋に案内してもらう

「キンジっ！　それにトキヤも」

「さすがはリアル貴族様だな。このチケット片道２０万はするんだぜ」

「断りもなく部屋に押しかけてくるなんて失礼よっ！」

「お前がその台詞を言えた口か？」

と、キンジの一言でアリアは押し黙る。まぁ、いきなりキンジの部屋に押しかけたのはそっちだしな

「……なんで着いてきたのよ？」

「太陽はなぜ昇る？　月はなぜ輝く？」

「うるさいっ！答えないと風穴開けるわよっ！」

揚げ足を取る様に言葉を紡ぐキンジにアリアは拳銃に手をかける

「武偵憲章2条『依頼人との契約は守れ』、俺はアリアと最初に起きた事件を解決すると約束した。そして『武偵殺し』の事件はまだ解決していない」

「何よ……何も出来ない役立たずなくせに」

と、アリアは今度は今まで入り口のドアの前に佇んでいた俺に目を向けて

「大体、なんでトキヤまで来たのよ？　あんたに至っては何の関係も無いじゃない」

「買い物帰りにキンジの後を付けたらこうなった、以上」

「呆れてモノも言えないわね……」

と、俺を見下すような口調で言った後、アリアは席に座りなおし

「ロンドンに着いたら直ぐに引き返しなさい。エコノミーチケットぐらい手切れ金代わりに買ってあげるから。あんた達はもう他人、話しかけないで！」

「元から他人だろ」

「右に同じく」

「うるさいっ！　しゃべるの禁止っ！」

それ以降、口を閉ざしアリアは窓の外に目を向けて拒絶の態度を示した。が、それから数分と立たない内――

「双剣(カドラ)双銃のアリア様にも苦手なものがあるとはな」

とキンジが皮肉たっぷりな言葉を掛け布団が小さく膨らんだベットに向けて投げかけるとアリアは布団から亀の様に頭だけをだして

「ちっ、違うわよ！　これは……そう！　あんた達とずっと顔合わせて居ないといけないなんて不愉快だからさっさと寝ようとしただけ――キャアッ！」

この飛行機は今、雷雲の近くを飛んでおり雷が聞こえると同時にアリアはこの状態になった。今もアリアの言葉を遮るように雷鳴が轟くとアリアはすぐさま首を引っ込めた。それから何度か雷がなった後

「き、キンジぃ～～」

遂にアリアはギブアップの様だ。さっきまでの拒絶の態度は何処へやら。布団から出てきたかと思うと、殆ど涙目の状態でキンジの制服の裾を掴んでいる

「ほら、テレビでも見て気を紛らわせ」

「う、うん……」

そして二人並んで部屋に備え付けてあったテレビを見ている。こっちはもう大丈夫そうだし、外の様子でも見てくるかと俺がドアノブに手を掻けた瞬間、パァン！と言う音が二回、機内に響く。雷の

音とは似ても似つかないそれは、銃声。やれやれ、こっちはやっと落ち着いたってのに、休む間もなくかよ……

大急ぎで部屋を出るとそこは既に混乱の極みだった。事情がまだ飲み込めない乗客やフライトアテンダントが、騒いでいる。そしてその奥、操縦席に続くドアの先にはさっきのフライトアテンダントが、機長と副操縦士を引きずり出している

「動くなっ！」

キンジが銃口を向け、俺は刀をホルダーから外して帯刀術の構えを取るとそのアテンダントはゆっくりとこちらを振り返り

「アテンションプリーズ……で、やがります」

と、過去に2回聞いたふざけた喋り。機械音声じゃない生の声で言うと同時に胸元から、一つの官を取り出し、床に放り投げる。地面に落ちると同時に吹き出すガス

「全員、部屋に戻ってドアを閉めろっ！　早くっ！」

キンジが雷の恐怖と戦いながらも顔を出したアリアを扉に押し込み、俺は老人や子供を近くの部屋に適当に放り込む。最後の一人を放り込んだ所で飛行機は大きく揺れて照明が落ち、直ぐに非常灯が点灯する

「二人とも、大丈夫！？」

ようやくガスがなくなった所でアリアが再度、外に出てくる
「問題ない。どうやら、ただの目くらましだったみたいだな」
と、床に落ちていたガス缶を拾い上げる。俺もキンジも体に異常は無い、完全に無害のガスだった様だ
「やっぱり、出やがった。武偵殺し……」
「やっぱり？　あんたまさか、武偵殺しが出る事が判ってて――」
此処に来たの？と言うアリアの言葉に被せる様にキンジがヒスキーの時の自分の推理を話す
「『武偵殺し』はバイクジャック、カージャックで事件を始めて、さっき判ったんだが一年前のシージャックである武偵を仕留めた。それは直接対決だった」
「直接対決？　どういう事だキンジ？　何時もの用に遠隔操作じゃなかったのか？」
「ああ、理由はアリアがシージャックの事だけを知らなかったから。例の電波、傍受してなかったんだろ？」
「う、うん」
「『武偵殺し』は電波を出さなかった。つまり、船を“遠隔操作する必要がなかった”。ヤツ自身があそこに居たから」
そして直接対決になったからこそ、金一さんは逃げ遅れた。もし

くは犯人にやられた、って訳か

「そしてバイク、車、船、と来てここで一度、狙われた乗り物が小さくなった。俺のチャリジャック、そしてあの時のバスジャック」

そこまで聞いて俺とアリアもようやくピンと来た。小型、中型、そして大型で直接対決。チャリにバス、そして飛行機。今のこの状況は乗り物の種類こそ違えど、金一さんがやられた時と酷似していた

「判るか、アリア？　あんたは最初からヤツの手の上で踊らされていたんだ。ヤツはかなえさんに罪を着せあんたに宣戦布告した。兄……いや、シージャックでやられた武偵と同じこの三件目、大型の乗り物のジャックでお前と直接対決する為に」

かなえさん？誰だそいつ、と思ってキンジの推理が終った所で問おうとした時、俺の目に不規則なリズムで、でも一定のパターンで明滅しているベルト着用のサインが映った

「二人とも、どうやら話はここまでの様だ。ヤツからの、招待状だ」

その明滅は和文モールス信号。そしてその内容は「おいで、おいで、イ・ウーは天国だよ。おいで、おいで、わたしは一階のバーに居るよ」だった

俺たちは手にそれぞれの武器を持った状態で周囲を警戒しつつ、一階のバーへとたどり着く。すると其処にはさっきのアテンダント、

真の武偵殺しの姿。けれどその服装は大きく変わっていた。それは、自分たちが着ているのと同じ武偵校の制服。しかも――

「……本命をおびき出せたからもう正体隠す必要も無いって訳か？」

その制服には至る所にヒラヒラのフリルが着けられている。それは、俺が初めて直接この目で見た武偵校の制服。アテンダントはこちらを振り向き、その顔にかけられた特殊メイクをはがしていき

「……理子」

俺がその名を呼ぶと同時にメイクが剥がれ、理子の金髪が広がる

「理子っ！？」

「ボンジュール」

流石にこの展開はヒスキーでも予想できなかったのか。キンジとアリアの表情が驚愕に染まる

「頭と体で人と戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよね」

理子は手に持っていたカクテルを飲み干すといきなり今の状況とは関係ない話を始めた

「武偵校にもお前たちみたいな遺伝系の天才がけっこういる。でも……お前の一族は特別だよ、オルメス」

今までのおどけた様な言葉遣いや口調は微塵も感じられない。そして、その言葉でアリアは目を見開く

「あんた……一体、何者……？」

「理子・峰・リュパン４世――それが理子の本当の名前」

リュパン……それはフランスを騒がせた大怪盗で、探偵科の教科書にも乗るほどの人物。理子はその子孫と言う事か。すると理子は突然、俯いたかと思うと

「でも……家の人間は誰も理子の事を『理子』と呼んでくれなかった。４世、４世、４世様ぁって。どいつもこいつも、使用人ですら理子をそう呼ぶ。おっかしいよねー？理子にはお母様がつけてくれたこのかっわいい名前があるのに」

「そ、それがどうしたってのよ？　４世の何が悪いのよ？」

アリアのその一言がスイッチになり、理子は弾かれたように顔を上げる。瞳孔は開き、明らかな怒りと恨みをはらんだ顔を

「悪いに決まってんだろっ！　あたしは数字か！？　あたしはただのＤＮＡかよっ！！？　違うっ！　あたしは理子だ！　数字じゃない！　どいつもこいつもよぉっ！！！」

それは、理子の心からの叫び。自分は自分だと此処に居ない誰かに、そして何より自分自身に向かって放たれる叫びだった

「曾お爺様を超えなければあたしは一生あたしじゃない。『リュパンの曾孫』として扱われる。だからあたしはイ・ウーに入ってこの力を得た、この力でもぎ取るんだっ！　あたしをっ！！」

口調も雰囲気も何もかも自分たちが知る理子は何処にも居なかった。それほどまでに今の理子は豹変していた

「１００年前、曾お爺様同士の対決は引き分けだった。つまり、オルメス４世を倒せばあたしは曾お爺様を超えた事を照明できる。キンジ、お前も役割を果たせよ」

そして、獲物を狙う狩人の如き目を今度はキンジに向ける

「オルメスの一族にはパートナーが必要なんだ。曾お爺さまが戦ったオルメスには優秀なパートナーが居た」

所謂、ワトソン君ってヤツか……

「だから、条件を合わせるためにお前たちをくっつけってやったんだよ」

理子が、しきりにキンジとアリアは付き合っているだとか言っていた理由はこれか。普段からそういうバカな発言を連発するから全然気づけなかった。つまり、学園でのあの理子の態度は完全に演技。こっちが理子の本性ってヤツか

「何もかも……お前の計画通りって訳かよ」

「んー、そうでもないよぉ」

かと、思ったら直ぐに俺たちの知る理子に戻る

「予想外の事もあったよ。一つはバスジャックを経ても二人がくっつき切らなかった事。理子がやったお兄さんの話をするまで動かな

かったのは、以外だった」

「兄さんを、お前が……お前が！？」

尊敬していた兄、それを殺した犯人を目の前にキンジが拳を強く握り締める。そして理子は俺に目を向け

「そして一番の予想外はトキヤ、お前だよ」

「俺が今、この場に居る事か？」

「……そう、本来なら今この場に居るのはキンジとオルメスだけだった。でもこれはこれで返って好都合」

俺の言葉に理子は一瞬の空白を置いた後にそれを肯定した

「この状況はどう見ても曾お爺様の時より厳しい状態だ。これであたしがオルメスを倒せばあたしが曾お爺様より優れているという事をより強く証明できる。だからトキヤ、邪魔するなとは言わない。むしろ全力で掛かってきな」

元よりそのつもりだと言う様に、俺は帯刀術の構えを取る。そして最後に理子は仕上げにキンジの方に視線を戻すと

「キンジ、良い事教えてあげる。あのね、貴方のお兄さんは……今、理子の恋人なの」

「いい加減にしろっ！！」

そしてその一言で遂にキンジがキレた。ホルスターから銃を抜き

構える。しかし次の瞬間、飛行機が大きく揺れて俺たちはバランスを崩す。そして揺れが収まる頃には、キンジの銃はキンジの後ろの床に落ちている。そして目の前には自分の愛銃、ワルサーを構えた理子の姿

「ノン、ノン。だめだよキンジ。今のお前じゃ戦闘の役には立てない。それにそもそもオルメスの相棒は戦う相棒じゃないの。パンピーの視点からヒントを与えてオルメスの能力を引き出す。そう言う活躍をしなきゃ」

その瞬間、次はアリアが動いた。二丁のガバメントを構え、理子との距離を詰める。そして理子もカクテルグラスを捨てて空いた手で二つ目のワルサーを構えこちらもアリアと肉薄していく。拳銃は遠距離から相手を貫き、殺す武器、それは間違っていない。けれど、互いに防弾仕様の装備をしている場合は勝手が違ってくる。『近接拳銃戦（リカタ）』。その場合拳銃は極力至近距離で当てなければ有効なダメージは望めない、つまりは近距離の打撃武器となる。クロスレンジで相手の銃弾を避けて、時には相手の銃口を腕や自身の銃で弾き逸らす技術が必要になる。そしてアリアと理子、二人の技術は互角。となれば勝負を決するのは銃の装弾数。その点では理子の方に分ある。けれど――

「キンジっ！」

「そこまでだっ！　理子！」

銃の弾が切れた瞬間、アリアは銃を捨てて理子の腕を抱え込んで動きを封じる。そして、俺は理子の背後に回り込んで柄を使っての突きの姿勢に入り、キンジは自分の第二の武器、緋色のバタフライナイフを理子の首に突きつける

「双剣双銃……奇遇よね、アリア」

傍から見れば勝負ありのはずなのに理子の表情に焦りは無い

「理子とアリアは色んな所が似ている。家系、キュートな容姿、そして二つ名」

むしろその表情には余裕の色すら見えて

「あたしも同じ名前をもってるの『双剣双銃の理子』。でもね、アリア」

その時、風が吹いていないにも関わらず理子の髪が揺れる。いや――

「アリアの双剣双銃は本物じゃない。お前は知らない、“この力”の事を――」

まるでメデューサの様に髪が動き、制服の背中の中から二本のナイフを取り出し、それぞれを俺とアリアに向けて振るう。俺はそれを防ぐも衝撃を流せず後ずさり、アリアはそれを避けるも、すぐに第二撃目がアリアの側頭部を斬り裂き、鮮血が舞う。そしてその隙を逃さず、理子はアリアの胸に銃口をくっつけて――

「うあっ・・・・！」

完全な零距離射撃。近接銃撃戦で尤も強い威力を持つ一撃をモロに喰らってしまった。

「アリアーーっ！」

キンジがアリアに近づき、抱き起こす。けれどキンジの呼びかけにもアリアは一切の反応を示さない。さっきの一撃で昏倒させられてしまっている。そして、そんな二人を理子は狂気すら感じられる目で二人を見下ろし

「あは、あはははっ！曾お爺様、勝てるっ！　勝てるよっ！！　理子は今日、理子になれるっ！」

そして、狂った様な笑い声を上げながらトドメとばかりにその銃口をアリアに向けて引き金を引く。アリアの頭部に向けて飛ぶ銃弾、それを――

「キンジ、アリアを」

「くっ……すまんっ！」

ＡＳを発動させて一閃し、理子と二人の間に割り込む。その間にキンジがアリアをお姫様抱っこしてこの場を後にする

「さっきの近接拳銃戦に割り込めなかった分、ここで選手交代だ。月並みな台詞だが、アリアを殺りたきゃ、まずは俺を倒してからにしてもらおうか」

そう言って刀を鞘に納め、そのまま目の前に掲げる形で持つ。時雨瞬光流における帯刀術の構えだ

「一人で理子に立ち向かう気？　言っておくけど今の理子には武偵憲章なんて関係ないから、本気で殺すよ？」

「はっ、武偵なんて生きるか死ぬかのクソッタレな仕事だろうが。そんな脅しで「はいそうですか」と、どけるとでも思ったか？」

そう返すと、理子は唇の両端を大きく吊り上げ、歯をむき出しにした笑みを浮かべると

「言う様になったねトキヤも。武偵校に転校してきて間もない頃とは大違い」

「転校させた張本人がそれを言うかよ？　足掻いても悩んでもどうしようもないから、早々に腹を括ったのさ。俺は無駄な事が嫌いなんだ。だから――」

そして鋭い目線を理子に向けて

「あんたを早々に叩きのめして、切り上げる」

明日の朝飯の仕込みがあるんでな、と最後に軽く冗談を言う

「いいよぉ、トキヤのその目、ゾクゾク来ちゃう。だから――」

拳銃を持つ手を翼の様に左右に広げ、ナイフを握った髪を上に向けて

「オルメスにトドメを刺す前の余興代わりにと思ったけど……いいよ、本気で相手してあげるっ！！」

そして、俺と理子は同時に地面を蹴った

「アリア、しっかりしろっ！」

理子をトキヤに任せてさっきのスイートルームに戻ってくると俺は直ぐにアリアをベットに寝かせ、血をふき取るとアリアの側頭部に出来た深い切り傷が見えている。そしてアリアの胸に耳を当てると心音が聞こえていない

「やべぇっ！」

側頭動脈をやられてる上に心停止を起こしている。大急ぎで武偵手帳に挟んである止血テープで血を止め、手帳のペンホルダーに忍ばせてある『ラッツォ』と言う鎮痛剤と気付け薬を兼ねた復活剤の注射器を取り出す。そしてアリアの制服のリボンをほどき、そこで手を止める。ラッツォは心臓に直接打つ事で効果を発揮する故に必然的に服を脱がす必要があるのだ

「……すまん」

聞こえては居ないだろうが謝罪の一言言った後、ブラウスのジッパーをおろし胸元をはだけさせた。そこに注射の針を向ける

「戻って来い……アリア！」

そして、針を刺しラッツォをアリア体内に流し込む。それから数秒

「くっ、うっ・・」

アリアの表情が薬の効果で歪み、くぐもった声と共に一瞬だけ痙攣する

「うぅ・・キン、ジ？」

「気がついたか、アリア」

そして、ゆっくりと目を開けてキンジの名前を呼ぶ。アリアはそれから暫くボーっとしていたがやがて意識がハッキリしてくると突然顔を真っ赤にして

「な、何してんのっ！？　変態っ！」

そう言って、馬乗りになっていたキンジを突き飛ばし胸を手で隠しながらベットの上に立ち上がる

「こ、こんな胸どうして見たがるのよっ！？　小さいからかっ！？　成長しないからかっ！？　どうせ身長なんて万年１４２センチよっ！」

「お、落ち着け、アリア！　お前は理子にやられて……」

「りこ……？　理子ーーーーっ！」

「待て。冷静になれ、マトモやってもあいつには――」

そこで、ようやく理子にやられた事を思い出しアリアは傍に置い

てあった銃を持つとそのまま部屋から出て行こうとしキンジはドアの前に立つとアリアの腕を掴む

「そんなの関係ないっ！　はなせーーーっ！！」

「静かにするんだ」

「うるさいっ！　理子ぐらい一人で片付ける！　あたしの事なんか助けに来なくて良かったのよ！」

まずい、ラッツォのお陰で復活はしたが薬の効き過ぎで興奮状態になっている

「あんた、あたしに大キライって言った。あたし、あの時は普通の顔をしていたけどホントは胸がズキンって――」

兎に角、何とかしてアリアを落ち着かせないとトキヤだって何時まで持つか判らない。けれど、今それが出来る手段は恐らく一つだけ……

「だからもういいのよ！　あたしの事キライならいいのよ。あたしの事――っ！？」

けれど、背に腹は変えられない。キンジはアリアの口を塞いだ。無論、両手は今もアリアの手を押さえ込んでいる。アリアの口を塞いだのは同じくキンジの口だった。それとキンジは同時に体の芯に血液が集まる感覚。今までより遥かに強い、ヒステリアモードへの変化を感じ取っていた。そして、アリアも突然のキスで力が抜けてその場にへたり込んだ

「アリア……許してくれ。こうするしかなかった」

「バカキンジ……こんな時になんて事してくれるのよ。あたし、あたし、ファーストキスだったのに」

「安心していい。俺もだよ」

アリアはそこでようやくキンジの雰囲気が変わっている事を感じ取る

「キンジ？　あんたもしかして……」

「武偵憲章1条『仲間を信じ、仲間を助けよ』。俺はアリアを信じる、だからアリアも俺を信じてくれ」

キンジはアリアをそっと抱きよせ彼女の耳元でそう囁くと体を離し立ち上がる

「二人で『武偵殺し』を逮捕するぞ」

## 8th bullet―『知る者と知らぬ者が奏でる戦いのセッション』

「あはははっ！　楽しい、楽しいよトキヤ！　もっと理子を楽しませてよっ！！」

「悪いが、理子を楽しませるためにやってるんじゃ……ないっ！」

銃弾を避けながら走り回り、背後を取ると距離を詰めて理子の側頭部鞘で打つ。けれど、理子はこちらに背を向けたまま髪で持ったナイフでそれを防ぐ。けれど追撃はかけない。相手の得物は近距離武器のナイフが２つに遠近両用武器の拳銃が２つの計４つ、しかもそれを４つ同時に操る事が出来る。つまり、この状況で理子と長時間近接しているのはこちらが激しく不利だ。逆に距離を置く様立ち回れば理子は銃撃のみの攻撃となる。ヒット&アウェイ、まともに一撃も入れれない状況だが無駄に近接できない以上、これしかない。

と、今度は理子自身が近接戦を仕掛けるべく距離を詰めてくる。飛んでくる銃弾や突き出されるナイフを刀を抜き、鞘と刀の変則二刀流で捌きながら再び距離を置こうとするが不意に背中に何かが当たる

（やられた……）

こちらが攻撃を捌いているように見えてその実、どうやら壁際に誘導された様だ。敵との攻防の中で相手の動きを読んでうまく追い込む、強襲科でも出来るヤツは少ないのに理子はそれをやってのけた

「あんた、強襲科の方が良かったんじゃないか？　そんだけの技術があればSランクも取れたんじゃないか？」

「潜伏するなら目立たない事が基本だろトキヤ？　下手にＳランクの武偵になれば大なり小なり騒がれる」

まぁ、理子の戦闘技術じゃある程度本気を押さえ込もうとしても先生方ならそれが本気かどうか見極められるだろうな、自身も武力に長け、更には長年色んな生徒を見ているんだそれぐらいは出来る。ならば、情報収集力はピカ一だが推理力が残念と言う設定でＡランクの探偵科の方がまだ怪しまれない

「だからと言って逆に極端に成績が低いのもまた逆効果、普通かちょっとだけ優秀な方が丁度いい。それとも――」

そこで理子はいきなり表の理子に戻ると

「そんなに理子と一緒に授業を受けたかったの？」

「今は戦闘中だ。そう言う冗談は後にしてくれ」

「あー、トキ君ひっどーい。折角、話に付き合ってあげたのにそんな事言うなんて～。プンプンガオー、だぞ」

と、理子の目付きが再び鋭くなり、銃口はこちらに向けらると

「で、どうトキヤ？この状況を打破する一手は思いついた？」

「判っててあえてのったのかよ……」

戦闘中に無駄話なんてありえない、それでもあえて無関係な話を振ったのは時間を稼ぐためだ。ダメ元だったんだがどうやら理子は

判ってて乗ったらしい。純粋に戦いを楽しんでいる

（戦闘狂（ガンモンガー）、か）

まぁ、今回はそのお陰で助かった。お陰でこの状況を切り抜ける手は固まった、まぁ考えたと言うよりは下準備が出来た、と言うのが正しいが。

「そんじゃ、今度はこっちのターンだ！」

そして、俺は逆に理子との距離を詰める。今まで間合いを置いて隙を見て距離を詰める戦いをしていたのにここでそれに反しての突撃。うまくいけばそれで相手の不意をつければと思ったが理子程の相手じゃその程度じゃ驚きもしない。落ち着いて至近距離で二つの銃弾と2つのナイフで突きを放つ、そこで俺は自身の一番のカードを切る。ＡＳと変則二刀流で俺の頭部と心臓部を狙っていた銃弾とナイフを捌き、そして二つ目のナイフは体を横にひねって避ける。そして最後の銃弾は、空いた左腕の肩を盾代わりにあえて喰らう。普通なら出来ないが防弾制服を着ているからこそ出来る芸当だ。自身の間合い、そして相手は攻撃の直後。ヒット&アウェイでは掴めなかった、最大のチャンス。鞘をバトンの様にクルクルと回し始め、その状態で自身も舞う様に体を時計回り、逆時計回りとランダムに回転させつつ、上や横、下からと不規則な軌道で理子に鞘打ちのラッシュをかける。自身の体の回転と鞘の回転を相乗させて舞う様に鞘打ちのラッシュを浴びせる

「時雨瞬光流、旋狼牙っ！」

最後に、一瞬のタメの後に鞘のアッパーカットでフィニッシュ。

そのまま鞘を刀に被せる様に戻し元の構えに戻す。流石に効いたのか理子は2，3歩後ずさり、その隙に俺も壁際から脱出する。理子も直ぐに態勢を立て直し、こちらに向き直る。その口元からは僅かに血が垂れていた

「へぇ～、やるじゃない。」

そして手の甲で血を拭うと

「流石は『時雨の息子』って所だね。あの状況でまさか反撃されるなんて思わなかったよ」

そして理子の口から出た、お決まりの単語『時雨の息子』、恐らくはダメ元の挑発のつもりなのだろう。わかっている以上、乗る必要も無い。それに――

「挑発のつもり、か？　悪いがその言葉じゃ俺は取り乱したり怒り狂ったりはしないぞ？」

「さんざん言われなれたからもう諦めたって事？」

「違うな。俺は俺だ、『時雨の息子』である以前に時雨トキヤと言う一人の少年だとちゃんと自分の中で納得しているからだ。理子と違ってな」

「なに……？」

その言葉に理子の声が若干低くなる。どうやらこの手の話なら逆に相手を挑発できるようだ。それが判り、俺はそのまま言葉を続ける

「さっきのアリアの言葉を補完する様な言い方だが、４世と言われて何が悪い？　周りの連中がなんて言おうと自分は自分だと自分自身で認められればそれで十分だ」

「……黙れ」

「むしろ、こんな事をしても意味は無い。仮にこれでご先祖様を超えた所で理子が初代アルセーヌ・リュパンの子孫である事実は変わらない。例え初代リュパンを超えた所で周りは――！？」

「黙れっ！」

そこから先の言葉は続かなかった。理子は突然声を荒げたかと思うと、間合いを詰め近距離で二丁の拳銃を撃ち、トキヤはそれを避ける。そして次にナイフが振り下ろさるがトキヤは鞘で防ぐ。が、その後の展開が違った。二本目のナイフによる二撃目はなく、代わりにトキヤの首に理子の髪の毛が巻きつき、そのままトキヤの体を宙に持ち上げ首を絞める。理子はナイフを片方床に捨てて髪の毛で直接捕まえに掛かった。トキヤにむける理子の表情はさっきまでの戦闘を楽しんでいた時と違い、はっきりとした怒りを露にしている

「あんたは……あんたは何も知らないからそんな事が言えるんだっ！！　４世、オルメス、時雨の息子！　こうした名前はあんたが思ってる以上に人を縛り付ける。自分は自分だと自分自身で認められればそれでいい？　何も知らない癖に……判ったような口を利くなぁっ！！」

挑発どころかどうやら理子の一番触れてはいけない部分に触れてしまったらしい。理子は憤怒の表情のまま、勢いよくトキヤを自分の方に引き寄せながら、そのまま拳銃で殴りつけるように銃口を突

きつけ、発砲、そしてトキヤを壁の方に投げつける。壁にぶつかり、地面にうつ伏せに倒れたトキヤは……動かない。完全に気を失っている。理子は暫く息を乱していたが、呼吸が落ち着いてくるとゆっくりとトキヤに近寄り、銃口をトキヤの頭部に向けた。そして数秒ほどそのままだったがやがて、ゆっくりと銃口を下ろし、傍にペタンと座り込む。さっきとは違う、その顔に悲しみの色を浮かべて

「ホントに、何も知らないくせに……」

けれど――

「でも、そんなトキ君が羨ましいよ……」

皮肉でも何でもない、切望の念が込められた言葉。周りから何を言われても決して動じない、自分みたいに拒絶し怒る様な事もしない。何でも無い様にサラッとそれを流して言いたい奴には言わせておいて、それでも自分は自分だと確信し、それをハッキリと口にすることが出来る

「理子も何も知らなかったら、トキ君みたいに生きていけたのかな？」

何も知らなければ、周りがどれだけ４世と言おうと何でもない様に理子は理子だと言えたのだろうか？そこまで考えて、やめた。トキヤじゃないけれどこれは無駄な考えだ

「超えなきゃ、理子は理子になれない……。自由になれない……」

名が時に自分は自分である事を拒絶し、そしてその所為で人は縛られる事を自分はもう知ってしまったから……“あいつ”との約束

を果たさない限り、自分は自分どころか自由にすらなれないのだから

「だから今日、理子はオルメスを殺す。殺して、自由になるんだ」

そう言って立ち上がると、トキヤに背を向けて歩き出す。出入り口の前で最後にもう一度、トキヤの方を振り返る。それから暫くトキヤを見詰めていたがやがて目を伏せて彼の事を振り払う様に首を横に振る。そして目を開けると

「さぁーって。こんな狭い飛行機の中、二人は何処に逃げたのかなぁ？」

そのまま、改めてバーを後にした

一方その頃――

「おい、本当か！？　アリアの乗った便がハイジャックされたって！？」

武偵校の教室。そこに息を切らしながら武藤が駆け込んできた。教室の中には不知火を始めとした何人かの生徒がノートパソコンと向き合っていた。それに不知火が無言で頷くとノートパソコンに向き直り状況を説明する

「通信科（コネクト）の中空知さんが偶然、無線を傍受した。現在当該機は南関東上空を旋回中。犯人の目的は不明。ただ、機内で複数の武偵が犯人と戦ってるらしい」

「複数？　アリア以外にも武偵が乗っていたのか？」

「いや、乗客名簿には他の武偵らしき名前はなかった」

その時、一人の男子生徒が教室に入ってきた

「新情報だ！　そいつの離陸間際に家の制服を着た男子生徒が二人乗り込んでいる」

「何！？」

うちの生徒、それを聞いて不知火の頭に一人の生徒が思い浮かぶ

「まさか……遠山君？」

「バッドエンドのお時間ですよー。くふっ、くふふふっ」

それから、二階のスイートルームの一室に人の気配を感じ、扉を

開けるとそこには予想通りキンジの姿が

「アリアと何かしたんだ？　よく出来たねぇ。こんな状況下で」

そこに居たキンジの雰囲気は大きく変化している。人が変わった様な冷静な鋭い目付き。理子はそれを知っていた。彼の家系に伝わる能力を、キンジは今それが発動した状態にあった

「それで、アリアは何処？」

「さぁな」

アリアは居ない、何処かに隠れているらしい。理子が尋ねてみればキンジの視線ががシャワールームの方に泳ぐ。傍から見れば余りにわかりやすい反応にブラフと考えるのが普通だが、部屋を見渡せば布団が人が入っているかの様に膨らんでいる。こちらもあからさま過ぎてこうなると状況は違ってくる。シャワールームに目が泳いだのはワザとで、それを見た理子の意識が反対の布団の方に行った段階でシャワールーム内のアリアが仕掛けてくる。もしくは理子がその作戦を読んでくるのを見越してシャワールームに理子の意識を持って行き布団の中にいたアリアが仕掛けてくる。どちらも十分にありえるケース、ならば今はどちらかに居るアリアに仕掛けるのは得策じゃない

「そういうキンジ、ステキ。ドキドキする、勢い余って殺しちゃうかも」

まずは目の前のキンジから、そう判断すると理子は銃を構える

「見せて、オルメスのパートナーの力」

そして引き金を引こうとしたその瞬間、キンジは布団の中に入っていたそれを引っ張り出す

（酸素ボンベ！？）

布団を使った偽造は大体は同じく丸めた布団を入れておくのが一般的。だが、その中に入っていたのは酸素ボンベ。この状態でもし撃てば酸素ボンベは爆発し自分もやられる。だから撃てない、その一瞬の隙を逃さず、キンジは酸素ボンベを理子に向かって投げつけ、理子がそれを避けると同時にバタフライナイフで斬り掛かる。が、その時再び飛行機が大きく揺れて、体勢が崩れる。その隙に理子が距離を置くとキンジの頭部を狙い引き金を引く。飛んでくる銃弾。だが、今のキンジにはそれがスーパースローの様に見える。ナイフを縦に構えて飛んでくる銃弾を真っ二つにする事も出来る。縦に半分になった銃弾はキンジの頭の横を通過し壁に穴を開ける

「動くなっ！」

そして、キンジが銃を構える、それはアリアの持っていた漆黒のガバメント。さっきのキンジとはまるで桁違いの戦闘力。できるならもう少し楽しみたかったが、この攻防でアリアがシャワールームの方に居ることが判った。自分の一番ターゲットはアリア、だから

「死ねっ！　アリアっ！！」

目はキンジの方に向いたまま、理子はシャワールームに向かって発砲。しかし次の瞬間、天井の荷物入れが開き、その中からアリアが飛び出し、もう一つの白銀のガバメントで理子の銃を弾き飛ばす。そして

「っ！！」

理子の態勢が崩れたところ、アリアは着地と同時に刀を抜き肉薄。次にナイフを持っていた理子の髪を斬り飛ばす。

「う・・・」

いきなりの奇襲に対処できず、自身の武器を全部封じられ理子は切られて短くなった自分の髪に手を当てる

「峰・理子・リュパン４世」

「殺人未遂の現行犯で逮捕するわ」

最後に二人でガバメントの銃口を理子に向ける。理子は2，3歩後ずさるが、降参するわけでもなくむしろ、感心した様に笑みを浮かべる。その反応に二人が怪訝そうな表情になると

「ぶわぁーか」

と、言うと同時に自分の髪の毛をわさわさと動かす。すると、飛行機がまた大きく揺れた

「バイバイチャーン」

こちらは突然の揺れにバランスが崩されているのに理子はまるで判っているかのようにこの揺れの中で二人の間を走りぬけ部屋を後にする。が、今回は揺れただけじゃない

「高度が、どんどん下がっている？」
「アリア、操縦室を頼む。俺は理子を」
「判ったわっ！」
アリアと一旦別れ、さっきのバーにやってくるとそこには壁に背を向ける形で理子が立っている。そして、バーの中にあるソファー。そこにはさっき理子と戦っていたトキヤが横たわっていた
「トキヤ！？」
「やっと来たね。キンジ、それ以上は近づかないほうがいいよ？」
「爆弾！？」
壁に背を向け立つ理子の周り、そこには自分を囲むように壁と床に爆弾が仕掛けられていた
「ご存知の通り、わたくし武偵殺しは爆弾使いですから」
そう言って、スカートの裾を少しだけ持ち上げて軽く会釈する
「……トキヤに、何かしたのか？」
「ああ、彼？　別に何も。ただ気絶しているだけ。余りに生意気な事を言うもんだから少しだけ本気をだしてあげたの」
理子の言うとおり、トキヤの呼吸も状態も安定している。本当にただ気絶しているだけだ。ならば、とりあえずはトキヤはこのまま

でも大丈夫だ。キンジはそのまま理子の方に目線を戻し

「驚いたよ。お前がステルス、超能力を使う超偵だったとはな」

「まぁね。女の子の秘密って奴？」

「髪の毛の中にコントローラーを仕込んで飛行機を操作していた訳だ。通りでさっきからお前にとって都合よくゆれる訳だ」

「一人でハイジャックをするには色々工夫が必要なの」

その時、今まで下降していた飛行機が水平飛行に戻った。アリアが、操縦席側に仕込まれていたであろうコントローラーを何とかしコントロールを取り戻したようだ

「ねぇキンジ、イ・ウーに来ない？」

「理子、一つ聞きたい。そのイ・ウーとは何だ？」

「この世の天国……キンジ一人ぐらいなら連れて行ってあげる。それにイ・ウーには――」

理子は目を細めて

「キンジのお兄さんも居るよ」

「理子、余り俺を怒らせないでくれ。武偵法第９条を破りたくない」

表情を険しくし、キンジは理子に銃口を向ける

「それは困るなぁ。キンジには武偵のままでいてもらわなきゃ。じゃ、気が変わったらいつでも来て、歓迎するから」

そう言って、理子は自分を抱く様に両手を肩に乗せる

「あ、そうだ。最後にイ・ウーからプレゼントがあるみたいだよ。おったのしみにー」

次の瞬間、爆弾が爆発すると理子の居た部分の壁が壊れ、理子が機体の外へ飛び出していった。と、同時にバーの中にあった。コップやワインが穴から吸い出されていく。俺はトキヤの眠っているソファーに駆け寄り、ソファーにしがみつきながらトキヤが飛ばされないように押える。やがて、緊急用のシリコンシートが穴を塞ぎ、ようやく動ける様になった所で窓の方に駆け寄る

「理子！！」

キンジが窓から外を覗くと理子のあの改造制服がほどけパラシュートとなり、理子は下着姿のまま暗闇の空に姿を消した。そして、それと同時に近づいてくる光、それは

「ミサイルっ！？」

飛んできたミサイルは、飛行機の両翼、そこに取り付けられた４つの内２つのエンジンを破壊した。残りの２つのエンジンのお陰で如何にか飛んではいるが時間の問題。トキヤをバーに残したままキンジはアリアと合流すべく操縦席に向かった

「アクセスが遮断された！？」

武偵校の教室。そこでは不知火たちが空港の管制にアクセスしキンジたちの乗っている飛行機の状態を確認していたが突然そのアクセスが遮断された。どうやら誰かが暗号コードを変えたらしく、その解析も不可能な状態だ

「おい、武藤原因がわかったぜこの暗号化のパターン、何処かで見たことがあると思ったら」

その時、情報科（インフォルマ）の生徒が口を開いた

「防衛省が介入してやがる」

武偵殺し、理子を退け後は飛行機を着陸させれば解決と言う状態。だが、此処に来て再び事件の雲行きが怪しくなってきた

## 9th bullet ー『武偵憲章1条』

「アリア、待たせた」

「遅いっ！　理子は？」

「逃げられたよ」

トキヤをバーから別の部屋に移してから操縦室でアリアと合流し自身も副長席に座る

「それに4機のエンジンの内、2機をミサイルでやられた」

「それじゃ、さっきの揺れって？」

「イ・ウーからの贈り物だそうだ。パイロットは？」

「ギャレーに寝かされてた。当分起きそうに無いわ。他の乗客も操縦経験者は0」

「頼れるのはアリアだけか」

「あたしだって、小型機しか操縦したことないわよ。こうして真っ直ぐ飛ばすだけで精一杯。こんな大きなジェット機着陸させるなんて出来ないわよ」

そう言って操縦するアリアの目は真剣そのもの、けれど不安の色も確かに混じっていて。キンジは彼女を安心させるため、アリアの頭に手をのせて

「それで十分だ。助かるよ」
「もう、バカキンジ……」
そう言うと、アリアは頬をほんのりと赤く染めてそっぽを向く。
キンジは手をよけると通信用のインカムを装着し
「羽田コントロール応答してくれ。こちら６００便」
『こちら航空自衛隊関東方面司令部。６００便か……』
「自衛隊？」
なぜ、羽田に連絡し自衛隊が出てくる？そんなキンジの疑問をよそに相手は通信を続ける
『そうだ。そちらは現在こちらの管制下に入っている。状況を知らせよ』
「ハイジャック犯はパラシュートで逃走、乗客も無事だ。パイロットが負傷している為、乗り合わせた武偵２名で操縦している。俺は遠山キンジ、もう一名は神崎・Ｈ・アリアだ」
と、状況を説明しているキンジの目に自衛隊の戦闘機が一機目に入った
「よくやった遠山武偵。次の指示を待て」
そこで通信が切れると、キンジはある物を取り出し操作を始めた

「それは？」
「衛星電話だ。他の乗客から借りてきた」
言いながらある番号を入力すると数回のコールの後に相手が恐る恐る電話に出た
『も、もしもし……』
「武藤、俺だ。変な番号からですまない」
『キンジ……キンジなのかっ！？』
「事情があって今東京上空で飛行機を操縦している」
『やっぱりお前だったのか。無事だったんだな』
「ああ、エンジンを２機やられた以外はな」
『なっ！！　エンジンを！？　お前、燃料計は読めるか？」
そう言われて、キンジは燃料系に目を向ける。２４０から物凄い勢いで減っているのが目に入った。見たままの状況を伝えると、武藤は軽く舌打ちをする
『クソッタレ。やっぱり、盛大にもれてやがる』
「どれくらい持つ？」

『良くて１０分って所だな』
「言いにくい事をサラッと言うぜ」
『それで、キンジ――』
「おい？　武藤」
そこで言葉は途切れ、数秒ほどノイズが走ったかと思うと
『こちら、航空自衛隊関東方面司令部。６００便、応答せよ』
次にノイズが消える頃には男性の感情の無い無機質な声が響いた

「ちっ、ここにも妨害が入った」
顔をしかめながら武藤が携帯を切ると、不知火がパソコンの画面を見ながら口を開いた
「どうやら政府は徹底的に６００便を孤立させたいらしいね。未だにマスコミにも騒がれていない」
「何のためにだ！？　民間機がハイジャックされてるんだぞ！？」
『通信科《コネクト》の中空知です。自衛隊無線の傍受にようやく

成功しました』

直後、別室で自衛隊無線の傍受を試みていた中空知から連絡が入る

『それによると政府の見解は――』

中空知の口から説明された非道としか思えない政府の見解。それに教室に居た生徒全員が驚愕の表情を見せた

『繰り返す、現在羽田は滑走路のトラブルで使えない。進路を右に取り、太平洋上に進路を取れ。自衛隊機がキミ達を安全確実に不時着させる場所へ誘導する』

「キンジ、ここは従いましょ」

そう言って旋回しようと操縦桿を傾けようとするアリアの手をキンジが止める

「キンジ？」

「海の上に安全確実に不時着できる場所なんてない」

『その通りだ。よく知ってたな』

キンジの言葉に続く様に割り込んできた親友の声

『なんだ？　どうやって割り込んだ？』

『うるせぇっ！　お上は引っ込んでろっ！　キンジよく聞け、政府も自衛隊もとっくに６００便を見捨ててる。お前らの命より、着陸に失敗した時のリスクの方がでかいからな』

政府の判断、それにアリアは驚きの表情を浮かべるがキンジは今までのやり取りで大方予想がついていた為特に反応はない。が、次の武藤の一言に驚愕に目を見開いた

『従わない場合は撃墜もやむなしだと！」

「っ！？」

「撃墜っ！？」

そしてそれを肯定するかのように、自衛隊機はジェット機から離れていく。それもそうだ、こちらの見解がばれていると言う事は自分達の通信が傍受された可能性が大きい。もし、ここで６００便を落としたらその通信記録が証拠となり世間から思いっきり叩かれるのは目に見えている。諦めて離れるしかないのだ

『聞きやがれっ！　武偵は武偵を見捨てねぇ！　俺たちは乗客だけじゃなくお前たちも助けてぇんだよっ！』

「武藤……」

そして、自衛隊機が完全に見えなくなった所でキンジはある決断を下す

「武藤、この飛行機なら着陸するのにどれくらい距離が掛かる？」
『風向きにもよるが２０００メートルちょいって所だな』
「ギリギリだな……」
「ギリギリって？」
「武偵校の人工浮き島《メガフロート》は南北２キロ、東西５００メートル。対角線上に使えば２０６２メートルまで取れる」
『キンジ、お前……』
「安心しろ。学園島じゃなくて空き地島の方を使う」
『しかし、キンジ。あそこはホントに何もねぇただの空き地だ。この天気じゃ島の輪郭すらみえねぇぞ』
「……何とかするよ」
『キンジ、くそっ！　どうなってもしらねぇからな！』
武藤は乱暴に通信を切るとそのまま教室から飛び出していった
「輪郭すら見えない、か。武藤の言ったとおりだな……」
それから飛ぶ事暫く、地理的にはそろそろ空き地島の筈だ。だが、

空き地島が浮いているはずの場所には視界的には何もない。ライトの類もない為本当に島の輪郭すら見えない、けれど燃料の残りもあと僅か、今更他の着陸場所を探す余裕もない。やるしかない、キンジは飛行機を着陸態勢に切り替える

「アリア、俺はキミを死なせたくない。だが、最悪の場合も覚悟しておいてくれ」

操縦桿を握るキンジの手には自然と力が入る。すると今度はアリアがキンジの手に自分の手を重ねる。さっき、キンジが自分の緊張と不安をほぐしてくれた時の様に

「キンジ、あんたにならできるわ。あんたは出来なきゃいけないの、武偵をやめたいなら武偵のまま死んだら負けでしょ？」

「アリア……」

「あたしだって、まだママを助けてない」

アリアの最大の目的、それは武偵殺しを始めとしたたくさんの犯罪者達に冤罪を着せられ懲役８６４年と言う事実上の無期懲役を取り消し、自分の母神崎かなえさんを助ける事だ

「あたしたちは死ねないの。こんな所で死ぬ筈はないわ」

その時、空き地島に一つの光が灯った。そしてそれは二つ、三つと数を増やしていき二つの光の列を作っていた。まるで、滑走路の誘導灯の様に

『キンジ、聞こえてるかっ！？』

「武藤？」

『お前が死ぬと白ゆ……じゃねぇ、泣く奴がいるからよ。俺、車輌科の一番デカイモーターボードも、整備科の懐中電灯《マグライト》も無断で持ち出しちまったんだぞ！』

そう、武藤はあの後車輌科と整備科を回り、他の生徒と協力して灯りが点く物をかったぱしから持ち出して空き地島に並べ、誘導灯代わりにしたのだ。無論、そういう備品を持ち出す際には教務科に行き手続きをしなければならない。けれど、そんな時間はない。だからこそ彼らはあえて校則を破った、全ては仲間の為に

『だから、絶対に着陸しやがれ！　そんで、アリアと一緒に絶対に帰って来いっ！！』

「武偵憲章１条……」

空き地島に輝く光、それを見てアリアは呟く

「仲間を信じ、仲間を助けよ」

そしてその視線をキンジに向ける。その視線に気づき自分を見詰め返すキンジの瞳、其処にはもう不安の色は無い。キンジは力強く頷くとゆっくりと機体の高度を落としていく。そして――

## １０ｔｈ　ｂｕｌｌｅｔ－『例えデュエットにはなれずとも』

キンジは自分の部屋に居た。ベランダのフェンスにだらんと体を預けて手をブラブラさせている

「我ながら無茶をしたもんだな……」

そう呟くキンジの視線の先にはこの間、じぶんが乗っていた６００便の姿。その右翼は空き地島に立てられた風力発電の柱に引っかかっており若干ゆがんでいる。結局、対角線距離だけでは止まる事は出来ずキンジは飛行機の翼を柱に引っ掛けて止めると言う荒業で無理やり停止させた

「生きた心地がしなかったわよ」

キンジの呟きに返事をする様にアリアもベランダに入ってきてフェンスに手を乗せる

「ママの公判が延びたわ。今回の件で『武偵殺し』の件は冤罪だって証明できたから」

「そうか……」

「ねぇ、キンジ。なんで、あの飛行機に、あたしを助けに来てくれたの？　あのぐらい、あたし一人でも何とか出来たのに」

「わからねぇよ……」

正確にはその時はヒステリアモードだったからと言う答えがある

がそれを言うのは嫌だったのでそう返した。すると、アリアは少し俯くと

「……ゴメン、今のウソ。あたし一人じゃ何とか出来なかった。あんたが居なかったらきっと、あたし……」

それからたっぷり数秒、お互いに無言になった。やがて、アリアは顔を上げて

「だから、今日はお別れを言いに来たの」

「……お別れ？」

「やっぱり、パートナーを探しに行くわ。ホントはあんただったら良かったんだけど。でも、約束だから」

「約束？」

「組むのは一回だけって約束でしょ？」

忘れてたの？と言いたげに呆れたような表情を浮かべた

「キンジ、あんたは立派な武偵よ。だから、あたしはもうあんたをドレイとは呼ばない。だから……もし、気が変わったら……もう一度、会いに来て。その時は……あたしの、パートナーに」

探しに行く。とは言っているが、やはりアリアはキンジを諦められない。だからこそのいま出来る精一杯の勧誘。そして、それに対するキンジの答えは、拒否でも承諾でもない

「……悪い」

謝罪だった。そして、そう言われる事も予想はついていたのか。アリアもそれ以上は何も言わずにそのままベランダを後にする。そして纏めてあった荷物を持ち、男子寮を後にする。門を抜け男子寮を見上げるアリアは

「やだよ……イヤだよキンジ……」

泣いていた

「いないよ……あんたみたいな奴。もう、見つかりっこ、ないよ」

やがて、アリアが迎えが来ている女子寮に向けて歩き始めたのを見送り、キンジは窓のカーテンを閉める

「これでいいんだ。俺は武偵なんてやめるんだ……」

自分に言い聞かせるように言葉を搾り出すと、キンジは机のタンスから一枚の書類を取り出す。それは、転出届。こいつを教務課のポストに入れれば全てが終る。来年にはこんな学校から立ち去り、これからは普通の高校生として過ごしていける。が、キンジは書類を手に持ってはいるがその場から動けずにいた。そんな時――

「よぉ、キンジ、生きてるか？」

この場の雰囲気とはミスマッチな明るい声。其処には頭に包帯を巻いたトキヤが居た

「あっ、それ転出届か。これから教務課に出しに行くのか？」

その問いにキンジは答えない。無言のまま、ただジッと転入届を見詰めている。そしてその目が一瞬だけ自分の携帯の方を向く。携帯に着けられた白猫のマスコット『レオポン』のストラップが目に入る。そしてそんな様子のキンジをトキヤも何も言わずに見守る。やがて――

「なぁ、トキヤ……」

「ん？」

「俺今、どんな顔してる」

その問いに、トキヤは少し呆れ気味に笑みを浮かべながら

「ヒドイ顔だよ。ものすっごくな、少なくても目的達成間際の人間のする顔じゃないな」

「そう、か……」

恐らくもう、キンジの中では答えは出ているのだろう。ただ、武偵をやめたいと思う気持ちは今も変わらずあり続けるから、誰かに背中を押してもらいたかっただけなのだろう。やがて、キンジはため息を吐いて

「甘いな……甘いよ、キンジ。お前は本当に……大甘ヤロウだっ！」

声を上げて、キンジは転出届を破り捨てるとそのまま部屋を後にした。トキヤは首だけを向けてそれを見送るとソファに体を沈める

「ホントにな……転出する前にくたばっても俺はしらねぇぞ」

恐らくはキンジのあれは一時の感情でしか無い。途中、すれ違ったアリアは涙を流していたから、それにやられたのだろう。見て見ぬ振りをしていればやがて時がその想いすらも風化させてくれると言うのに

と、暫く目を伏せていたが

「いや、見て見ぬ振りを出来ないのは俺も同じ、か」

ふと、何を思ったのか携帯を取り出すとある番号に電話を掛けた。数回のコールの後、コール音が止まり次に流れてきたのは『お客様がお掛けになった番号は、現在使われていない為、掛かりません』と言う無機質なメッセージ。殆ど予想通りだったためトキヤは表情一つ変えずに携帯をしまうと、ソファの背もたれに背中を預け、天井に目を向け何かを考えていた

「アリアっ！アリアーーーーっ！」

キンジが女子寮の屋上にたどり着くと其処には一台のヘリ。アリアを迎えに来たロンドン武偵局のヘリが丁度、アリアを乗せて飛び始めたところだった。武偵なんて嫌だ、武偵校も嫌だ、女も嫌だしヒステリアモードだって嫌だ。その思いは今も変わらない。実際、こうして叫んでいる今も心の何処かでこんなバカな事やめるんだと、言っている自分が居る。

「アリアっ！　行くなっ！　俺が、俺が……っ！」

けれどそれ以上に、アリアの涙を無視する様な、そんな下衆野郎に成り下がるのはもっと嫌だ。どうせ転出申請届けの提出期限はまだ半年以上あるし、いま出そうが期限ギリギリに出そうが、実際に転出できるのは来年の４月だ。だったら、せめてそれまでの間だけでも

「お前のパートナーになってやるっ！！　だから……行くなっ！！
アリア、アリアーーーーっ！！」

今までの人生の中で一番の大声を上げて息を切らすキンジ。それでもその目線だけは今も高度を上げ続けるヘリに向いている。すると、突然ヘリのドアが勢いよく開いたかと思うと其処からアリアが姿を見せて

「来るのが遅いのよっ！　バカキンジっ！！」

なんとそのままヘリから飛び降りた

「ちょっ……おいっ！」

自分に向かって真っ直ぐ落ちてくるアリアを受け止めるキンジ。そしてアリアの落下の勢いでキンジは背後にあった金網に背をぶつけ金網が斜めにひしゃげた

「お、お前なぁっ！」

とんでもない無茶をするアリアにキンジが何かを言おうとした時、

ヘリから今度は黒のスーツ姿にサングラスを掛けた白人男性が顔を覗かせ何かを叫んでいる。そして、アリアは男性を睨みつけて舌を出した。すると、アリアの態度に怒ったのか、ヘリの中にいた武偵局の人間が数人ワイヤーを使って降りてくる。恐らく、無理やりにでもアリアを連れ戻す気なのだろう

「アリア、あいつらまだワイヤーは持ってるか？」

「今のリペリングで使っちゃった筈よ。ヘリの中にも予備はないわ」

キンジの問いにアリアは二丁の銃を手にかけながら答えた。こちらはこちらでどうやら迎撃するつもりなのだろう

「撃つな。相手は部外者だ、怪我をさせたら大変な事になる」

「じゃあ、どうするつもりよ？」

逆に今度はアリアが聞き返すとキンジは周りを見渡してからアリアの手を引いて屋上の出入り口まで来ると自分の銃のグリップでドアノブを強打。ノブをひしゃげさせドアを開けれなくした

「で、出口を塞いでどうするつもりよ！？」

「悪いな、アリア。“今の俺”にはこれぐらいしか思いつかないんだ」

「？」

そして、そのまま斜めに折れ曲がりジャンプ台の様になった金網に目をやり

「あの時、アリアは俺の為に飛んでくれたよな。ここから」

そう、理子にチャリジャックをされた時、アリアはここから飛び降り、そしてキンジを助けた

「アリア、今の俺は何も出来ない素の俺だけどな。してくれた事の、恩を返すぐらいは出来るんだよっ！」

声を張り上げると、キンジはそのままアリアをお姫様抱っこ。そしてそのまま金網に向けて走り出した。アリアが顔を赤くし何かを言っているがキンジはそれを無視して

「アリア！　お前は独奏曲《アリア》だ！　そうだ！　そうなんだろ！　でもな――」

そして、無能な自分なんかじゃアリアをデュエットにする事なんて出来ないだろう。

「こんな俺でも――」

けれど、たとえデュエットにはなれずとも

「ＢＧＭぐらいにはなってやるっ！」

アリアを際立たせ、そしてより輝かせる。そんなＢＧＭに。その決意と共にキンジは屋上から飛び降りた

**Go For The NEXT!!**

アリアのパートナーとなる事を決意したキンジ、けれどアリアのパートナーと言うのは自分が思ってた以上に大きな役目で

「神崎・H（ホームズ）・アリア。シャーロック・ホームズ４世よ」

けれどそれに愕然とするヒマも無く、武装巫女、星伽白雪の登場でキンジの部屋は修羅場と化す

「やっぱり居た！　神埼！　H！　アリアーーーーっ！！」

キンジがアリアの正式なパートナーとなり始めて立ち向かう事件、それは白雪を超偵をさらう誘拐犯、魔剣（デュランダル）から守る事

「私も、私もキンちゃんと一緒に暮らすぅっ！」

アリアからの依頼を受け、あの二人も白雪護衛に動き出す

「つくづく、僕は貴方達と縁があるみたいですね」

学校がアドシアードに燃える中、遂に姿を現す魔剣

「私に続（フォローミー）け、白雪、レン！　お前達の居るべき場所は此処ではない」

魔剣との戦い。その中で明らかになる少年の過去の一端

「僕は誰かを僕の様に不幸にしたくなかった。だからあの場所を去ったんだ。そして、戻るつもりも無い！」

掟と定め、その籠に閉じ込められし鳥は、遂に自らの意思でその籠を打ち破る

「今の私は、私に星伽のどんな制約（おきて）だって破らせる、たった一つの存在の傍に居る。その気持ちの強さまでは、あなたは見抜けなかった」

次回、『緋弾のアリア　瞬光の刃』２ｎｄ　ｔｒｉｇｇｅｒ　『炎と氷と雷の輪舞曲（ロンド）』

「『白雪』っていうのは真の名前を隠す伏せ名。私の諱（いみな）、本当の名前は――」

想いを決意に変えて、今、星伽の本当の力が解き放たれる

## Ｇｏ　Ｆｏｒ　Ｔｈｅ　ＮＥＸＴ！！（後書き）

という訳で原作１巻はこれにて終了。レンの紹介を挟んで魔剣編に突入します

## キャラ紹介PART2

レン・夕凪(ゆうなぎ)

所属：2年B組探偵科
武器：太刀（整備科の特注品）
Aランク武偵
特技：剣術、交渉術

日本人とイギリス人の間に生まれたハーフの少年。その為、髪は日本人らしく黒だが目は外国人らしく赤色の目をしている。ある“超能力”とそれにまつわる事件がきっかけで人との関わりを極力避ける様にしている。が、本来は困ってる人等を放っては置けない世話焼き癖のある性格だった為、きっかけがあれば何時の間にか関わってしまっている事が本人の悩みの一種となっている

探偵科ではあるが剣術やバイクの運転技術も優れており、愛用している太刀とバイクは整備科で作ってもらったオーダーメイド。過去の事件を起こした超能力は使えなくなっており、代わりに電気を操る能力をある所で習得し使っている。自分自身の超能力を使えなくなった原因はレン自身にも判らない、と言うより原因の追究は全く行っていない。また、狙撃科のレキとは良く仕事で組む事が多く、レンも余り深く関わらなくて済む相手と言う事で事実上“仕事上の”パートナーとして認識している

## １ｓｔ　ｂｕｌｌｅｔ－『武装巫女、荒ぶる！』（前書き）

これより魔剣編に突入。ここではキンジとレンがメインを飾ります。

## １ｓｔ　ｂｕｌｌｅｔ－『武装巫女、荒ぶる！』

「全く、とんでも無い目にあったわ……」

「うるせぇ……」

武偵校男子寮のエレベーターが開くと其処から一組の男女、キンジとアリアが姿を見せた。アリアを抱え女子寮の屋上から飛び降りたキンジ。彼の考えでは下の植物園のビニールハウス、その屋根をクッション代わりに着地する予定だったのだが、タダのビニールが人二人分の重さを支えきれる筈も無く、二人はビニールハウスの屋根を突き破り、ハウスの中に落っこちたと言うオチだった。とりあえず、二人は若干ぼろぼろになりながらもどうにか武偵局の人間を振り切り、男子寮にたどり着いたと言う訳だ

「なぁ、理子の奴。お前の事をオルメスって呼んでたけどなんでＨがオルメスなんだ？」

「あんたバカじゃない？　オルメスはフランス語読みでしょ？　スペルはＨ、Ｏ、Ｌ、Ｍ、Ｅ、Ｓ」

「だから、それがなんだって――」

「まだ判らないの？　私のフルネームは“神崎・Ｈ（ホームズ）・アリア”、シャーロック・ホームズ４世よ」

「シャーロック、ホームズ！？」

「うん」

シャーロック・ホームズ、それは世界中の誰もが知る名探偵。そして、アリアの話がホントならば彼女はその子孫にして４代目ホームズの名を襲名している事になる。そしてパートナーたる自分はさしずめジョン・Ｈ・ワトソン。遠山の金さんならぬ、遠山のワトソンさんという事になるのだろう。しかし――

（ありえないだろ。こんなホームズ……）

冴え渡る推理とかそういうものは一切無く、直感と勢いで突き進むアリアと自分が知るホームズ像はどうしても一致しない。そして、キンジがその事について考えられるのもここまでだった。直後、ドアがノック、否、ノックというよりはドアを勢い良く殴りつける様な音がして

「キンちゃん！！　どうしてメールの返信くれないの！？　ねぇ、女の子と同棲してるってホントっ！？」

それに続いて聞こえてきた幼なじみの鬼気迫った声。大慌てで携帯を開くとキンジは顔を青くする。其処には４０通近くの新着メール。しかも全部彼女からの着信だ。最初は２０分置き、何通かしてから１０分置きと感覚はどんどん短くなっており、最後のあたりは１分置きに送られてきている

「入るよ……キンちゃんっ！」

次の瞬間、防弾、防刃の筈のドアがバラバラになり、その向こう側には刀を手に持った巫女さん。幼なじみの星伽白雪の姿。そして彼女がアリアの存在を視界に捕らえると白雪の目付きは更に鋭くなって

「やっぱり居た！　神埼！　Ｈ！　アリアーーーーっ！！」

そして刀を振りかざし、アリアに襲いかかる

「違うんだ、白雪っ！　これはだな！」

「キンちゃんは悪くないーーっ！　キンちゃんは騙されてるだけっ！　この泥棒猫、キンちゃんを汚した罪、死んで償えぇーーーーーっ！！」

「落ち着け白雪！　俺は何処も穢れてない！」

と、キンジが必死で弁明するも白雪の耳には一切入っておらず

「神崎！　Ｈ！　アリア！　覚悟ーーーーっ！」

縦に、横に、斜めにと刀を振って（刃は返さず）アリアに襲い掛かる

「えっ、いや、ちょ……！？」

「天誅ーーーーーっ！」

なんで、自分が襲われなきゃいけないのか。突然の事で訳が判らず、必死に言葉を探すアリアにお構い無しに白雪は刀を振り下ろし、アリアはそれを両手で挟んで受け止める

（真剣白刃取り！？　初めてリアルで見た！）

「なんで、あたし……！？」

「黙れ、この泥棒猫……！」

「なん、なの、よっ！？」

そして、白雪の刀の軌道を横に流し、アリアは間合いを置き、白雪は間髪いれずに追撃をかける

「キンちゃんの前から消えろおぉーーーーー！！」

「だから、ワケ判んないっ！　人の話聞きなさいよっ！！」

と、がむしゃらに襲ってくる剣戟を避けながらも何とか話し合いを試みるアリア。けれども白雪は止まらず、振るわれる刀はアリアの髪を数本斬り飛ばし、壁に突き刺さり、更にはテーブルを真っ二つにしていく

「落ち着け、白雪！　これはだな――」

キンジも必死に白雪をなだめようとするが、事態は更に悪化する。そう、身に覚えも無い事で襲われてるという事態に、アリアが何時までも冷静でいられるかと言えば

「いい加減にしなさいっ！！　風穴開けるわよっ！」

答えはノー。案の定、アリアもすぐにキレて拳銃を抜いて発砲。ヒステリアモードやＡＳと言った能力が無ければ常人が弾丸を避けるのは不可能に近い、が。白雪は刀の峰を指で撫でると、飛んできた銃弾を弾いた

「あんた、超偵！？」

そう、白雪は鬼道術と言う秘術を使う超偵であり、普段のおしとやかな雰囲気とは裏腹にその実力はトップクラスで超偵を育てる事を専門とした学科ＳＳＲの秘蔵っ子とされている。やがて、銃は効かないと判断しアリアも刀による接近戦に移り、白雪の攻撃を刀をクロスさせて受け止める。無論、キンジは我関せずと、少し離れた所で見守っていたが鍔迫り合いをしていた二人が同時にキンジの方を向いて

「キンちゃん！　この女を後ろから刺して！　そうしたら全部見なかった事にするよ！」

「キンジ！　あたしに援護しなさい！　あんたあたしのパートナーでしょ！？」

案の定双方から援護申請が飛んできた。が、アリアも超偵でないにせよＳランクの武偵。そんな二人のぶつかり合いに首を突っ込もうものなら命が幾つあっても足りない。故に――

「……勝手にしろ。心ゆくまで戦えよ」

双方からの援護申請をキンジは却下し、ベランダにでると其処に置いてある防弾性の物置の中に避難。この嵐が止むのをジッと待つことにしたのだった。それから２０分後――

「ハァ、ハァ……しぶとい……泥棒……ネコ……」

「あ、あんたこそ……」

静かになったので戻ってみると部屋は嵐が過ぎ去ったかのように悲惨な事になっていた。家具の殆どは穴だらけか真っ二つにされており、皿やコップといった小物は床中に散乱している。そして部屋の中央ではアリアと白雪の二人が息を切らして背中合わせに座り込んでいる

「えっと、そろそろ落ち着いて話をだな――」

「キンちゃんっ！！！」

二人の暴走がとりあえず落ち着いた所で何とか話し合いに持っていこうとキンジが口を開いた瞬間、白雪が突然立ち上がり、キンジの首を掴んで揺さぶる

「ごめんね！　ごめんねっ！！　私に勇気がないばっかりにキンちゃんは外、と言うより内に女を……」

「これ以上、勇敢になられても困るわよっ！」

と、白雪の後ろから彼女がいきなりどけた所為で床に頭をぶつけたのか、後頭部をさすりながらアリアが声を上げた。そしてようやく白雪がキンジから手を離し

「キンちゃんと恋仲になったからって、つけあがるなぁ！！」

「こ、恋仲っ！？　ば、バカ言わないでっ！　あたしは恋愛なんて興味ない！　した事もないしするつもりもないっ！」

キンジの首から手を離し、白雪は巫女服の袖の中から今度は鎖鎌

を取り出し、分銅の着いた方をアリアに向かって投げると、アリアは刀を取り出し、それに鎖を巻きつけると顔を赤くして反論する

「じゃあキンちゃんは恋人じゃないの！？」

「違うわよっ！」

「じゃあ何っ！？」

「そ、それは……そう！　ドレイ、ドレイよっ！」

思いついたようにアリアは答えたが、今、この状況に置いてこの返答は逆効果である。キンジも少し離れた所であちゃーと額に手を添えている

「ど、ドレイ！？　そんな、いけない遊びまで……そりゃ、私もその逆なら考えた事はあるけど。でもっ！」

「違う違う違うっ！　キンジィーーーっ！！」

「気安く――」

「白雪」

アリアに任せていては事態はどんどんややこしくなる。キンジは白雪の言葉を遮り

「俺とアリアは武偵同士、一時的に組んでるだけだ」

「そ、そうなの？」

「俺の言う事、信じられないか？」

キンジは真剣な表情で白雪を見詰めながら問いかける。白雪がなぜ時よりこういう風に暴走するかは知らないがこうすれば、大体はこちらの話を信じてくれるのも知っている。つまりはそれだけ頻繁に暴走していると言う事を表しているのだが……。案の定、白雪はキンジの視線に顔を赤くし、鎖鎌を下げる

「信じます。キンちゃんの事信じてます」

とりあえず、白雪の暴走は完全に静まり、キンジとアリアは二人してため息を漏らす。が――

「それじゃあ、キンちゃんとアリアはそういう事はしていないのね」

「そういうこと？」

「そ、その……き、キス、とか」

白雪のこの問いで事態は再び、ややこしくなる。そう、キスをしたかと問われれば答えはイエス。そうした感情は含んでいなかったとは言え、二人がキスをしたのは事実だ。そして女経験の少ないキンジと恋愛なんてどうでもいいと豪語しているアリア、二人ともこの手の話題に対する耐性が無い為、二人とも顔を赤くし、キンジは黙り込み、アリアは何かを言おうとしているが言葉詰まって出てこない。が、二人のこの反応が白雪を再燃焼させるには十分で

「し、た、のね……」

フフフフ……と暗い笑い声を共に巫女装束の袖から今度は鎖に繋がれたトゲ付き鉄球が姿を見せる

「ち、違うんだ白雪あれはな――」

「た、確かにそういう事はしたけど……」

再び、バーサークしかけてる白雪をなだめようとキンジが口を開くが、同時にアリアが上ずった声で弁明し始め

「で、でも大丈夫だったのよっ！　子供は出来ていなかったからっ！！」

無音。アリアの素っ頓狂なこの一言にキンジも白雪も停止している。キンジは「あれ、こいつ何言ってるんだ？」的に白けた目でアリアを見詰め、白雪は今のアリアの一言の意味を理解するのに時間が掛かった。やがて妄想癖のある白雪の脳内では『キンちゃんとアリアがキスした、けれど子供は出来てなかった』が『キンちゃんとキスして更にその先もやった。けれど子供は出来ていなかった』と言う結論に置き換わり

「ハフゥ……」

「はぁっ！？」

白雪は余りのショックに気絶し、キンジもようやく再起動して声を上げる

「だって、お父様が言ってたんだもの！　キスしたら子供が出来るって！」

「出来るかっ！！」

とりあえず、白雪が気絶した事で事態は沈静化を迎えたが同時にキンジは疑問に思う。世界クラスの頭脳を持つ筈のホームズ家、あんたらは一体子供にどんな教育をしているんだ、と

## １ｓｔ　ｂｕｌｌｅｔ－『武装巫女、荒ぶる！』（後書き）

トキヤ？彼はこの章じゃほぼ脇役です。しかも触れてはいませんが
この話で地味にひどい目に遭っています。正解は次話にて

## 2nd bullet ー『アリア式、遠山キンジ戦闘訓練』

あれから10分ぐらいしてから白雪は復活したがアリアとの再戦は無く、そのまま無言のままフラフラと出て行き、アリアと二人で部屋を片付け、とりあえず寝る事が出来るようになったのは夜の1時ごろだった

「ふわぁ〜、ねむ……って、あれ？」

若干、寝不足気味のキンジが欠伸をしながら歩いていると女子更衣室から白雪が出てきた

「よ、よう……白雪、昨日は――って、白雪の奴、昨日の事まだ怒ってるのか？」

そして彼女がキンジの姿を見つけると何時もの様にこちらに近づいて……は来ず、険しい表情のままキンジを睨んでいる。少し気まずい感じもしていたがとりあえず挨拶ぐらいはしようとキンジが口を開くも白雪は最後まで聞かずに足早に去っていってしまった。まぁ、昨日の今日で白雪の機嫌がすぐに戻るとは思えないのでしばらく時間を置くかと、キンジは然程気に留めず自分の教室に向かった。そしてキンジが教室に入ると

「えっと・・・イメチェンでもしたのか？　トキヤ」

そこには今までのミドルヘアーから一変、超ショートヘアーになっていたトキヤが、手に顎を乗せてめっちゃ不機嫌そうに座っていた

「キンジ、昨日あんたの部屋で白雪が大暴れしなかったか？」

「あ、ああ。良く判ったな。やっぱ、うるさかったか？」

「うるさいだけで済めばどんなに良かった事か……」

事は昨日の夜まで遡る。キンジの部屋で散々暴れまわった白雪とアリア。無論、一番の被害者は部屋をめちゃくちゃにされたキンジなのだが、その煽りは実はお隣さんのトキヤにも及んでいた。昨日の夜、トキヤはソファに座ってマッタリとしてた。やがて、隣のキンジの部屋が妙に騒がしくなり更には銃声まで聞こえ始めた

「武装巫女荒ぶる、ってか」

キンジが部屋の中でむやみやたらに発砲するはずが無い。ならば発砲しているのはアリアで間違いないだろう。そしてその少し前に聞こえたドアを叩く音と白雪の切羽詰った声。これらの情報から白雪が遂にキンジの部屋にいるアリアを見つけ、後は何時もの様に白雪がバーサークしてアリアに襲い掛かった。そして性格上、アリアも素直にはやられず即反撃に移った。恐らくこんな所だろうなとくだらない推理してそう呟いた直後、彼の後ろの壁からいきなり刀が生えた。そう、白雪がアリアに襲い掛かった際に壁に刺さった刀が壁を貫通しトキヤの頭上スレスレを通過、彼の髪の毛の一部をごっそり刈り取り、そしてそれを切りそろえてもらった結果が今の彼の髪型だ。尤も、後数センチずれていたら髪を刈られたどころか、武偵

校の殉職名簿に名前が載る所だった。死因が『親友の男女問題の煽り』と言う至極情けない理由で

「あ～、その、なんだ……スマン」

はっきし言ってなんて言葉をかければいいか判らない。が、とりあえずキンジは謝る事にした。なんだで白雪とアリアのしでかした事で自分があやまらんといけないのか。少しだけ理不尽を感じながら

「今朝のＨＲは来週に迫ったアドシアードについてです」

「なぁ、キンジ。お前、アドシアードでないよな？」

「出るわけ無いだろう。Ｅランク武偵なんてお呼びじゃないだろ」

そしてはじまった今朝のＨＲ。普段は何てことも無い連絡事項を話して終わりなだけだがこの時期は違う。アドシアード、これは言わばオリンピックの武偵バージョン。武偵校の生徒がそれぞれの種目において技と技を競い合うモノだ。これだけを言えばタダの過激な運動会でしかないが、このアドシアードには武偵局のお偉いさん

や民間で運営されてる武偵企業などの来賓も観戦に来る。つまり、アドシアードはそうした組織に自身をアピールする為の機会であり、メダルを獲得しようものなら武偵としての人生の花形コースが有望される訳だ。先生がアドシアードの日程について説明している中、武藤が小声でキンジに声を掛けた。無論、キンジはアドシアードなんかに出るつもりは無い。そもそも今はアリアのパートナーであるが故に続けているが、武偵自体をやめると言う意思は変わってないのだ。

「だよな。なら俺と一緒に受付やろうぜ。不知火がダメになっちまってさ」

「急遽、ガンシューティングの競技に出なくちゃいけなくなったからね。神崎さんが辞退しちゃったから」

「ふーん。アリアは何も出ないのか？」

アリア程の腕ならアドシアードで好成績を残す事ぐらい簡単だろう。最も、既にフランスの武偵局で働いている彼女には関係の無い事なのかもしれない。キンジが何気なくアリアの方を向いて尋ねると

「こ、こういう事だったのね……」

其処には顔を真っ赤にして手をワナワナと震わせながら何かの本を読んでいるアリアの姿。そして本のタイトルは『図解、子供の作り方』早い話が子供の作り方を雌しべ雄しべのレベルから説明する本だ

「お前っ！　朝っぱらからなんていう本を……」

と、キンジが言いかけた所でアリアは本を閉じ、顔を赤くしたままキンジをキッと睨みつけると、本を振り上げ

「このド変態がぁーーーーーっ！！」

そのまま背表紙が当るように振り下ろしてキンジは昨日の見よう見まねで白羽取りを試みるも訓練もされておらずましてやノーマル状態のキンジにぶっつけで出来る筈も無く、結果はクリーンヒット。キンジはそのまま椅子ごと後ろに倒れ、アリアの一本勝ちである

「これぐらい避けなさいよエロ武偵！」

「いや……無理だって……」

「あっ、これ使えるかも」

と、いきなりアリアは何かを思いつき、顎に手をあて考え始める。そして、椅子から転げ落ちたままのキンジはそんな彼女の様子に「絶対、ロクな事じゃない」と確信しているのだった

「あたし、あの後調べたの。二重人格って奴をね」

そして、嫌な予感は見事的中した。キンジが朝早くにアリアに呼び出された場所は人口浮島の外れに位置する空き地。人っ気の無い

この場所でキンジを調教、もとい訓練するつもりらしい。アリアの目的は勿論、キンジが自由にスーパーモード（ヒステリアモード）状態になれる様にする事。そしてアリアが調べた結果が二重人格と言う結論

「本とかネットで勉強したの。あんたは多分、幼少期のトラウマによる別人格があって戦闘時のストレスによってそっちに切り替わるのよ」

まぁ、確かにアリアの前でヒステリアモードになった時はどちらも戦闘中でもあった。だからアリアがそう勘違いしてもおかしくない。そして、キンジもその勘違いを正すつもりは無い。理由は言わずとも、だ

「だから、あんたを戦闘のストレスにさらしまくるのが、訓練の第一段階。同時に覚醒後にすぐに反撃に移る。と言う流れを作る為の訓練を思いついたの」

そう言ってアリアは刀、ではなく木刀を取り出すとそのままキンジに向かって振り下ろした。無論、ただのキンジにそれを避けられる訳も無い。けれど、アリアも当てるつもりは無かった。木刀はキンジの目と鼻の先で止まり、そのまま木刀を下げると

「つまり、あんたがまず覚えるべきはカウンター技」

「カウンター技？」

「そう、真剣白刃取りよ」

そう言ってアリアはさっきと同じ様に木刀を振り下ろし、それを

寸止めして木刀を仕舞う

「はい。まずは今のタイミングを５００回頭でイメージして、制限時間は１０分。今の動きを元に手に刀を挟み込むイメージを作るの。勿論、実際に手を動かしても構わないわ」

「要するにただのイメトレか」

「なんなら、今からタンコブ量産する？　あたしはそっちでも構わないわよ」

と、言って嬉々して再び木刀を取り出したのでキンジはやんわりと断ると素直にイメトレを始めるのだった

## ３ｒｄ　ｂｕｌｌｅｔ－『緊急ミッション、星伽白雪を護衛せよ！』（前書き）

まずはこの話の更新がめちゃくちゃ遅くなった事を深くお詫びします。

と言うのも今現在資格の通信教育を受けておりまして、その課題が送られてきた時はどうしてもそちらに着手しないといけない為時間が取れません。今後は課題が終わり、次の課題が送られてくるまでの間で執筆を行うので今後は遅筆＋不定期更新になります。が、更新そのものを止める予定はございませんのでこれからも読んでいただければ幸いです

## 3rd bullet ―『緊急ミッション、星伽白雪を護衛せよ！』

自分はなんで此処にいるんだろうか。それは別に哲学的な話では無い、場所的な意味でだ

「おいっ！　人の部屋で勝手に何やってんだ！？」

ふとキンジの怒鳴り声がしたのでそちらに目を向ければそこにはキンジとアリアの姿。アリアはキンジの部屋の至る所に購買で買ってきた赤外線探知機を仕掛けている

「見れば分るでしょ？この部屋を要塞化しているのよ。探知機をたくさん仕掛けて依頼人（クライアント）に近づく敵を見つけられる様にしているのよ」

「するなよ！」

と、ギャーギャーと言い争い始める二人。そしてその向うでは

「えーっと、にんじんとジャガイモと豚肉、っと。それにしてもキンちゃんのお部屋で直接ご飯を作ってあげるなんて……私とキンちゃんってまるで、まるで……新婚さんみたい」

等と訳の分らない妄想に浸りながら勝手に部屋の冷蔵庫を漁り料理を作り始める白雪。ホント、どうして僕はこんな所にいるんだろうか？　いや、原因は判っている……

事の起りはキンジが真剣白羽取りのアリアがアドシアードのチアの練習をしている時の事。校内放送の呼び出し音の後に

『ＳＳＲの星伽白雪さん、放課後教務科の方に起こし下さい。繰り返します――」

「あいつが呼び出し？珍しい事もあるもんだな

白雪は偏差値７５に園芸、手芸、バレー部で部長を務め、生活態度も良いとキンジ絡みの事を除けば非常に優秀な生徒である。その白雪が呼び出しを喰らった。その事にキンジが思わず口を開くとアリアが「キンジ」と短く彼の事を呼び

「これはあの凶暴女を遠ざけるいいチャンスだわ。この件を調査してあいつの弱みを握るわよ！」

「遠ざけるって、あれから白雪は来てないじゃないか」

そう、あの日の一件以来、白雪は一度もキンジの部屋に来ていない。白雪の事だから執拗にアリアに襲い掛かってくるに違いないと、キンジは腹を括っていたのだが

「来てるじゃない！」

「え？」

「最近、あたし一人の時にあちこちでドアの前に気配がしたり物影から見られている感覚がしたり、電話が盗聴されてる様に断線したり――」

他にも廊下から突然、水が降って来た。吹き矢が飛んできた。下駄箱の中に『泥棒ネコ！』と書かれた紙が入っていたと、アリアは自身に起きた災難をスラスラと話しておりキンジは陰険な手だなと苦笑いだった

「それだけならまだいいわ」

が、ここでいかにも怒ってます！という表情から一転、真顔になったかと思うと

「こないだなんか女子更衣室のロッカーを開けたら中にピアノ線が仕掛けてあったのよ！　あたしが、その、身体的な理由でロッカーに入らないと服が取れないのを判っていて首の位置に仕掛けてあったんだから」

流石のキンジもそれは笑えなかった。優秀な武偵であるアリアだからこそ回避できたがもし出来なかったら首が切り落とされ、大惨事である

「だからキンジ、これから――」

キンジはこの後アリアが何を言いたいか予想できた、と言うか出来てしまった。まぁ、出来ても出来なくても自分には拒否権なんて無いんだろうと半ば諦めの境地に達すると同時に

「教務科に潜入するわよ！」

見事に予想通りのそれでいて今まで最も凶悪な指示を出してきたのだった

場所は移って教務科の尋問科(ダキュラ)の綴(つづり)先生の個室。そこには白雪を呼び出した綴先生本人と俯いている白雪の姿。綴は白雪に小テストの答案用紙を何枚か見せた。しかし、どれも成績は余り芳しくない。そしてタバコを一本取り出し、火を点けてから口を開いた

「星伽ぃ、お前最近急ぅーに成績が下がってるよなー」

目は据わりそしてものすごく気だるそうな口調で話し始め、白雪は俯いたまま何も言わない

「まぁ、勉強はどぉーでもいぃーんだけどさぁー。あんたの変化は気になるんだよねぇ」

教師が生徒の成績なんてどうでもいいなんて思ってはいても口にしちゃいけない。が、綴は躊躇い無くそれを口にするとタバコを灰皿に押し付け火を消して

「単刀直入に聞くけどさぁー。星伽、ひょっとして“アイツ”にコンタクトされた？」

「魔剣(デュランダル)、ですか？」

魔剣(デュランダル)、それは優秀な超偵を狙いさらって行く誘拐魔。しかし、誰

もその存在を見た事がある人間がいない事から存在そのものがデマと言われている

「それはありません。と言いますか……仮に実在していたとしても私なんて――」

そこで綴は大きなため息を吐くと

「星伽ぃ、もうちょっと自信持ちなってぇー。あんたは東京武偵校の秘蔵っ子なんだぞー？　何度も言うけどボディガード付けろってば。諜報科ではあんたが魔剣に狙われる可能性が高いってレポート出してんだしＳＳＲでも似たような予言がでてんだろ？」

「でも、私は……」

火の無い所に煙はたたず。たとえ魔剣の存在はデマだとしてもそうした噂が立つに値する何かが起きているのは事実。白雪もそれはわかっているのだが

「私は……その幼馴染の子の、身の回りのお世話をしたくて、その……誰かが何時も傍にいるのは」

「星伽、教務科はあんたが心配なんだよぉ。もうすぐアドシアードも始まって外部の人間もわんさか校内に入ってくる。せめてその間だけでも……」

「でも、魔剣なんてそもそも存在しない犯罪者で……」

「これは命令だぞー。先生大事な事だから二度言いました。三度目はこわいですよー？」

それでも渋る白雪に綴も業を煮やし始めたのか。元から据わってる目を更に据わらせてしゃべり方はそのままに更に口調を強めた。と、次の瞬間――

「そのボディガード。あたしがやるわっ！」

天井を通風口をパンチであけたアリアが二人の間に降り立った。そしてアリアの突然の宣言に驚いき思わず身を乗り出したキンジも後に続いて落ちてきた。が、やがて綴がアリアの首根っこをつかんで猫の様に持ち上げ、キンジとアリアの二人を交互に見た後

「なんだぁ。こないだのハイジャックのカップルじゃん。神崎・Ｈ・アリア、武器はガバメント二丁に小太刀の二刀流、ついたあだ名が『双剣双銃のアリア』」欧州で活躍したＳランク武偵。でも、あんたの手柄、全部ロンドン武偵局のものにしちゃったみたいだね。協調性がないんだ、マヌケェ」

「い、痛いわよっ！　それにあたしは間抜けじゃない！　貴族は決して自分の手柄を自慢しないの、たとえそれが他の人が自分のものだと吹聴をしても否定しないものなのっ！」

「へぇー、そんなご身分だねぇ。あたしは平民でよかったぁー。んで――」

そう言ってアリアを壁際の方にポイッっと投げると、今度はキンジに目をやって

「こちらは遠山キンジ君。性格は非社交的、他人から距離を置く傾向あり。しかし、強襲科には一目を置いている生徒も多く、潜在的

にはある種のカリスマ性があるとされる」

今までの綴の態度から先生としてどうなんだ？と言う言動が多いがそこは腐っても先生。どうやら頭の中には全生徒のデータが入っている様だ

「今までに解決した事件は青海のネコ探しとＡＮＡ６００便ハイジャック……ねぇ、あんたなんでこんなにやる事の大小が極端な訳？」

しかもそのデータは日々更新されているらしい。やがて、綴は席に座りなおし二本目のタバコに火を点けると

「でぇー？　どういう意味？　こいつのボディガードをやるってのは？」

「言ったとおりの意味よ。白雪のボディガード、２４時間体制であたしが無償で引き受けるわ」

「おいアリア！？」

アリアのこの言葉にキンジは口を挟まずにはいられなかった。そもそもアリアと白雪はいがみ合ってる筈なのに、一体どんな風の吹き回しなのか？　更にはアリアが引き受けると言う事はパートナーである自分も事実上引き受けなければならなくなるからだ。綴は仁王立ちをしているアリアをじっと見ていたがやがて白雪の方に向き直ると

「……星伽、なんか知らんけどよかったじゃないかぁ。Ｓランクの武偵が無償（ロハ）で護衛してくれるなんて」

「い、嫌ですっ！　アリアが何時も一緒だなんて……汚らわしいっ！！」

が、白雪の方はキンジにとって半ば予想通りの反応を見せる。そりゃそうだ、何が悲しくて態々自分が嫌っている（嫌う理由は判らんが）相手と２４時間一緒じゃなきゃいけないのか。キンジが内心、納得しているとアリアはいきなり白銀のガバメントを彼のこめかみにつきつけ

「護衛させてくれないとこいつを撃つわよ」

「き、キンちゃん！？」

「へぇー、あんたらそういう関係なんだぁー。で、どうすんのさ星伽は？」

その様子から綴は三人の関係に何かを感じニヤニヤしだすと白雪の方に話を振った。そして白雪もアリアを見つめ、表情を険しくしていたがやがて俯くと

「じょ、条件があります！」

目をキュッっと瞑りながら口を開き

「き、キンちゃんもわたしの護衛して！　２４時間体制でっ！」

そして、その表情に加え顔を赤くし顔を上げると

「私も、私もキンちゃんと一緒に暮らすぅっ！」

結局、アリアとキンジが白雪の護衛をするという事で話が纏まり（その時のキンジはまるでこの世の終わりを思わせる様な悲愴感を漂わせていたのは別の話）、アリアは更なる増援という事でパートタイムという事でレキにこの護衛の仕事の支援要請を送り、僕たちはそれを引き受けた。僕は人とは極力関らない様にしており、最初は断ろうとも思ったが

（魔剣……つまり、彼女が来るのか）

相手が誰なのか、それを知ったら無視する訳にはいかなかった。僕のせいで人が不幸になるのは嫌だが関らない事で誰かが不幸になるのも嫌だった。

『人は多かれ少なかれ関った以上、必ずそこには縁が生まれる。そして縁がある以上、そこに繋がりが生まれる。それが絆か、はたまた因縁かは判らないがね。人と関らずに生きていく、それはきっと不可能な事だと僕は思うよ』

「そうなのかもしれません。離れたと思ったけれど……つくづく、僕は貴方達と縁があるみたいですね……『教授』」

そんな時、思い出されたのは――“あの場所”を去る際に言われ

た“彼”の言葉。その言葉が嘘ではなかった事を悟り、レンはいつの間にか一触触発の雰囲気でにらみ合うアリアと白雪の二人とそんな二人の間に板ばさみにされ冷や汗を流しているキンジを眺めながら小さく、そう呟いた

## 4th bullet ー『矛盾する心』

この間はなんで此処に居るんだろうと思った。そして今は

「僕はなんでこんな事をしているんだろう……」

確か、アリアとキンジが受けた白雪の護衛任務の支援要請を受けて彼女たちと行動を共にしている、筈だったのに今僕がしているのはりんごの皮むき。それも高熱を出して寝込んでいるキンジの目の前で……

「ゴホッゴホッ、ったくアリアの奴……」

なんでキンジがこんな事態になっているかと言うと事の起こりは昨日の晩。キンジが自室で風呂に入っている時、何故かキンジから電話が掛かってきたと白雪が浴室の中に入ってきた。そしてすったもんだなトラブルの最中にアリアが帰宅。こういう手のトラブルが起きた時と言うのは男は大抵何を言っても信じてもらえないケースが多い、特にアリアみたいな感情的な人間なら尚更の事。結局、あの後キンジは冷たい東京湾に沈められ今現在風邪でノックダウン、仕方無しに今日の護衛はアリアが勤めると言う事でアリアと白雪は登校そして自分はキンジの看病を任された。とりあえず切り分けたりんごを皿に乗せてキンジに渡して――

「そういえば、さっき買い物から戻ってきたらドアノブにこれが掛けてありましたよ」

そう言ってりんごや飲み物の買出しから戻ってきた時、ドアノブに掛けてあった袋の中身を渡す

「これは『特濃葛根湯』じゃないか。もしかして白雪、か？」

それは漢方薬の成分を凝縮して作られる薬の一種だ。この辺りならアメ横辺りに行かない限り手に入らない品物

「でも、なんで態々？　別に市販の風邪薬でも」

「俺って薬が効きにくい体質なんだよ。だから風邪や頭痛の時はこれって決めてるんだ」

それはまた難儀な体質ですね。と軽く言葉を返すとレンは残っていた最後のりんごを摘み一口齧ると思考の海に入る

（噂では聞いてたけどキンジは極度の女嫌いと言われていた。そんなキンジが自ら白雪を、しかも浴場に呼ぶ様な事なんてするのかな？）

キンジはヒステリアモードを嫌う事をから女性との接触を避けている。だと言うのにキンジ絡みの事だと暴走する事多数の彼女を態々風呂場に呼ぶ様な事をするのだろうか？　いや、余程の事がない限りは絶対にやらない。そして、キンジと白雪は幼馴染な訳だからキンジが白雪の暴走と妄想癖を知らない訳もない

（これはもしかして……間違いない。既に彼女は動き始めている）

となると、早急にこちらも手を打たなければ手遅れになる。それでなくてもキンジはそもそも魔剣の存在を信じていない

（これは彼女にとっては付け入るべき隙……だったらそれを逆手に

とって）

「なぁ」

（でも彼女が相手ならそれだけじゃ不十分、それでなくてもこちらは既に後手に回っている）

「おい……」

（となると、更に裏をかく為に隠し玉が必要かな。誰も知らないとびっきりの隠し玉を）

「なぁおい、レン！」

思考の海に浸りすぎたのかそこでようやくキンジが自分を呼んでいるのに気づき

「っと、スイマセン。ちょっとボーっとしちゃって」

「ボーっと、って。ものすごい険しい顔してたぞあんた」

「あ、あはは……ちょっと考え事を……それでなんですかキンジさん」

と、その場はごまかす様に笑った。作戦自体は固まった後は隠し玉の確保、そしてタイミング。兎に角、この一手を打つのは今じゃない

「まぁ、いいけどよ。レンにちょっと聞きたい事があってな」

「聞きたい事、ですか？」

「レキの事だよ。俺もアイツとは何度か組んだ事はあるけど、レキってものすごい無反応だろ？　ロボットレキって言われてるぐらいだし。よく長い間パートナーやってられるなって」

まぁ確かに、普通の人間なら彼女と長い間組む事は出来ないだろう。腕はいいし、作戦や指示には素直に従うから武偵活動に支障は出ないが、それ以外の時はあの無言の空間は気まずい事この上ないだろう

「僕も、余り人と深く関るのは好きじゃない方なんで。僕にとっては必要最低限のコミュニケーションで済むレキの方が気が楽なんです」

これは嘘だ。自分は人と関る事が嫌いじゃない、怖いだけだ、関る事で誰かが不幸になるのが……。幸い、キンジは深くは追求してこないで「ふーん」と言いながら特濃葛根湯を飲んで

「まぁ、その割にはレンって人の世話とか良く焼く方だな。今だって俺の看病してるし、この間もトキヤのとこにレキの為に食べ物貰いにきてたし」

「そう、なんですよね。この矛盾した性格。ちょっとした悩みの一種、なんです」

ホント、深く関らないと決めているのに気がついたらこうして関りを持ってしまっている

（人と関らず生きていくのは不可能、か……）

どうするべきか、その答えは出てこない。ならばそれは後で考えよう

（ともかく今は彼女から白雪を護衛する事。それだけを考えよう）

自分自身の事を頭の隅に追いやった段階で部屋の呼び出しベルがなった。恐らくトキヤに頼んだお粥が出来上がったのだろう。それを受け取るべくレンはキンジの部屋を後にした

## 5th bullet ー『打たれし一手』

「今のところ、白雪（クライアント）さんの周りには不審な人影は見当たりません。本人の様子も、昨日同様何時もどおりです」

「判った。報告ありがとう悪いけど引き続き頼むよ」

「はい」

レキからの定期報告を聞き終えるとレンは屋上へと向かう。さっきまでアドシアードの練習や準備をしていたのだがそれも終わり、自由時間。キンジは白雪のところへ向かわずそのまま屋上に向かっていたのが見えたので自分も向かっていた。キンジは魔剣は居ないと思っている、流石にその部分は修正しておかないと後に響くからだ。そう思い屋上のドアを開けると

「お前が一刻も早くかなえさんを助けたいのは分ってる！　けどな、その為にお前は今、平常心を失ってるんだよ！　敵の一員かもしれない魔剣の名前を聞いた時、お前はその敵を“いてほしい”って思っちまったんだ。それをいつの間にか自己暗示ってヤツで“いる”って錯覚しちまってるんだよ！」

「違うっ！　魔剣は居る！　あたしのカンではもう近くまで迫っているわ！」

ついさっき自分が懸念した通り、魔剣の存在の有無でキンジとアリアが絶賛大喧嘩中。

（放っておいたら何時かこうなるとは思ってたけど意外に早かった

な)

レンは呆れながら頭を抱えつつも二人に近づいていき

「あたしには分るのよ！　白雪に、敵が迫っている事が！　でも、でもあたしはそれをうまく説明できない！　偉大な曾お爺さまみたいに、誰にでも分る様に状況を理論的に説明できない。　だからみんなあたしを信じてくれなくて、あたしは独唱曲で……でも、直感で分かるのよ！　こんなに言っているのにどうしてあんたは信じてくれないのよ！」

アリアは完全に涙目になって子供の様にチアに使うポンポンをキンジに投げつける。そしてキンジが険しい表情のまま口を開こうとした所で

「はい、ストップ。二人とも落ち着いて下さい」

二人の間に割って入った。とにかくこの喧嘩は“本気”でされるとまずい。隠し玉の確保はまだだけど、ここで勝つ為の布石を一手、打たせてもらおう。二人が気づくのを祈って

「レン……」

「全く、白雪さんの護衛もしないで何こんなところで言い争っているんですか？」

「別に関係ねぇだろ」

キンジは不機嫌に視線を逸らす

「そう言うあんたこそ、なんでこんな所に来たのよ？」

「えっと、僕は少し風に辺りに……」

「風にって白雪に敵が迫っているのにこんな所で悠長に「それなんですけど」えっ？」

アリアの言葉に割って入ると

「さっきも言ってましたけどホントに白雪さんに魔剣が迫っているんですか？」

「な、何よ！？　あんたも疑ってると言うの！？」

こちらの言葉にアリアは歯をむき出しにして怒りだす

「ここ数日、白雪さんの護衛をしてましたけど“彼女”はおろか、不審な人物すら見かけていません。さっきレキから定期報告を受けましたけど至って何時も通りだそうでしたよ。こんな状況で敵が迫っていると言われましても」

と、そこで我が意を得たりと言う様にキンジが口を開き

「分かったかアリア？　レンだってこう言ってるんだ。魔剣なんて女、居る訳……」

そして、先の自分の言葉に不自然な点を感じ、言葉を止めた。流石にEランクと言えど探偵科、いや、遠山の血筋って奴か、これぐらいは気づいてくれた。アリアの方も同じなのか、さっきまでの怒り心頭な状態から真剣な雰囲気になっている

「仮に魔剣が実在していたとしても、部屋を要塞化して遠近の両方から彼女を監視、護衛しているこの万全な状態。魔剣でなくても誘拐犯ならまず狙うなんて考えられません。僕が誘拐犯なら諦めて他の相手を狙いますよ。尤も、その防衛網を崩すだけの策士であるなら話しは別ですが……」

二人は何も言わずにこちらの話に耳を傾けている。どうやらこちらの意図は完全に理解してくれたようだ。とりあえずその事にホッとして言葉を続ける

「ここ数日に起った出来事と言えば女嫌いで有名な筈のキンジさんが白雪を風呂場に連れ込んだ事ぐらいで――」

「だから、あれは誤解だって言ってるだろ！？　白雪の奴がいきなり俺から風呂場に来てくれ、なんて電話があったなんて訳の判らない事を」

「キンジさん、言い訳もそれ位にしないと見苦しいですよ。二人を風呂場で鉢合わせて誰が得をするというんですか？　仮にキンジさんを偽って二人を仲違いさせる目的だとしてもこのやり方じゃ、逆に二人が一線を越えた仲になる可能性の方が大きくて」

「だからなぁ！　あぁっ、もういいだろ！　その話は」

「まぁ、確かにどうでもいい事ね。この変態と白雪がどうなろうがあたしの知った事ではないわ」

等といいながらもその時の光景を想像したのか、そっぽを向きつつも顔は赤い。キンジも何かを言おうとしたが結局、黙り込む

「とにかく、これだけ厳重に警護しているんです。それこそ連環の計を逆手に取った反間計を考えるぐらいの頭が無いと白雪さんを狙う事なんて出来ませんよ」

と、言うべき事を伝えると自分はその場を後にする。やがて、キンジとアリアが二、三言、何かを言い合って、その直後に

「キンジのバカ！　バカの金メダル！　ノーベルどバカ賞！！」

アリアの怒号と一緒に響く無数の銃声。そして、自分を追い越し屋上を後にするアリアの姿。後ろを振り返ってみるとそこにはしりもちを付きながら頭を掻いているキンジの姿と、屋上の貯水タンクに『バカキンジ』と見える様に無数の穴が開いていた。そして屋上のドアを通り抜けるとそこにはアリアが腕を組んで立っていた

「あれでよかったの？」

「ええ、上出来です。後はあちらがアクションを起こすまで待つだけ、です」

「そう、ならあたしはしばらくレキの所に居るわ。動きがあったらレキの方に連絡を頂戴」

「判りました。では、また」

そう言ってアリアの傍を通り過ぎ階段を下りて行く。後は隠し玉の確保だけ。それでこちらの準備は整う

（こちらの布陣は整った。さぁ、何時食いついてくる？　……ジャ

ンヌ）

## 6th bullet―『アドシアード開催！　動き出す銀氷』

アリアとレンが白雪のボディガードから離脱してしばらく、連休も終わり遂にアドシアードの開催を迎えた。結局、あれから目立った動きは無く以前の俺なら警戒のけの字も無かっただろう。けれど――

（嵐の前の静けさ……って奴かもな）

あの日、屋上で聞いたレンの話。直感だと言い張るアリアと違い、暗号（サイファー）の中に混ざっていた理論的な説明、流石に１００％信じられると言う訳では無いが言ってる事は理に適っていた。その話が本当ならレンは魔剣を知っている、いや、最悪会った事ある事を示し、それは魔剣は実在する事を示しているのだ。アドシアードを見に来たカメラマンや記者の持ってるチケットを確認しながらもそんな事を考えていた。そしてアドシアードが本格的に開催し来客も居なくなってきた頃、武藤も自分のシフトを終えて居なくなり、流石にただボーっと突っ立っているだけなのは退屈で仕方なかったがアドシアードが終わるまでは一応、警戒はしてようと必死に眠気と戦っていた。そして４時を回った頃。突然マナーモードの携帯が震えた。メールの着信、差出人は白雪、そして内容は

『キンちゃん、ごめんね。さようなら』

この文面を見た瞬間、嫌な予感がした、白雪は責任感の強い子だ、例え何があっても自分の責務は果たす。だから今日のアドシアード実行委員の仕事だってきちんと最後まで果たす筈だ。だから、この文面にある“さようなら”の部分は明らかに可笑しい。キンジはすぐにその場を離れ、白雪の居る大会本部に向かった。そしてその途

中、更にメールが届く。今度は武偵校の周知メール、内容はケースD7。

ケースDとはアドシアード中、武偵校内での事件が発生した事を示す。そして、D7とは事件か事故かは不明、故に連絡は一部の関係者のみに行く。更に保護対象者の安全確保の為、みだりに騒ぎ立てる事も出来ないので関係者のみで秘密裏に解決せよ、と言う内容だ。そしてその保護対象者は、他でも無い、星伽白雪。すぐさま、アリアの所に電話をかけると2回のコール音の後にすぐに相手が出る

『キンジ！』

「アリア！　白雪は！？」

『判らない……私も今探している所なの。レンの方は既に捜索を始めている。レキは、競技中みたいで連絡は着かなかったわ。キンジはそのまま付近を捜索して頂戴！』

「判った！　しかし、まさか本当に居たなんてな……」

『あっきれた。レンがあんだけ理論的に説明してくれたのにまだ信じていなかったの？』

「１００％信じてなかった訳じゃないさ。レンの説明は理論的だった。だから一応、警戒しては居た」

『……そう、ね』

そこでアリアの口調が少し暗くなる。一体何故なのかは判らないが気にしているヒマは無い

『でなきゃ、バカキンジの方から白雪の事で連絡してくるはず無いものね。話はここまでよ、何かわかったらすぐに連絡、いい！？』

それに次の瞬間には何時ものアリアに戻っていたし、俺も気にするのはやめた

「判ってる！」

そして電話を切るとすぐさま走り始める

（レンの仲裁が無かったら大惨事だったかもな……）

今だからこそ判る、間違っていたのは他でも無い俺の方だった。敵なんて“居ない方がいい”、それはごく当たり前の思考だが俺の場合はソレが“居ない”に変わっていたのかも知れない。そして、レンの仲裁が無ければ俺は今も魔剣なんて居ない、敵なんて来ないと楽観視し、誰も来ない受付で暢気に居眠りなんかしていたかも知れない。携帯もマナーモードだったし、それでメールに気づかず動き出すのが遅くなってしまっていたら……そう考えるとゾッとする。自分の迂闊さに苛立ちを感じながらも、通路をひたすらに走る。捜索を始めてから２０分後。白雪はおろか、未だ手がかりすら見つからない。流石に走りっぱなしで疲れがたたり膝に手をつき、息を整えていると携帯の着信音が鳴る。着信の相手は、レキだ

『キンジさん、レキです。今、あなたの姿が見えます。Ｄ７だそうですね、狙撃競技のインターバルに携帯を確認しました』

その後、レキが何かをしゃべったが『何をしているんだレキ！？』とか『世界記録目前だったのに』とがなり声が聞こえよく聞き取れ

なかった

『雑音（ノイズ）、すいません。競技中にレーンから離れたのでわたしは失格になりました。その事で皆さんが怒っている様でして。クライアントの事とは関係ないので気にしないで下さい』

その間にもがなり声は続いており、さっきのレキの言葉も辛うじて聞き取れた程度だ。だが、次の瞬間「電話中です。静かにしてください」と言うレキの声を共に銃撃音が聞こえ、がなり声が止む。どうやら威嚇射撃で黙らせたらしい

「あ、ああ」

「本題に戻ります。クライアントの姿は見当たりませんが、海水の流れに違和感を感じます。第9排水溝辺り」

「ど、どっちだ？」

と、場所を確かめるべく、武偵手帳を取り出そうとした瞬間

「私は、一発の銃弾……」

レンが狙撃を行う時のお決まりの台詞が聞こえると共に、突然近くの床のコンクリートの一部が砕けた。それが2箇所、3箇所とどんどん増えていき、収まる頃には床には点描によって描かれた矢印

「その方角です。調べてください、アリアとレンさんも既に向かっています」

「判った！」

「第9排水溝……って事は地下倉庫(ジャンクション)ね」

「とても厄介な場所ですね。僕の電気はおろか、拳銃も使うことが出来ない……」

アリアとレンもレキから連絡を受け、地下倉庫に向かっていた。地下倉庫と言えば普通に地下にある倉庫と思うだろうが、武偵校の地下倉庫はただの倉庫じゃない、いわば火薬庫だ。それも大量の火薬が保管されている。もし拳銃の発砲や電気によって爆発しようものなら誘爆の連鎖で武偵校が冗談抜きで吹き飛ぶ。特に今はアドシアードで生徒だけでなくたくさんの来賓も来ている。何百と言う死傷者が出る大惨事は免れない。しかし、だからと言ってキンジだけに任せる訳にもいかない。二人はそのまま、武偵校の地下に潜る。地下2階の変圧室に入る

「非常用のはしごが開いている……キンジかしら?」

「でしょうね。緊急用のパスワードを打っても非常用エレベーターが起動しないあたり、その梯子で地下倉庫に向かったんでしょう」

「私たちも急ぎましょう!」

そしてキンジの後を追って地下三階、ボイラー室に到達すると“

それ”は居た

「な、何なのよこいつらっ！？」

そこに居たのは剣を持った人を象った氷像の大群、それがいま正に二人に氷の剣を向けていた

「氷兵……これは魔剣の超能力が生み出した兵士達です」

まだ、地下倉庫には到達していない為、アリアはガバメントを構え、レンも太刀を構える。右手で柄を握り、切っ先は前に、刃は上を向く様にその手を自分の頭の横に持って行き、そこに反対の手を添える

「なんで、そんなのがこんな所に居るのよ！　……まさか！？」

「ええ、読まれてたんでしょうね。こちらの作戦が」

そしてその言葉を肯定する様に氷兵達が二人に襲い掛かった

## 7th bullet―『決意の心、最高の切り札』

地下7階、地下倉庫と呼ばれる場所にキンジは到着した。電気が落とされ、赤い非常灯のみが点く廊下を足音を殺しながら進む。やがて、大倉庫と呼ばれる最も危険な火薬が積まれている場所に白雪は居た。宙を仰ぎ、姿の見えない誰かと話している。

「どうして、私なんかを欲しがるの魔剣？　大した能力も持たない……私なんかを」

「裏を掻こうとする者が居る。表が裏の裏である事を知らずにな」

それに対し、時代がかった男しゃべりだがそれは間違いなく女の声

「和議を結ぶと偽り、影で備える者が居る。だが闘争では更にその裏を掻く者が勝る。我が偉大なる始祖は陰の裏、すなわち光を纏い、陰を謀ったものだ」

「何の……話？」

自分の問いと相手の返答がどうしても繋がらない。白雪が更に問いかけると

「敵は陰で、超能力者を鍛錬し始めた。我々はその裏でより強力な超能力者を磨く。その大粒の原石、しかも欠陥品の武偵にしか守られていない原石に手が伸びるのは、自然な事よ。不思議がる事ではないのだ白雪」

「欠陥品の、武偵……？誰の事」

誰を指しているのか分かり、白雪の声に怒りが混ざり、相手の声には嘲りの色が混ざる

「ホームズ、そしてレンには少々手こずりそうだったが、あいつらを遠ざける役目を見事に果たしてくれたのが遠山キンジだ。彼を欠陥品と言わずしてなんとする？」

「キンちゃんは……キンちゃんは欠陥品なんかじゃない！」

「だが現に、こうしてお前を守れなかったではないか」

「それは、違う！　キンちゃんはあなたなんかに負けない！　迷惑を掛けたくなかったから、私が……呼ばなかっただけ」

「迷惑をかけたくない、か。だがな白雪、お前も私の策に一役買ったのだぞ」

「私……が？」

「電話を覚えているだろう？」

次の瞬間、相手の声が変わった。紛れも無いそれはキンジの声

「すぐ来てくれ白雪！　来い！　バスルームに居る！」

それは一時一句違わない、キンジが東京湾に沈められたあの夜。白雪の携帯に掛かってきたキンジの言葉だった

「キンちゃんのフリをして私を動かして、キンちゃん達を仲違いさ

せたの？」

「後は転がる石の様に、な。数日もしない内に二人はお前達から離れた」

白雪は驚愕に声を出せずに居るがキンジは違う

（レンの作戦通りだな、相手は既に護衛は俺だけと思ってる。より裏を掻く者が勝る、正にその通りだ）

こちらの思惑通りに進んでいる事にキンジは内心、笑みを浮かべていたが

「私に続け白雪！　私がお前を連れて行ってやるイ・ウーにな！」

次のこの一言で頭が真っ白になる。イ・ウー、それは武偵殺しこと理子が所属する組織で……

（兄さんを、殺した……っ！）

頭に血が上り、予め出していた緋色のバタフライ・ナイフを持つ手が震える

「それと、もう一つ。今回の事に一つだけ誤算があった、お前の性格を読み違えた事だ。お前は約束は守る奴だと思ってたんだがな」

（約束……？）

「『何も抵抗せず自分を差し出す。だから武偵校の生徒、そして誰よりも遠山キンジには手を出さないで欲しい』確かにお前はそう言

って、私は確かに聞いた――だが、その裏でお前は、奴を呼んでいる！」

最後の一言は明らかにこちらに向かって放たれているモノだ

「逃げろ！　白雪！」

キンジは物陰から飛び出し、走り出す。声の位置から敵の居る場所は大体判っていた。ならば一気に襲い掛かり、取り押さえればケリが着く。相手と肉薄するまで役7秒、この時間で相手の状態を把握、挑むか、逃げるかの判断はつかない。拳銃で迎撃する、と言うなら話は別だがここは火薬庫。銃器を使えないのはあいつも同じ。キンジはそう踏んでいた。けれど――

「キンちゃん！　来ちゃダメ！　逃げてっ！　武偵は超偵には勝てない！」

「うおっ！」

次の瞬間、キンジの足元に何かが突き刺さり、キンジは前のめりに倒れる。それはヤタガンと呼ばれるフランスで作られた小剣の一種で銃剣にも使われていたものだ。やがて、剣が突き刺さった場所を中心に周囲が氷付き、キンジはたちまち氷に縫い付けられる

「『ラ・ピュセルの枷』――罪人として枷を科される屈辱を知れ。武偵よ」

「キンちゃん！」

「大丈夫だ、白雪！　もう少しすれば直に――」

「ホームズとレンが此処に来る、か？」

「なっ！？」

「今回の誤算は白雪の性格だけだといっただろう。レンが屋上で私の作戦、戦略、こちらが取るべき策を暗号を使い説明し、お前達に仲違いをしたフリをさせて私をおびき出そうとした事など最初からお見通しだ。今頃、あの二人は私が用意した氷の兵士達と戯れている頃だ」

自分は動けないが、もうそろそろアリアたちが到着する頃だ。そう思っていたキンジだったが次の相手の言葉に表情も凍りつく

「我が一族は光を身に纏い、その実体は陰の裏、策士の裏を掻く策を得手とする。そんな我が一族の世界で最も嫌うもの、それは誤算でな」

その言葉の後、赤い非常灯すらも消えて完全な暗闇が訪れる

「い、いやっ！　やめて、何するの！――うっ」

そして次に聞こえたのは鎖の音と白雪の声

「白雪！」

キンジが思わず叫ぶも応える声は無い。代わりに聞こえたのは刃が空を切る音、それは新たに投擲された銃剣。それも今度は、キンジを直接狙ってたモノだ。それがキンジの頭部に刺さろうとした時――

「残念だけど、此処までだ！」

「じゃあ、バトンタッチね」

青白い閃光が飛び、それが飛んできた銃剣粉々にする。それに続き、消えていた電灯が全て灯り

「そこに居るわね、魔剣！　未成年略取未遂の容疑で逮捕するわ！」

キンジの前に立っていたのはアリアとレンの二人。そしてレンの左腕は電気の残滓が残りわずかに帯電していた。バスジャックの時に使った、レールガンの原理に基づくメダルショット、それを使い銃剣を粉砕したらしい

「ホームズ、それにレンか」

視界がハッキリするも白雪の姿は消えている。どうやら、火薬棚の裏側に引きずり込まれた様だ。その時、アリアとレンの二人に向かって更に銃剣が飛んでくるが、二人ともそれぞれの武器で払い落とし

「何本でも投げてくれれば？　こんなのバッティングセンターみたいなものよ」

アリアはそう言って刀を構えながら答えるも、それに対する返答は無く代わりにドアの鍵が閉まる音がした

「逃げたわね」

そう呟くと、アリアは構えを解いて白雪を救出すべく彼女の所へ向かい、レンはキンジの傍に刺さっている銃剣を抜き、氷に縫い付けられたキンジを床から剥し始めた

「二人ともどうして……？」

「彼女がこちらの策を読んでくるのは判ってましたからね。それに対抗する為に隠し玉を予め用意していたんですよ。彼女はおろかあなた達も知らない隠し玉を、ね」

「読まれるのを判ってて仕掛けたってのか！？」

策と言うものは読まれてしまえば意味は無い。逆に、今回の様にそれを逆手に取られる事もある

「僕の目的は別に彼女を嵌める事じゃなかったんです。あのまま陰でこそこそ策を講じられてはこちらが不利になっていくだけ、何とか表に引っ張り出す必要があった。だからあえて読まれるのを前提で策を仕掛けた。彼女の一族は策士の裏を掻く策を得意としている、それはつまり相手の策を読む事が出来れば、それを逆手に取りあえて仕掛けてくるのが一族のやり方、と言う訳ですから」

と、ようやくキンジが自由になった所でアリアが戻ってくる

「白雪は？」

「怪我はしていなかった。でも、縛られている。助けるのあんた達も手伝いなさい」

アリアは再び、白雪の所に戻ろうとした所で足を止めて

「それと、白雪の所に行く途中にピアノ線が仕掛けてあったわ。あたし達三人の首の高さにね。一応、全部斬ってきたけど、まだ何があるか分らないから注意しなさい」

そう言うと改めて歩き出し、キンジとレンもそれに続く。少ししない内に倉庫の壁際にドラム錠の鎖で縛られ、口を布で縛られた白雪を見つけた。キンジが駆け寄り、布を外す

「キンちゃん！　大丈夫、怪我しなかった？」

「俺は、大丈夫だ。お前こそ……」

そして、三人はそれぞれに解除（バンプ）キーを取り出しドラム錠の解除に入る

「キンちゃん……ごめんなさい、私、この服装で誰にも内緒で此処に来ないと、学園島を爆破するって……キンちゃんの事も、殺すって。アリアも、ごめんね……私アリアにあんなひどいことしたばっかりなのに私を助けに来てくれたんだよね？」

「あ、あたしは依頼を引き受けたからあんたを守ってるだけで、あたしの目的は魔剣を逮捕する事なの。だから、感謝なんてしなくてもいい」

「えっ！？」っと白雪の言葉に思わず手を止めたアリアが顔を赤くし、そっぽを向きながら言葉を返す。と、会話を続けながらも未だドラム錠の三つの鍵は一個も解除できない。アリアは鎖を直接、壊すべく繋ぎ目の弱いところは無いか調べ始めながら

「ところで、魔剣の姿は見た？」

「ううん……敵はずっと棚の裏に隠れていた。そこの扉から逃げた時も陰しか見てなくて」

その直後、どこかで爆発音が響き、床の排水溝から逆に水がものすごい勢いで流れこんでくる。

「……海水ね」

アリアがそう呟く頃には既に足首にまで水に浸っている。このままでは後１０分近くでここは水没する。三人が大急ぎでドラム錠の開錠を続けるも、未だに一個も開錠出来ない。そうこうしているうちに水は既に脛にまで浸っている

「アリア、レン、お前達は先に行っててくれ！」

「キンジさん！？」

「何言ってるのよキンジ！？　あんた達を見捨てて逃げる事なんて出来ない！」

キンジの指示に二人は猛反対。けれど、キンジは首を横に振り

「違う！　これは攻撃だ！　上に行って魔剣から鍵を奪い取ってきてくれ。ここでこうしていてもこの鍵は開けられないのはわかっているだろ！」

「で、でもキンジ……」

「戦闘力の高いお前達の方が敵を早くブチのめせる！　俺には超偵との戦闘経験が無い。これはお前達にしか出来ない仕事なんだ！……行け！　今は一秒でも時間が惜しい！」

普段のキンジとは違う、妙に気迫を感じる言葉。それもそうだ、今キンジは意識的に強襲科に居た時のノリで話している。アリアはキンジと白雪を交互に見ていたがやがて自分の解除キーをキンジに渡し背を向けた

「分ったわ！　でも、もしダメだと思ったら絶対にあたしを呼ぶのよ！？」

そう言って梯子を上り上へと向かう。それに続き、レンも解除キーをキンジに差し出し

「必ず、鍵を持って戻ってきます。ですから二人も諦めないで下さい！」

そしてレンもアリアに続き上に向かう。その後もキンジはドラム錠の開錠を試みていたがやはり開きそうな気配は無い

「キンちゃん……もう行って。私は、もういいの。キンちゃんを危険な目に合わせたくない」

その時、白雪が小さく、でもはっきりとそう言った

「バカ言うなっ！」

「星伽は守護り（まもり）の巫女。誰かの為に身を捧げ、投げ打つのが定め。キンちゃんはもう避難して、私の事はもういいから」

「お前を置いて行けるか！」

そして、遂に海水が口の近くまで来てキンジも立ち泳ぎをしないといけない状態になった

「私が死んでも、きっと、誰も悲しまない。私は先生やみんなにもてはやされてきたけどそれは星伽の超能力が持ち上げられていただけ。私を好きな人なんて、きっと、誰も居ない」

「アリア達が今に鍵を持ってくる。一秒でも長く持ちこたえろ！息を大きく吸うんだ。依頼人はボディガードの言う事に従うものだろ！？」

既に、自分の事を諦めている白雪に感情論は通じない。故にキンジはボディガードの仕事上の指示という形で何とか白雪に持ちこたえてもらおうとするが

「ボディガードの任は……解任します。キンちゃん逃げて……」

そして――

「逃げ……て」

その言葉を最後に白雪は目を閉じて水面下に沈んでいった

「白雪ぃーーーー！」

キンジが大声で呼ぶも白雪は下を向いたまま沈んでいく。キンジが逃げ易いように自分の事を諦めてくれるように自ら命を絶つつも

りだ

「白雪っ……」

キンジは白雪に危機なんて迫ってない。ボディガードの仕事が始まってからずっとそう思っていた。アリアの警告だってろくに聞かずに突き放そうとし、レンに遠まわしに警戒する様に言われて一応は警戒をしていた。いや、したつもりになっていただけで実は警戒なんてしていなかったのだろう。現に、超能力持ちを捉えるための対超能力者用の手錠すら用意していなかった。自体が動いた後も自分は何も出来ずにレンやアリアに頼りっぱなし。俺一人じゃ何も出来ない状態だ

「・・・っ！」

今更になってその事を後悔する。……それと同時に、

「ふざけんな！」

そう叫ぶと同時にキンジは息を限界まで吸い込み、潜水する。こと此処に至ってキンジは覚悟を決める。自分の後を追いかけてきたキンジに白雪が目を見開く。そしてキンジはマバタキ信号（ウインキング）でこう伝える『吸え』と、そしてそのまま白雪と唇を重ねる。人工呼吸で白雪を助け、そして自分の持つ最低で最高の切り札を切る為に

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5162u/

緋弾のアリア～瞬光の刃

2011年12月25日01時52分発行